国立病院機構　鹿児島医療センター

臨床研究部業績年報　１７号

平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月

国立病院機構　鹿児島医療センター
臨床研究部

はじめに

臨床研究部業績年報 17 号の発刊にあたって

平成２８年度臨床研究部業績年報　第１７号が出来上がりました。

平成１１年に始まり、平成２８年で１７年経過しました。当時と比べると医師数を始め、職員数が増え、かなり大きな組織となってきました。平成２８年度の国立病院機構内臨床研究活動実績は２９位で、例年通りでした。平成 29 年７月、院長に就任以降、４か月弱、各医局、各部署の仕事ぶりを観察してきました。かなり専門意識が高く、良い意味でプライドを持ち、規範となる医療を行っていると感じています。臨床に関しては Top クラスの診療を提供しており、急性期、高度急性期医療に対する地域貢献度は高いと思います。研究については、国内外、多くの発表等を行っていますが、今回は論文数（欧文１４編、和文 11 編）が少なかったようです。ただ、鹿児島大学連携大学院でもある当院には、大学院生３名が在籍中で、博士号を目指し、日夜研究を続けていますし、吉永正夫先生の論文が平成２９年国立病院機構優秀論文賞にノミネートされています。その中でもインパクトファクターは 15.064 と他の論文を大きく引き離しています。研究に対する意識も高く、ポテンシャルは計り知れず、今後の研究活躍に期待したいと思います。

研究部をまとめ、けん引している城ケ崎倫久研究部長の働きには脱帽します。今、あらゆる研究が倫理問題や個人保護法など、昔と比べかなり厳しい時代になってきました。手続き等も煩雑化し、パイロットスタディすら困難な状態です。その中できちんと理解し、あらゆる問題に抵触しないかをチェックし、職員を導いているようです。彼の介入がなければなかなか研究も進まないと思います。彼の下で研究分野が益々発展されんことを希望します。特に若いスタッフには研究や仕事をまとめ、報告する面白みを教えてあげたいものです。

来年度は鹿児島逓信病院の診療医療機能移転に伴い病床数も増え、ますます、鹿児島の中心な病院として貢献しなければなりませんが、臨床はもちろん、研修・教育のできる病院としてもっと充実しなくてはなりません。良い教育・良い研修、良い研究ができてこそ、真の病院と言えると思いますが、「病院らしくなったね」と言われるように私も環境を充実していきたいと考えています。臨床・研究で実績を上げ、当院から巣立っていく良い医療人を育てたいと思っています。近い将来には現実的になると信じています。

平成 29 年 10 月

独立行政法人国立病院機構鹿児島医療センター
院長　田　中　康　博

目次

はじめに

【Ⅰ】　国立病院機構鹿児島医療センター臨床研究部概況 …… 1

【Ⅱ】　活動報告
平成 28 年度　研究テーマ …… 6
研究概要 1：臨床研究部門 ……18
研究概要 2：臨床部門 ……21
研究概要 3：看護部門 ……31
研究概要 4：看護学校 ……31
研究概要 5：コメディカル部門 ……32

【Ⅲ】　原著
欧文原著 ……33
和文原著 ……40

【Ⅳ】　著書・総説 ……42

【Ⅴ】　学会報告 ……44

【Ⅵ】　学術講演 ……68

【Ⅶ】　研究費助成報告書 ……74

【Ⅷ】　助成金による研究 ……75

【Ⅸ】　治験実績 ……85

【Ⅹ】　院内学会 …… 101

編集後記 …… 116

【Ⅰ】 国立病院機構 鹿児島医療センター 臨床研究部 概況

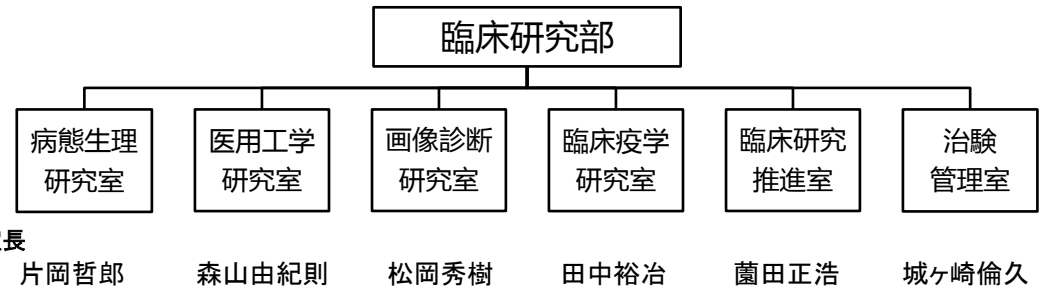
臨床研究部長　城ヶ崎　倫久

臨床研究部の設置は平成 11 年 10 月 1 日である。

組織として臨床研究部長の総括のもとに以下の研究室を設置している。

1. 病態生理研究室
2. 医用工学研究室
3. 画像診断研究室
4. 臨床疫学研究室
5. 臨床研究推進室
6. 治験管理室

平成 28 年度の臨床研究部の各室の体制は以下に示す通りである。



沿革

臨床研究部は平成 11 年 10 月に設置された。当初は病態生理研究室、医用工学研究室、画像診断研究室、臨床疫学研究室、治療評価研究室の 5 室で組織されていたが、平成 19 年に、治療評価研究室を臨床研究推進室と名称変更を行った。さらに、平成 25 年に治験管理室を加え 1 部 6 室で活動している。

鹿児島大学大学院歯学総合研究科

当院は鹿児島大学の連携大学院となっている。平成 21 年 4 月 1 日より先進医療学講座（連携講座）生理活性物質制御学に当院検査科の梅橋功征君と山本将義君が入学して、現在在学中である。

院内学会

平成 29 年 3 月 4 日(土)午前、第 4 回鹿児島医療センター院内学会を開催した。19 題の発表があった。参加者は総数 98 名（医師 24 名、看護部 22 名、薬剤部 9 名、検査科 11 名、放射線科 9 名、リハ室 1 名、栄養士管理室 4 名、事務部 6 名、看護学校 12 名であった。プログラム、要旨については本業績集巻末に示す。

研究業績評価

国立病院機構の臨床研究部の研究概要については、機構本部から毎年の業績評価を受けている。その業績評価項目は、1．国立病院機構が推進している治験、EBM 推進のための臨床研究等　2．競争的資金獲得額　3．特許・知的財産収入　4．業績発表、独自研究の 4 つのカテゴリーに分かれており、それぞれが小項目に分かれていて、ポイントが付与される。平成 28 年度の臨床研究活動実績評価は 771.428 ポイントであった。全国の国立病院機構の中では 29 位であった。

次頁に平成 28 年度の当院の臨床研究活動業績評価票を示す。

臨床研究活動実績評価票（平成28年度実績報告分）

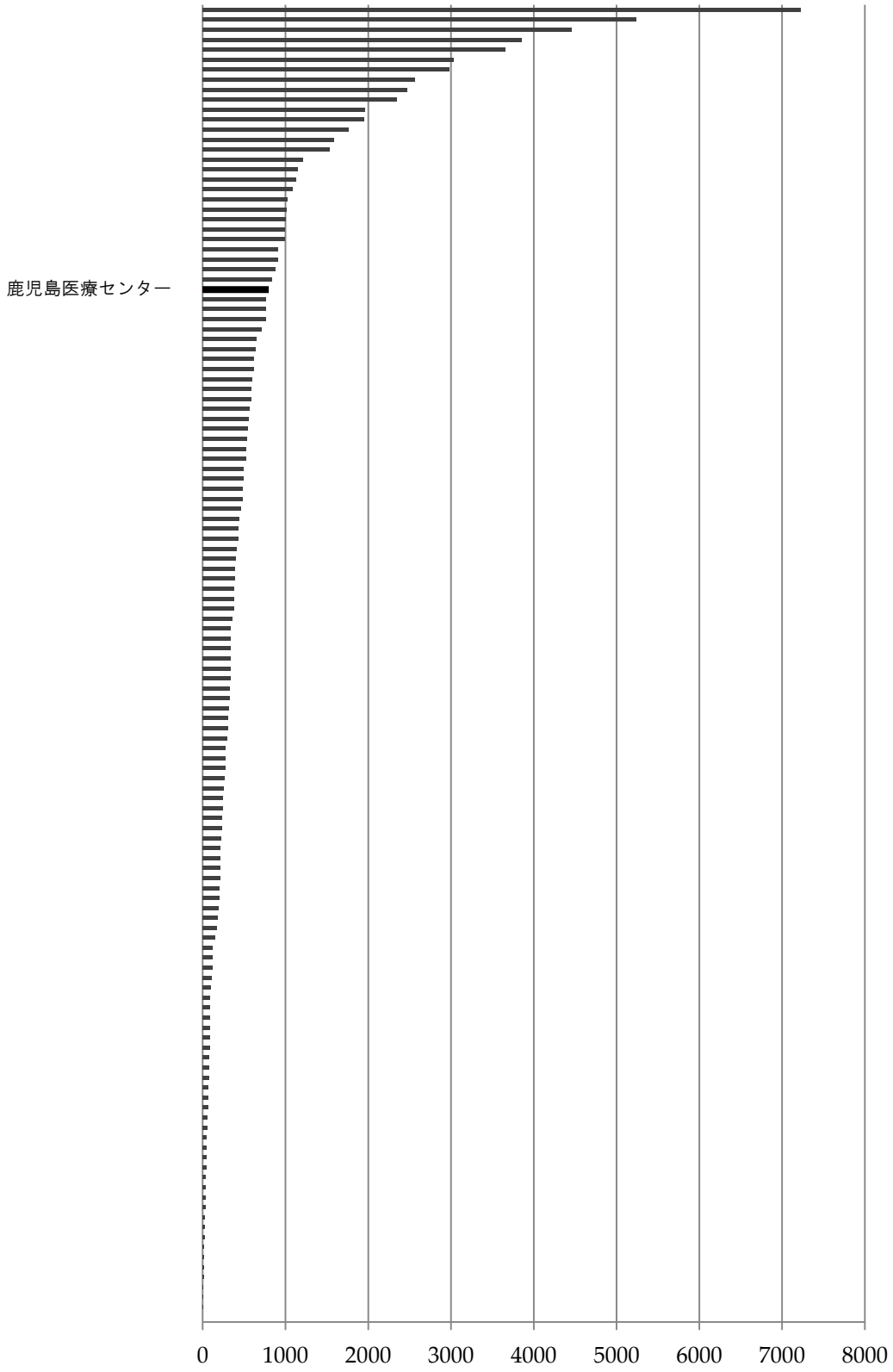
施設名	鹿児島医療センター	臨床研究部

※本票は施設名のみ入力して下さい。各係数およびポイントは様式に入力することで自動計算されます。

カテゴリ	評価項目	合計		ポイント	
					合計
国立病院機構が推進している治験、EBM臨床研究等	治験	7.0	症例	2.5	17.500
	医師主導治験			2.5	
	GCP準拠製造販売後臨床試験		症例	1.25	
	受託臨床研究(文書同意あり)	76.0	症例	0.5	38.000
	受託臨床研究(体外診断用医薬品)		症例	0.1	
	公費臨床試験	115.0	症例	0.5	57.500
	製造販売後調査（文書同意あり）	17.0	症例	0.5	8.500
	製造販売後調査（文書同意なし）	95.0	症例	0.25	23.750
	EBM推進研究等新規症例登録数（文書同意あり）	5.0	症例	0.25	1.250
	EBM推進研究等新規症例登録数（文書同意なし）		症例	0.1	
	NHOネットワーク共同研究　新規症例登録数 （文書同意のある介入・観察研究）	12.0	症例	0.2	2.400
	臨床研究などプロトコール作成	42.0	件	3	126.000
競争的資金獲得額	文部科学省関連研究費		万円	0.05	
	厚生労働省関連研究費	904.0	万円		45.200
	日本医療研究開発機構（AMED)委託研究費		万円		
	その他の財団などからの研究費		万円		
	民間セクターからの寄附金等	390.0	万円		19.500
特許・知的財産収入	特許等収入		万円	0.2	
	特許権出願		件数	10	
	実用新案権		件数	5	
	意匠権(出願、権利取得)		件数	2.5	
	特許取得件数		件数	50	
業績発表、独自研究	インパクトファクター	49.414	点	2	98.828
	英文原著論文（筆頭筆者以外）	6.0	本	3	18.000
	英文原著論文（筆頭筆者）	10.0	本	8	80.000
	和文原著論文（筆頭筆者以外）		本	1	
	和文原著論文（筆頭筆者）	7.0	本	1.5	10.500
	和文総説・著書（筆頭筆者以外）	2.0	本	1	2.000
	和文総説・著書（筆頭筆者）	11.0	本	1.5	16.500
	国際学会発表（演者のみ）	11.0	回	2	22.000
	国内学会発表（演者のみ） ＊総会、地方会、シンポジウム、一般演題含む	184.0	回	1	184.000
ポイント合計					771.428

臨床研究活動実績の合計ポイント（平成２８年度実績）

1	名古屋医療センター	センター	7221.460
2	大阪医療センター	センター	5234.290
3	東京医療センター	センター	4459.719
4	京都医療センター	センター	3854.254
5	九州医療センター	センター	3655.895
6	四国がんセンター	センター	3031.913
7	相模原病院	センター	2976.486
8	長崎医療センター	センター	2566.855
9	九州がんセンター	センター	2474.862
10	呉医療センター	臨床研究部	2345.839
11	岡山医療センター	臨床研究部	1961.575
12	近畿中央胸部疾患センター	センター	1952.230
13	福岡病院	臨床研究部	1757.078
14	災害医療センター	臨床研究部	1586.682
15	仙台医療センター	臨床研究部	1529.493
16	大阪南医療センター	臨床研究部	1212.464
17	金沢医療センター	臨床研究部	1151.742
18	北海道がんセンター	臨床研究部	1128.906
19	静岡てんかん・神経医療センター	臨床研究部	1084.511
20	千葉東病院	臨床研究部	1019.669
21	新潟病院	臨床研究部	1014.308
22	横浜医療センター	臨床研究部	1008.540
23	熊本医療センター	臨床研究部	994.404
24	東京病院	臨床研究部	990.608
25	別府医療センター	臨床研究部	907.732
26	北海道医療センター	臨床研究部	905.419
27	四国こどもとおとなの医療センター	臨床研究部	882.376
28	久里浜医療センター	臨床研究部	833.956
29	鹿児島医療センター	臨床研究部	771.428
30	岩国医療センター	臨床研究部	766.920
31	静岡医療センター	臨床研究部	763.842
32	三重病院	臨床研究部	759.944
33	刀根山病院	臨床研究部	717.724
34	三重中央医療センター	臨床研究部	654.188
35	高崎総合医療センター	臨床研究部	643.485
36	福岡東医療センター	臨床研究部	619.584
37	函館病院	臨床研究部	615.881
38	福山医療センター	臨床研究部	596.522
39	東広島医療センター	臨床研究部	583.866
40	姫路医療センター	臨床研究部	582.076
41	嬉野医療センター	臨床研究部	564.260
42	水戸医療センター	臨床研究部	554.508
43	西新潟中央病院	臨床研究部	540.088
44	仙台西多賀病院	臨床研究部	530.173
45	松江医療センター	臨床研究部	525.908
46	熊本再春荘病院	臨床研究部	521.982
47	山口宇部医療センター	臨床研究部	492.358
48	埼玉病院	臨床研究部	492.162
49	旭川医療センター	臨床研究部	485.044
50	千葉医療センター	臨床研究部	483.478
51	宇多野病院	臨床研究部	461.560
52	米子医療センター	臨床研究部	446.324
53	村山医療センター	臨床研究部	428.975
54	栃木医療センター	臨床研究部	426.786
55	東埼玉病院	臨床研究部	414.138
56	まつもと医療センター	臨床研究部	404.492
57	長良医療センター	臨床研究部	393.990
58	小倉医療センター	臨床研究部	391.168
59	渋川医療センター	臨床研究部	378.238
60	徳島病院	臨床研究部	377.752
61	東名古屋病院	臨床研究部	373.514
62	神戸医療センター	臨床研究部	361.250
63	肥前精神医療センター	臨床研究部	341.388
64	南和歌山医療センター	臨床研究部	340.362
65	長崎川棚医療センター	臨床研究部	336.015
66	南京都病院	臨床研究部	335.704
67	茨城東病院	臨床研究部	334.348
68	都城医療センター	院内標榜	333.868
69	浜田医療センター	臨床研究部	327.750
70	高知病院	臨床研究部	322.480
71	鈴鹿病院	臨床研究部	317.812
72	宇都宮病院	臨床研究部	305.168
73	南岡山医療センター	臨床研究部	301.752
74	下志津病院	臨床研究部	300.850
75	大牟田病院	臨床研究部	279.536
76	霞ヶ浦医療センター	院内標榜	277.516
77	佐賀病院	院内標榜	270.972
78	信州上田医療センター	臨床研究部	260.196
79	あきた病院	院内標榜	253.199
80	舞鶴医療センター	臨床研究部	242.034
81	豊橋医療センター	臨床研究部	240.788
82	広島西医療センター	臨床研究部	233.572
83	西埼玉中央病院	院内標榜	228.850
84	鳥取医療センター	臨床研究部	224.454
85	北陸病院	院内標榜	216.174
86	弘前病院	臨床研究部	214.362
87	関門医療センター	臨床研究部	212.220
88	愛媛医療センター	臨床研究部	210.946
89	沖縄病院	院内標榜	202.511
90	医王病院	院内標榜	198.908
91	南九州病院	院内標榜	191.290
92	西別府病院	院内標榜	176.850
93	琉球病院	院内標榜	166.750
94	青森病院	院内標榜	153.354
95	あわら病院	院内標榜	120.750
96	七尾病院	院内標榜	118.290
97	大分医療センター	院内標榜	116.030
98	山形病院	院内標榜	106.956
99	甲府病院	院内標榜	99.336
100	敦賀医療センター	院内標榜	90.000
101	柳井医療センター	院内標榜	89.118
102	さいがた医療センター	臨床研究部	86.790
103	榊原病院	院内標榜	86.300
104	天竜病院	院内標榜	84.894
105	東佐賀病院	院内標榜	84.000
106	米沢病院	院内標榜	80.068
107	和歌山病院	院内標榜	77.658
108	小諸高原病院	院内標榜	73.276
109	帯広病院	院内標榜	68.360
110	宮城病院	院内標榜	66.612
111	奈良医療センター	院内標榜	65.000
112	八雲病院	院内標榜	61.100
113	兵庫中央病院	院内標榜	54.500
114	宮崎東病院	院内標榜	48.900
115	東尾張病院	院内標榜	44.000
116	神奈川病院	院内標榜	42.938
117	岩手病院	院内標榜	41.314
118	熊本南病院	院内標榜	38.050
119	菊池病院	院内標榜	37.500
120	高松医療センター	院内標榜	36.354
121	静岡富士病院	院内標榜	33.122
122	下総精神医療センター	院内標榜	29.500
123	盛岡病院	院内標榜	27.900
124	東徳島医療センター	院内標榜	27.650
125	箱根病院	院内標榜	19.500
126	やまと精神医療センター	院内標榜	18.932
127	福島病院	院内標榜	18.500
128	いわき病院	院内標榜	15.000
129	釜石病院	院内標榜	10.000
130	賀茂精神医療センター	院内標榜	10.000
131	花巻病院	院内標榜	5.000
132	八戸病院	院内標榜	0.000


鹿児島医療センター
0
1000
2000
3000
4000
5000
6000
7000
8000

【Ⅱ】 活動報告

◇平成 28 年度研究テーマ

1. 動脈硬化性疾患の危険因子の性差と予防に関する多施設共同前向きコホート研究（ Nationwide Gender-specific Atherosclerosis Determinants Estimation and Ischemic Cardiovascular Disease Prospective Cohort Study: NADESICO）

（第一循環器内科）

冠動脈 CT を用いて冠動脈狭窄・石灰化を評価し、関連因子の性差を明らかにし、予防を検討する多施設共同研究である。現在 30 例を登録し、現在予後追跡調査中である。

2. 実臨床における Nobori バイオリムス A9 エリューティングステントの至適二剤併用抗血小板療法（DAPT）期間の検討（NIPPON）

（第一循環器内科）

Nobori バイオリムス A9 エリューティングステントを用いるステント留置術後の二剤抗血小板療法において、二つの異なる継続投与療法（6 か月と 18 か月）を比較し、6 か月後の投与期間での臨床成績が 18 か月の投与期間に劣らないことを証明する。

3. 非弁膜症性心房細動患者の脳卒中および全身性塞栓症に対するリバーロキサバンの有効性と安全性に関する登録観察研究（EXPAND study）

（第一循環器内科）

非弁膜症性心房細動患者における脳卒中および全身性塞栓症の発症に対する新規経口第 Xa 因子阻害剤リバーロキサバンの有効性と安全性を、実地診療下において確認する。

4. 冠動脈ステント留置術後 12 か月超を経た心房細動患者に対するワーファリン単独療法の妥当性を検証する多施設無作為化試験（OAC-ALONE Study）

（第一循環器内科）

心房細動を有し、冠動脈ステント留置術後 12 か月超を経た患者を対象として、ワーファリンとアスピリンの併用療法に対するワーファリンの単独療法の非劣性を、多施設前向き無作為化オープンラベル比較試験において評価する。

5. 高尿酸血症に対するキサンチンオキシダーゼ阻害剤フェブキソスタットの血管障害予防効果に関する多施設共同ランダム化比較試験（PRIZE study）

（第一循環器内科）

高尿酸血症患者にフェブキソスタットによる尿酸低下療法を実施する際の、頸動脈エコーで測定した頸動脈内膜中膜複合体肥厚（IMT)を指標とする動脈硬化進展抑制効果を評価する。

6. 心不全患者の実態調査及び予後に関する前向き観察研究（多施設共同研究）

（第一循環器内科）

心不全により入院した患者の原因疾患や重症度、治療内容を入院時および退院時に評価し、退院時の転帰を評価する。また、心血管疾患による入院や死亡をエンドポイントとし、予後調査を行うことを目的とする。

7. 2 管球 CT を用いた冠動脈狭窄、心筋虚血、心筋線維化の総合的評価に関する多施設研究（AMPLIFiED）

（第一循環器内科）

Coronary CTA、dynamic stress CTP、CTDE を含む包括的心臓 CT 検査の fractional flow reserve（FFR）の低下した血行動態的に有意な冠動脈狭窄の検出における診断能を明らかにすることを目的とする。第二の目的は、包括的心臓CTの予後予測における有用性について検討することである。

8. 心筋 SPECT 検査による心筋血流定量測定に関する研究

（第一循環器内科）

何種類かの心筋血流定量解析手法を用いて負荷（アデノシン負荷、または運動負荷）時や安静時の心筋血流指標および負荷による血流増加率を求め、最適な手法を選択するとともに、ソフトウェアの操作性や有用性を検討することを目的とする。

9. SGLT2 阻害薬による動脈硬化予防の多施設共同ランダム化比較試験（PROTECT）

（第一循環器内科）

SGLT2 阻害薬（イプラグリフロジン）を投与するイプラグリフロジン群と SGLT2 阻害薬を投与しない対照群とで、頸動脈内膜中膜複合体肥厚（IMT）による動脈硬化、糖・脂質代謝、血圧、心血管機能の比較検討と安全性評価を行う。

10. 日本人糖尿病合併冠動脈疾患患者における積極的脂質低下・降圧に関する観察研究

（第一循環器内科）

日本人の糖尿病合併冠動脈疾患患者を対象とした、脂質および血圧の低下とアウトカム（心筋梗塞、脳卒中、死亡）の関連をみる前向き観察研究である。

11. 日本人糖尿病合併冠動脈疾患患者における積極的脂質低下・降圧療法と標準治療のランダム化比較試験

（第一循環器内科）

日本人の、心筋梗塞や不安定狭心症など急性冠症候群の既往を持つ糖尿病合併冠動脈疾患患者を対象とした、積極的脂質低下、降圧療法と標準治療の比較を行う、医師主導型多施設共同、オープンラベル、ランダム化並行群比較試験である。

12. 大動脈瘤/大動脈解離患者の実態調査および予後に関する前向き観察研究

（第一循環器内科）

大動脈瘤もしくは大動脈解離により通院した患者について、原因疾患や臓器障害の程度、治療内容を評価する。また、臓器合併症による入院や死亡をエンドポイントとし予後調査を行うことを目的とする。

13. 動脈硬化を基盤とした虚血性心臓病における新規血液マーカーの確立

（第一循環器内科）

心臓を栄養する冠動脈内に動脈硬化による狭窄病変が形成されることで、虚血性心臓病（IHD)が発症する。現在、カテーテルを用いた冠動脈造影検査や、MDCT を用いた冠動脈造影 CT 検査により、冠動脈狭窄病変の有無を評価できるようになっているが、血管内治療を有するような動脈硬化病変、特に脆弱な動脈硬化病変を、採血により簡易に検出できるような有用なマーカーは存在しない。本研究の目的は、こうした動脈硬化病変を基盤とした虚血性心臓病をより鋭敏に検出できるような新規血液マーカーを確立することである。

14. 1･2 世代薬剤溶出性ステント留置後のステント血栓症に関するレトロスペクティブ（REAL-ST）

（第一循環器内科）

第 2 世代 DES 留置後にステント血栓症を発症した症例を後向きに多施設で登録し、コントロール群と比較することで、ステント血栓症の危険因子や臨床予後を検討する。また、第 1 世代 DES のステント血栓症を発症した症例も同様に登録し、第 2 世代 DES との臨床的背景や臨床的予後の違いを比較検討する。

15. SATAKE･HotBalloon カテーテル使用成績調査＜薬剤抵抗性を有する再発性症候性の発作性心房細動＞

（第二循環器内科）

登録中である。

16. 脳卒中既往患者を対象とした厳格降圧療法の二次予防効果を検討する大規模臨床研究（RESPECT Study）

（第二循環器内科）

登録中である。

17. ペースメーカ植込み患者におけるペーシング部位の相違と予後比較　鹿児島県内関連病院での多施設共同研究（K2-registry）

（第二循環器内科）

登録中である。

18. 本邦における心血管インターベンションの実態調査（J-PCI、J-EVT/SHD）

（第二循環器内科）

登録中である。

19. 植込み型除細動器（ICD）、CRT-D 症例の WEB 症例登録（JCDTR）

（第二循環器内科）

登録中である。

20. 心房細動を合併する冠動脈疾患症例に対するアピキサバン併用下 DAPT 投与期間に関する医師主導型臨床研究（SAFE-A）

（第二循環器内科）

登録中である。

21. 冠攣縮性狭心症・微小血管狭心症・たこつぼ心筋症に関する登録予後調査

（第二循環器内科）

登録中である。

22. 心房細動カテーテルアブレーションを施行予定の非弁膜症性心房細動患者を対象に、心房細動アブレーション周術期におけるダビガトランの安全性及び有効性をワルファリンを対照薬として比較する前向き、多施設共同、並行群試験

（第二循環器内科）

現在解析中である。

23. 非弁膜症性心房細動患者の脳卒中および全身性塞栓症に対するリバーロキサバンの有効性と安全性に関する登録観察研究（EXPAND study）

（第二循環器内科）

現在解析中である。

24. 心不全患者の実態調査及び予後に関する前向き観察研究（多施設共同研究）

（第二循環器内科）

登録中である。

25. 冠動脈疾患患者に対するピタバスタチンによる積極的脂質低下療法または通常脂質低下療法のランダム化比較試験（REAL-CAD）

（第二循環器内科）

現在解析中である。

26. 非弁膜症心房細動を有する後期高齢患者を対象とした前向き観察研究（ANAFIE Registry）

（第二循環器内科）

登録中である。

27. 経大動脈弁口からの僧帽弁形成 edge-to-edge の有効性の検討

（心臓血管外科）

総計 9 例に達した。学会発表検討中である。

28. 感染性心内膜炎外科治療～自己心膜パッチ形成術症例の検討～

（心臓血管外科）

video にまとめて学会発表準備中である。

29. MICS 僧帽弁形成術-Imbrication technique の有効性検討-

（心臓血管外科）

右肋間小開胸による僧帽弁形成術治療も 20 例に達した。その内 imbrication technique を用いた症例の遠隔成績を正中切開群と比較した。内容は胸部外科学会九州地方会(佐賀、7 月）にて発表した。

30. open stent graft を使用した弓部置換術

（心臓血管外科）

弓部大動脈瘤に使用した open stent graft 41 例の経験を第 46 回日本心臓血管外科学会総会（名古屋）にて発表した。さらに注意すべき合併症に関して現在論文作成中である。

31. TEVAR 症例の適応拡大

（心臓血管外科）

大動脈解離症例の検討中である。

32. 新規開発のマイクロチップ式血流下血栓形成能解析システム（**T-TAS®**）を用いたリバーロキサバンの薬効評価（多施設共同研究）

（脳血管内科）

非弁膜症性心房細動に対し、リバーロキサバンの適応となる患者で、リバーロキサバンを新たに処方される患者を対象として、投与前ならびに投与後の血液を採取し、血栓形成能を T-TAS を用いて解析する。これによりリバーロキサバンの薬効モニタリングにおける T-TAS の有用性を検討する。本年度から研究を開始し、登録を進めている。

33. 脳動脈解離に対する内科的治療に関する研究

（脳血管内科）

特に若年者の脳卒中の原因として重要な脳動脈解離において、脳虚血で発症する未破裂脳動脈解離症例の治療法は確立されていない。本研究では同病態の治療方針確立を目的に、脳虚血で発症し解離性動脈瘤を有さない脳動脈解離症例を対象に前向き登録を行い、抗血栓作用と内膜保護作用を有するシロスタゾールを投与し、その安全性と再発予防効果について検証する。現在多施設共同での登録を行っており、症例集積中である。

34. 非弁膜症性心房細動とアテローム血栓症を合併する脳梗塞例の二次予防における最適な抗血栓療法に関する多施設共同ランダム化比較試験（**Optimal Antithrombotic Therapy in Ischemic Stroke Patients with Non-Valvular Atrial Fibrillation and Atherothrombosis**：**ATIS-NVAF)**

（脳血管内科）

本研究では、非弁膜症性心房細動（NVAF）とアテローム血栓症を合併する脳梗塞例を対象として、ランダム化比較試験により、抗凝固薬と抗血小板薬の併用療法と抗凝固薬単独療法の虚血性および出血性イベント発生の抑制効果を比較し、本邦におけるこのような複合症例に対する適切な抗血栓療法を明らかにする。本年度は研究準備、症例登録準備を行い、来年度から症例登録予定である。

35. 脳卒中研究者新ネットワークを活用した脳・心血管疾患における抗血栓療法の実態と安全性の解明（**The Bleeding with Antithrombotic Therapy Study 2**：**BAT2)**

（脳血管内科）

抗血栓療法新時代における脳血管障害（無症候性頸部・頭蓋内動脈狭窄、無症候性脳梗塞等を含む）を中心とした循環器疾患患者において、経口抗血栓薬の使用実態を国内多施設共同の登録研究にて評価し、出血合併症を主とした安全性を解明する。本年度は研究準備、症例登録準備を行い、来年度から症例登録予定である。

36. 非弁膜症性心房細動を有する後期高齢患者を対象とした前向き観察研究（All Nippon AF In Elderly Registry：ANAFIE Registry）

（脳血管内科）

本研究は、非弁膜症性心房細動（NVAF）を有する後期高齢患者（75 歳以上）における抗凝固療法の実態及びその予後を明らかにするとともに、脳卒中／全身性塞栓症及び頭蓋内出血のリスク因子を特定し、直接経口抗凝固薬（DOAC）に最適な治療対象集団及びその使用法を明確にすることを主目的とする。また、副次的に NVAF に関連する種々のクリニカルクエスチョンについて検討する。本年度は研究準備、症例登録準備を行い、来年度から症例登録予定である。

37. 頚部血管エコー検査による脳血管破格の評価に関する研究

（脳血管内科）

椎骨動脈起始部異常の有無や脳血管破格を評価することが、血管疾患評価や治療方針検討の上で重要であるが、非侵襲的検査では従来困難であった。当科では頚部血管エコー検査による評価が有用である可能性を指摘し、これまで学会および欧文報告している。今後前向きに症例登録を行い、同検査の有用性についてさらなる検討を行う。

38. INVOS の値と MRI や血管造影所見との関連性についての研究

（脳血管内科）

脳梗塞超急性期症例における血管内治療（血栓回収療法）において、INVOS（無侵襲混合血酸素飽和度監視システム）を用い、主幹動脈閉塞症例における検査を行うことにより、適切な症例選択、及び治療効果や過灌流障害の予測が可能であることを想定し、前向きに症例登録を行い、検討を行う。現在は症例蓄積中である。

39. MRI の ASL 画像と臨床的経過や診断との関連性についての研究

（脳血管内科）

急性期脳梗塞症例において、脳血流の状態、脳組織の可塑性について評価することが血行再建療法の効果および安全性を評価する上で重要であるが、これまでは造影剤を用いた侵襲的評価のみがこれを可能としていた。今回は MRI の ASL 法を用いて血流状態を評価することにより、急性期血行再建療法の効果、安全性について推測可能かどうかを検討する。なおあわせて、脳血管障害の鑑別疾患として挙げられるてんかん発作の鑑別としても有用であるかについても検討を行う。現在は症例蓄積中である。

40. 高齢者の出血性脳卒中に対する外科治療の有用性について

（脳神経外科）

近年脳卒中患者においても高齢化が進んでいる。従来、高齢を理由に手術適応から除外されていたが、手術適応となるケースが明らかに増えている。治療成績や問題点について検討する。現在症例蓄積中である。

41. 特発性正常圧水頭症の治療

（脳神経外科）

特発性正常圧水頭症という疾患が以前より注目されており、ガイドラインも作成されている。治療方法、使用デバイス、治療成果等について検討する。現在症例蓄積中である。

42. 慢性硬膜下血腫の再発について

（脳神経外科）

慢性硬膜下血腫は一般的な話として再発の可能性のある疾患であるが、再発に抗血小板薬や抗凝固薬の有無、活動性がどのように関与するか検討する。現在症例蓄積中である。

43. 小児期心筋症の心電図学的抽出基準、心臓超音波学的診断基準の作成と遺伝学的検査を反映した診療ガイドライン作成に関する研究（平成 27 年度難治性疾患政策研究事業領域別基盤研究分野）

（小児科）

研究進行中である。

44. 遺伝性不整脈疾患の遺伝子基盤に基づいた病態解明と診断・治療法の開発に関する研究（平成 27 年度難治性疾患政策研究事業領域別基盤研究分野）

（小児科）

研究進行中である。

45. 遺伝子診断に基づく不整脈疾患群の病態解明および診断基準・重症度分類・ガイドライン作成に関する研究（平成 28 年度難治性疾患政策研究事業領域別基盤研究分野）

（小児科）

研究進行中である。

46. 未治療の多発性骨髄腫疾患を対象とした Elotuzmab/レナリドミド/低用量デキサメタゾン併用療法とレナリドミド/低用量デキサメタゾン併用療法のランダム化オープンラベル国内第 2 相臨床試験

（血液内科）

1 例登録した。

47. DPP-4 阻害薬の差別化～心血管バイオマーカーへの効果について～

（糖尿病・内分泌内科）

論文化して掲載済みである。

48. 周術期血糖管理用インスリン持続静注アルゴリズムの開発

（糖尿病・内分泌内科）

現在研究を継続中、かつ現在論文を作成中である。

49. 糖尿病における効果的、効率的な患者教育の包括的検討

（糖尿病・内分泌内科）

「糖尿病セルフケアに関する運動自己効力感尺度作成の試み」のタイトルで論文化雑誌「糖尿病」に掲載された。今後も研究を継続していく予定である。

50. 糖尿病患者下肢爪白癬に対するオゾンナノバブル水を用いた足浴効果の検討

（糖尿病・内分泌内科）

現在研究継続中である。

51. SGLT2 阻害薬の効果並びに至適使用方法の検討

（糖尿病・内分泌内科）

論文化して掲載済みである。

52. J-LINK study(Japanese study of Linagliptin for type 2 diabetes patients with NAFLD in Kagoshima) NAFLDを有する日本人2型糖尿病患者に対するリナグリプチン研究

（糖尿病・内分泌内科）

現在研究継続中である。

53. SU 薬の差別化

（糖尿病・内分泌内科）

論文化して掲載済みである。

54. ワルファリンによる抗凝固療法中における出血高危険度群内視鏡治療前エドキサバン置換の有用性・安全性に関する多施設共同前向き研究

（消化器内科）

鹿児島大学消化器内科と、当院を含む鹿児島県内外の共同研究機関消化器内科が参加する多施設共同研究で、現在症例募集中である。

55. 鹿児島県内外における切除不能膵癌に対するアブラキサンの治療の実態調査（多施設共同研究）

（消化器内科）

当院を含む鹿児島、宮崎県下 29 施設が参加する多施設共同研究で、当院からは 5 症例を登録した。

56. 消化器外科緊急手術症例における術後死亡予測モデル CORES、NSQIP の比較検証試験（NHO EBM 研究）

（外科）

平成 28 年度 22 例を登録した。

57. 経会陰式前立腺針生検の採取本数と前立腺癌陽性率、PSA 値との相関、および全摘標本での陽性部位との相関性について

（泌尿器科）

平成 28 年 3 月から平成 29 年 2 月まで 117 例の前立腺生検を行った（仙骨麻酔下、経直腸エコーを用い経会陰式）。陽性率は約 57.3%であった。今後、PSA 値との相関、全摘標本での検討を行っていきたい。

58. 進行膀胱癌に対する新しい化学療法の有用性について～GC 療法とshort M-VAC 療法の比較検討～

（泌尿器科）

M-VAC 療法にかわり、GC 療法は進行性尿路上皮癌において現在ファーストラインの治療になっていて、導入のほとんどが GC 療法になっているのがここ数年の動きである。今後、それぞれのレジメンにおいて無効例、再発例でスイッチ療法を行い、奏効率など検討していきたい。

59. 局所進行子宮頚癌根治放射線療法施行例に対する UFT による補助化学療法のランダム化第Ⅲ相比較試験

（婦人科）

症例を本年度 2 例登録しフォロー中である。

60. Randomized, Double-blind, Placebo-controlled Trial of Z-100 plus Radiation Therapy in Patients with Locally Advanced Cervical Cancer - A Phase 3 trial

（婦人科）

症例を本年度 2 例登録しフォロー中である。

61. ベバシズマブ既治療のプラチナ製剤抵抗性再発の上皮性卵巣がん、卵管がん、原発性腹膜癌における化学療法単剤に対する化学療法＋ベバシズマブ併用のランダム化第Ⅱ相比較試験（婦人科悪性腫瘍研究機構：JGOG3023）

（婦人科）

現在症例登録中である。

62. 頭頸部癌治療における治療法による予後と QOL に関する研究

（耳鼻咽喉科）

頭頸部進行癌治療において、手術治療、化学放射線治療等の治療法による予後と治療後の QOL について検討している。予後については、従来の報告とあまり差は見られないが、QOL については手術治療が化学放射線治療に比較して従来の報告のように劣るものではないようであり、さらに症例を集積中である。

63. 頭頸部癌治療における支持療法の有用性に関する研究

（耳鼻咽喉科）

頭頸部癌治療中に、リハビリ、口腔ケア、栄養管理や精神心理および社会的問題に関する緩和ケア等の支持療法を体系化すべく、多職種介入とチームカンファレンスを行っている。支持療法効果について、引き続き効果の確認、集積中である。

64. 希釈式自己血貯血が同種血輸血減少に及ぼす影響に関する研究

（麻酔科）

引き続き同種血輸血を出来るだけ避けるために手術中に希釈式自己血貯血を行っているが、このことが同種血輸血減少にいかほど影響をおよぼしているかを検討中である。

65. 挿管困難症に対する色々な挿管器具（スタイレトスコープ、エアウェイスコープなど）の有用性に関する研究

（麻酔科）

引き続き色々な挿管器具（間接喉頭鏡）が開発され臨床で使用され始めているので、その有用性や使いやすさなどを検討中である。

66. 脊髄クモ膜下麻酔効果に体位、腹圧が及ぼす影響に関する研究

（麻酔科）

今年度の日本麻酔科学会で発表済みである。引き続き症例数を増やして検討を重ねる予定である。

67. 当院の宗教的輸血拒否患者の検討

（麻酔科）

当院は宗教的輸血拒否患者が多く集まり、手術も多いので後ろ向きに手術内容、術前の使用可能製剤、輸血回避方法、転帰などを調査予定である。

68. ICU での血液浄化により入室日数が延びるかの検討

（麻酔科）

ICU での血液浄化を施行した患者としなかった患者で入院日数、重症度、転帰について検討し学会発表を行った。

69. クリアサイトという新しいモニターの有用性についての検討

（麻酔科）

低侵襲の循環系モニターとして新しい非観血的連続血圧測定と心拍出量測定ができる製品が開発され、それが観血的測定モニターと比較して有用性がみられるか、あるいは観血的モニターが必須の症例で代用できるか等について検討をしている。

70. RST の当院での介入状況の検討

（麻酔科）

RST が結成されて 5 年目になるのでその実績の評価を検討中である。

71. IgG4 関連疾患と血管周囲炎

（病理診断科）

平成 29 年病理学会春期総会にて発表予定である。

72. がん治療における支持療法としての口腔ケアの有効性の検討と医科歯科連携推進

（歯科口腔外科）

がん治療開始前から開始する口腔ケアによってもたらされる口腔衛生環境改善が術後局所合併症の軽減へ及ぼす効果、及び化学療法における口腔粘膜炎重症化へ及ぼす予防効果について分析した。また、平成 27 年度より鹿児島県よりがん拠点病院医科歯科連携推進事業の委託を受け、がん治療における医科歯科連携の推進を図った。

73. 入院患者に対する口腔ケアチーム介入とその効果に関する研究

（歯科口腔外科）

口腔ケアチーム活動後の看護師の口腔ケアに対する認識を検討し、その結果を第 13 回日本口腔ケア学会総会・学術大会で報告した。また、口腔ケアチーム介入による口腔衛生状態の改善と全身状態に対する効果について、第 27 回日本老年歯科医学会総会・学術大会で報告した。

74. HTLV-1 感染症の発症リスクの解明に関する研究

（腫瘍内科）

JSPFAD (HTLV-1 感染者コホート共同研究班）に参加し、約 10 名のキャリアの登録を行っている。検体収集はその後も順調に増加している。

75. 悪性軟部腫瘍の分子標的薬による治療

（腫瘍内科）

悪性線維性組織球腫、血管周皮腫、胞巣状軟部肉腫、脂肪肉腫、平滑筋肉腫、血管肉腫の治療を継続中である。

76. 甲状腺癌の分子標的薬による治療

（腫瘍内科）

根治切除不能な分化型甲状腺癌 10 例に治療を行った。うち 6 例は引き続き内服継続中である。さらに未分化癌の治療を 4 例で開始したが、内服継続中であった2例も死亡した。

77. 免疫チェックポイント阻害薬による各種癌の治療

（腫瘍内科）

悪性黒色腫、非小細胞肺癌、悪性リンパ腫を対象に治療を行っている。

78. JCOG1309 病期Ⅱ期およびⅢ期皮膚悪性黒色腫に対するインターフェロン β 局所投与による術後補助療法のランダム化比較第Ⅲ相試験

（皮膚腫瘍科・皮膚科）

現在、症例蓄積段階であり、当院では 1 症例をエントリーしている。

79. メラノーマ患者に対する PD-1 阻害薬の免疫学的作用を検討する多施設共同臨床研究

（皮膚腫瘍科・皮膚科）

Peripheral blood Th9 cells are a possible pharmacodynamic biomarker of nivolumab treatment efficacy in metastatic melanoma patients.として Oncoimmunology で報告した。

80. 経掌蹠病変の取扱いに関する 3 段階アルゴリズムの有用性を検討する多施設共同臨床研究

（皮膚腫瘍科・皮膚科）

現在、症例追跡段階であり、当院では 8 症例のデータを追跡している。

81. 皮膚悪性腫瘍(non-melanoma skin cancer)の Sentinel node 同定に関する研究

（皮膚腫瘍科・皮膚科）

進捗なし。

82. メラノーマの腋窩センチネルリンパ節転移陽性例に対する至適リンパ節郭清範囲を明らかにするための後方視的多施設共同研究

（皮膚腫瘍科・皮膚科）

Frequency of level II and III axillary nodes metastases in patients with positive sentinel lymph nodes in melanoma: a multi-institutional study in Japan として Int J Clin Oncol. 2016 Aug; 21(4): 796-800 で報告された。

83. ニボルマブによる有害事象の発現と末梢血リンパ球減少率の相関についての検討

（皮膚腫瘍科・皮膚科）

3 症例のデータを集積した。

84. 悪性黒色腫の新薬の副作用に関連する遺伝子の探索

（皮膚腫瘍科・皮膚科）

現在、症例蓄積段階であり、3 症例のデータ・サンプルを蓄積している。

85. 乳房外パジェット病における HER2 発現と予後に関する解析

（皮膚腫瘍科・皮膚科）

2 症例のデータ・サンプルを集積した。

86. 血管肉腫・乳房外パジェット病の発がんに関連する遺伝子の探索

（皮膚腫瘍科・皮膚科）

現在、症例蓄積段階であり、9 症例のサンプルを集積している。

87. 血管肉腫に対するエリブリン単剤療法の有効性に関する多施設共同前向き観察研究

（皮膚腫瘍科・皮膚科）

現在、症例蓄積段階であり、当院では 1 症例をエントリーしている。

88. 乳房外パジェット病患者の血清中ケモカインを用いた疾患予後予測に関する前向き観察研究

（皮膚腫瘍科・皮膚科）

現在、症例蓄積段階であり、1 症例のサンプルを集積している。

89. 悪性黒色腫における免疫応答解析に基づくがん免疫療法予測診断法の確立

（皮膚腫瘍科・皮膚科）

進捗なし。

研究概要 1：臨床研究部部門

病 態 生 理 研 究 室

室 長　**片岡 哲郎**

冠動脈形成術後に約6～12か月の抗血小板薬2剤併用が必要不可欠な状況となっており、至適抗血小板薬療法を追及するため、血小板凝集能検査を用いて調査を行い、関連学会での報告を行っている。出血リスクの高い患者を同定し、患者特異的な治療を提案している。

当院では今年度より開心手術が困難な重症大動脈弁狭窄症に対して、経カテーテル大動脈弁置換術（Transcatheter Aortic Valve Implantation）を開始することとなり、その症例報告、導入にあたっての取り組み、高リスク患者の臨床研究を開始する予定である。

医 用 工 学 研 究 室

室 長　**森山 由紀則**

今年度の TEVAR（21 例）、EVAR（18 例）については、大学心臓血管外科と第 1 循環器科の協力を得て着実に症例数を延ばしている。High risk の弓部大動脈瘤に対しては、3-debranch を伴う TEVAR を体外循環を使用せずに心拍動下に施行している。Atherosclerosis の著明な症例に関しては、脳梗塞のリスクが高いので open repair を第 1 選択としている。弓部湾曲への追従性の高い delivery system と device の登場が待たれる。下行大動脈瘤に関しては、真性瘤も解離病変も stent graft の良い適応であり、症例数は増加している。しかし、腹部大動脈の debranch を伴う TEVAR は手術侵襲も高く一期的に施行できる症例は限られ、大半を二期的に分割して施行している。現在まで 5 例経験しているが、1 例のみ MOF で失った。Open stent 症例は 1 年間で 23 例、これまでの総計 60 例を経験し、真性瘤と解離症例に分け、追加 TEVAR の時期、debranch 併施の必要性の有無など治療上の問題点を検討している。

画 像 診 断 研 究 室

室 長　**松岡 秀樹**

1. INVOS の値と MRI や血管造影所見との関連性に関する研究

脳梗塞超急性期症例における t-PA 静注療法の効果と安全性は確立しているが、脳主幹動脈閉塞による重症脳梗塞に対しては効果が不十分であり、近年血管内治療（血栓回収療法）がより有効であることが報告されている。しかしながら、治療介入が適切と思われる症例の選択、MRI 画像や血管造影検査所見による効果の予測、ならびに治療後の過灌流障害の予測などが困難な現状である。

当科では INVOS（無侵襲混合血酸素飽和度監視システム）を用い、主幹動脈閉塞症例における検査を行うことにより、適切な症例選択、及び治療効果や過灌流障害の予測が可能であることを想定し、前向きに症例登録を行い検討を行う。

2. 頚部血管エコー検査による脳血管破格の評価

近年大動脈解離や大動脈瘤の症例が増加するに従い、これらの病態に対する外科治療もしくはステント内装術が多く行われている。この治療適応や安全性を考慮する際

に、椎骨動脈起始部異常の有無を評価することが重要であるが、非侵襲的検査では従来困難であった。また、脳血管の胎生期遺残に伴う脳血管破格は、これ自体の病的意義は低いものの、脳動脈瘤との合併頻度が高いことなどから診断の意義は高い。

当科ではこれまで非侵襲的検査で評価困難であった椎骨動脈起始部異常、および脳血管破格の診断において、頚部血管エコー検査による評価が有用である可能性を指摘し、これまで報告している。今後前向きに症例登録を行い、同検査の有用性について検討を行う。

3. MRI の ASL 画像と臨床的経過や診断との関連性について

急性期脳梗塞症例において、脳血流の状態、脳組織の可塑性について評価することが血行再建療法の効果および安全性を評価する上で重要であるが、これまでは造影剤を用いた侵襲的評価のみがこれを可能としていた。今回は MRI の ASL 法を用いて血流状態を評価することにより、急性期血行再建療法の効果、安全性について推測可能かどうかを検討する。あわせて、脳血管障害の鑑別疾患として挙げられるてんかん発作の鑑別としても有用であるかについても検討を行う。

臨 床 疫 学 研 究 室

室 長　**田中 裕治**

1. 小児期心筋症の心電図学的抽出基準、心臓超音波学的診断基準の作成と遺伝学的検査を反映した診療ガイドライン作成に関する研究（平成 27 年度難治性疾患政策研究事業 領域別基盤研究分野）

2. 小児期院外心停止 (out-of hospital cardiac arrest; OHCA) 予防に関する研究

九州学校心臓検診協議会と協力し、九州管内における 20 歳未満の院外心停止 (OHCA) 例の調査を平成 23 年度より開始した。予後解析を行い、2016 年に Eur J Pediatr 誌に論文が掲載されている。

3. 日本における小児期肥満頻度の縦断的・横断的研究

文部科学省発行の学校保健統計調査報告書の身長体重相関表から小児の肥満頻度の縦断的・横断的変化について研究を続けている。
未成年者、特に幼児、小・中学生の糖尿病等の生活習慣病予防のための総合検診のあり方に関する研究（平成 25 年度難治性疾患政策研究事業領域別基盤研究分野）

4. 鹿児島における生活習慣病検診の効果に関する研究

鹿児島市においては 1992 年より小学生の肥満児童に対して無料の生活習慣病検診を行っている。この検診の費用対効果を含め、検診効果の検討を続けている。

臨 床 研 究 推 進 室

室 長　**薗田 正浩**

当院は循環器、脳卒中、がん専門施設としての臨床研究を行っている。特に循環器の基幹病院としての特色を生かして、EBM 推進研究、多施設共同研究、治験などに積極的に参加している。

国内学会および国際学会に積極的に参加しており、国際学会では、ESC CONGRESS

2016（欧州心臓病学会、ローマ、8 月）にて、「SDNN can predict left ventricular remodeling and prognosis in patients with acute myocardial infarction.」を発表した。ハンプとサムスカの使用方法についての検討をし、コスト面と在院日数等の検討をした。

研修医に積極的に学会発表をして頂いており、各科の研修医セッション（外科、内科、消化器内科等）では優秀賞を受賞した。

治　験　管　理　室

室 長　**城ヶ崎 倫久**

治験管理室は、室長に臨床研究部長、副室長に臨床研究推進室長、事務局長に薬剤科長、契約担当として業務班長、そして専任治験コーディネーター2 名（薬剤師 1 名、看護師 1 名）の構成で治験の推進に努めている。また、非常勤の治験コーディネーター4 名と治験専任事務官が 2 名配置されて、治験業務のサポートを担っている。EBM 研究補助者として 1 名配置されており、治験コーディネーターを支援している。

研究概要 2：臨床部門

第一循環器内科

統括診療部長　中島　均

平成 28 年の第一循環器内科の臨床実績は、カテーテル検査 393 例（POBA 22 例、STENT 203 例、ROTABLATER 6 例、PTA 3 例、PTRA 0 例、コイル塞栓 0 例）、ペースメーカー植え込み 24 例、ジェネレーター交換 12 例、EPS/ABL 0 例、ステントグラフト 16 例、心エコー 5,033 例、血管エコー 894 例、腎動脈エコー 69 例、経食道心エコー 49 例、心筋シンチ 1,024 例と循環器内科の実績としては、全国レベルにある。副腎静脈サンプリングにおいては 3 件と糖尿病・内分泌内科と共同して施行している。

大動脈瘤ステントグラフト治療では、腹部 8 例・胸部 8 例と平成 29 年 1 月より症例が倍増しており、経験をもとに適応を検討し、順調に症例をこなしている。

研究では、2 管球 CT を使用した冠動脈狭窄・心筋虚血・心筋線維化の総合的評価に関する研究（AMPLIFiED study)をはじめ、安定型冠動脈疾患を合併する非弁膜症心房細動患者におけるリバーロキサバン単剤療法に関する臨床研究（AFIRE study）、心不全患者の実態調査及び予後に関する前向き観察研究（多施設共同研究）、冠動脈ステント留置術後 12 か月超を経た心房細動患者に対するワーファリン単独療法の妥当性を検証する多施設無作為化試験（OAC-ALONE study）、高尿酸血症に対するキサンチンオキシダーゼ阻害剤フェブキソスタットの血管障害予防効果に関する多施設共同ランダム化比較試験（PRIZE study）など多数参加しており、現在データを集積中である。

第二循環器内科

第二循環器内科部長　薗田 正浩

虚血グループでは、従来の冠動脈および末梢動脈のインターベンションに力を入れている。平峯聖久先生が 6 月から 10 月まで小倉記念病院に国内留学（TAVI の準備）した。国内学会では、第 81 回日本循環器学会総会（平成 28.3.17～3.18）にて、東健作先生と平峯聖久先生が発表し、第 64 回日本心臓病学会学術集会（東京、平成 28.9.24）に伊集院駿先生が発表した。国際学会では、ESC CONGRESS 2016（欧州心臓病学会、ローマ、8 月）にて、東 健作先生と伊集院 駿先生が発表した。

不整脈グループは、毎週金曜日に不整脈カンファレンスと勉強会を多職種で行っている。カテーテルアブレーションでは、特に心房細動・心房粗動の件数が増加しており、ホットバルーンによる心房細動の治療を開始した。また、南九州で初めて 6 月にエキシマレーザーによるリード抜去を開始した。平成 26 年 4 月から蔡 榮鴻先生が筑波大学に国内留学中（青沼和隆教授の教室）であったが、10 月に帰ってきた。国内学会では、第 63 回日本不整脈心電学会学術大会（札幌、平成 28.7.16）に、国際学会では、Asia Pacific Heart Rhythm Society 2016（ソウル、10 月）にて、田上和幸先生と山下恵里香先生が発表した。

心不全グループは、入院期間の短縮、再入院率の低下を目指しており、医師、看護師、その他のコメディカルを含む多職種でのチーム医療を行っている。心不全パンフレットを活用し、またハンプの使用の有無による検討、学会活動もしている。石川裕輔先生がハンプとサムスカの使用方法についての検討をし、コスト面からアプローチした。

平成 28.6.25、第 120 回日本循環器学会九州地方会の研修医セッションにおいて、西村時紘先生が「ベーチェット病に起因する大動脈弁置換後の人工弁台座動揺を長期経過観察した 1 例」の演題で発表し、見事に最優秀賞を受賞した。

心 臓 血 管 外 科

副院長　森山 由紀則

平成 28 年度は総数 232 例の開心術を経験した。右肋間小開胸による僧帽弁形成術は今年 8 例を経験し総計 22 例に達した。同時期の僧帽弁形成術全症例の内 20%を占める。初期の learning curve もそろそろ超えたと思われ、今後は積極的に三尖弁の処置も追加していく方針である。胸骨切開を避けるため術後の回復も早い。胸部外科学会九州地方会で発表した。経大動脈弁口からの僧帽弁形成術も症例を選んで施行している。High risk の AS、AR に伴う容量負荷や圧負荷による MR は中央部より中等度以上の逆流を来した例および弁尖の腱索断裂を合併した症例を中心に適応としている。現時点で 7 例を経験しているが、弁輪縫縮を伴わない手技の遠隔成績、僧帽弁輪の拡張程度の手術効果に及ぼす影響を検討している。高齢者の AS 症例も増えているが、従来手術困難と判断されていた例も含めて今後は TAVR へ移行する症例が増えると思われる。来期は hybrid 手術室も完成することもあり、これまで以上にカテーテル治療が安全に施行できる体制が整うものと思われる。

脳 血 管 内 科

医 長／脳卒中センター長　松岡 秀樹

脳血管内科では脳卒中急性期の診断、治療と病態解明を主要テーマとして臨床研究を行っている。

まず当科では日常診療において系統的な臨床研究の基礎資料を得るべく、平成 12 年以来、急性期脳卒中の全入院症例を電子化されたデータベースに登録している。

また大規模臨床試験にも積極的に取り組み、脳卒中研究者新ネットワークを活用した脳・心血管疾患における抗血栓療法の実態と安全性の解明（The Bleeding with Antithrombotic Therapy Study 2：BAT2)、非弁膜症性心房細動とアテローム血栓症を合併する脳梗塞例の二次予防における最適な抗血栓療法に関する多施設共同ランダム化比較試験（Optimal Antithrombotic Therapy in Ischemic Stroke Patients with Non-Valvular Atrial Fibrillation and Atherothrombosis：ATIS-NVAF)、非弁膜症性心房細動を有する後期高齢患者を対象とした前向き観察研究（All Nippon AF In Elderly Registry：ANAFIE Registry）、心原性脳塞栓症におけるヘパリン投与のタイミングと至適投与量に関する研究：OPT-HEPA 研究（NHO ネットワーク研究）などの多施設共同研究および受託研究に参加している。当科でプロトコール作成にも参画した「非心原性脳梗塞急性期における抗血小板薬多剤併用療法（アスピリン+シロスタゾール）の有効性と安全性に関する多施設共同ランダム化比較研究」においては症例登録を継続し、また独自の臨床研究として「マイクロチップ式血流下血栓形成能解析システム（T-TAS : Total Thrombus-formation Analysis System）を用いたダビガトランならびにリバーロキサバンの薬効評価の研究」を計画し、症例登録を行うとともに解析、論文化を進めている。さらに脳動脈解離に対する内科治療に関する観察研究、新規抗凝固薬投与症例の追跡研究なども進行中である

頚動脈エコー検査による脳血管破格や形成異常の診断 INVOS（無侵襲混合血酸素飽和度監視システム）を用いた急性期血栓回収療法の有効性の評価なども進行中である。

脳 神 経 外 科

医 長　谷口　歩

高齢者脳卒中に対する外科治療症例は当院に限らず、増加傾向であるが、対象疾患、合併症の有無、機能予後等について検討していきたい。

特発性正常圧水頭症に関しても全国的に手術症例は著増しており、当院の症例につい

ても検討要する必要がある。
当院の患者背景として循環器疾患を有することが極めて多く、抗血小板薬、抗凝固薬を服用されていることが多い。慢性硬膜下血腫、特にその後の術後再発との関連について検討したいと考えている。

小　児　科

医 長　田中 裕治

1．小児期心筋症の心電図学的抽出基準、心臓超音波学的診断基準の作成と遺伝学的検査を反映した診療ガイドライン作成に関する研究（平成 27 年度難治性疾患政策研究事業領域別基盤研究分野）

2．遺伝性心疾患の遺伝子解析に関する研究

遺伝性心疾患の中でも遺伝性不整脈疾患での検討を続けている。QT 延長症候群、QT 短縮症候群、Brugada 症候群、カテコラミン誘発性心室頻拍など突然死を起こしうる心疾患を対象に、遺伝子変異と臨床病型および予後との対比を行い治療に役立てることを目的に行っている。特に QT 延長症候群では責任遺伝子が明らかになれば適切な薬剤選択が可能になるため重点的に行ってきた。

平成 27 年 2 月現在、日本全国から 177 家系 313 名の遺伝子解析を行っている。結果は 2013 年に Circulation Arrhythmia and Electrophysiology 誌に採用され、2016 年には Eur Heart J 誌に掲載された。（Probability of diagnosing long QT syndrome in children and adolescents according to the criteria of the HRS/EHRA/APHRS expert consensus statement.）

3．未成年者、特に幼児、小・中学生の糖尿病等の生活習慣病予防のための総合検診のあり方に関する研究

(1) 包括的データ収集

平成 24 年度、平成 25 年度に幼児期から小・中学生 1,845 名より下記の包括的データ収集を行った。

1) 健診時計測値：身長、体重、腹囲、血圧
2) 血液データ収集：血液生化学、糖代謝関係、アディポカイン
3) 内臓脂肪量測定：内臓/皮下脂肪測定（インピーダンス法）
4) 血管硬化度の測定：脈波伝播速度測定 (Pulse wave velocity)
5) 縦断的身長/体重値収集：乳幼児健診、学校での各学年時
6) 本人/保護者の生活習慣調査：運動/食習慣、TV 視聴時間
7) 母親の妊娠中の尿糖等の調査：妊娠中の生活が及ぼす影響
8) 本人/保護者の実測歩数、本人の実測睡眠時間（1 週間）

(2) 介入試験の実施

これらのデータを基に平成 26 年度は 8 月 20 日に UMIN に介入試験登録 (ID: UMIN000014896)を行い、介入試験を行った。

介入試験名：未成年者、特に幼児、小・中学生の糖尿病等の生活習慣病予防のための総合検診のあり方に関する研究｛行動療法（生活習慣改善）による小学生の肥満予防と治療に関する研究｝

試験簡略名：小学生の肥満解消プロジェクト

試験デザイン：平行群間比較、ランダム化、オープン

介入方法　　介入 1: 休日に 1 万歩歩く

介入 2: スクリーンタイムを制限する
介入 3: コントロール（記録のみを行う）

(3) ガイドラインの作成
ボランティアからの包括的データおよび介入試験の結果から、小児期の生活習慣病予防のための一次、二次予防ガイドラインを作成し、関係諸学会、諸団体に配布予定である。また病院の HP に小児のメタボリックシンドローム－私たちは事実を伝えているか－を掲載している。（平成 24 年度循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）

血 液 内 科

血液内科部長　大塚 眞紀

現在急性白血病、悪性リンパ腫を中心とした血液疾患の診療を行っている。骨髄移植推進財団認定施設、臍帯血バンク認定移植施設となっており、全身照射も可能となった。無菌室はクラス 6 以上を 5 床、クラス 7 以上が 14 床を有している。造血幹細胞移植も積極的に行っており、平成 28 年度には 4 例の自己末梢血幹細胞移植と 5 例の同種幹細胞移植を施行した。臨床研究面では、例年通り国立病院機構血液疾患分野政策医療ネットワーク共同研究に参加している。また未治療多発性骨髄腫に対する Elotuzmab 投与の治験にも参加した。一方、標準的治療に抵抗性を示す悪性腫瘍患者を対象とする WT1 パルス樹状細胞療法についても院内外からの協力で治療例が増加してきている。

糖尿病・内分泌科

医 長　郡山 暢之

1　周術期血糖管理用インスリン持続静注アルゴリズムの開発
2. 糖尿病における効果的、効率的な患者教育の包括的検討
3. 糖尿病患者下肢爪白癬に対するオゾンナノバブル水を用いた足浴効果の検討
4. SGLT2 阻害薬の効果並びに至適使用方法の検討
5. J-LINK study (Japanese study of Linagliptin for type 2 diabetes patients with NAFLD in Kagoshima) NAFLD を有する日本人 2 型糖尿病患者に対するリナグリプチン研究

以上について、既に論文化した内容も今後も継続してデータを収集し、論文発表を行っていく予定である。

消 化 器 内 科

医 長　山路 尚久

1. 平成 28 年度は多施設共同研究 2 つに参加した。「ワルファリンによる抗凝固療法中における出血高危険度群内視鏡治療前エドキサバン置換の有用性・安全性に関する多施設共同前向き研究」は、鹿児島大学消化器内科と、当院を含む鹿児島県内外の共同研究機関消化器内科が参加する多施設共同研究で、現在症例募集中である。また、「鹿児島県内外における切除不能膵癌に対するアブラキサンの治療の実態調査」は、当院を含む鹿児島、宮崎県下 29 施設が参加する多施設共同研究で、当院からは 5 症例を登録した。

2. 学会発表を 3 演題行った。第 102 回日本消化器病学会総会（東京）では、小野医師が「クローン病におけるアポトーシス抑制因子 AIM の臨床的意義」について発表した。第 71

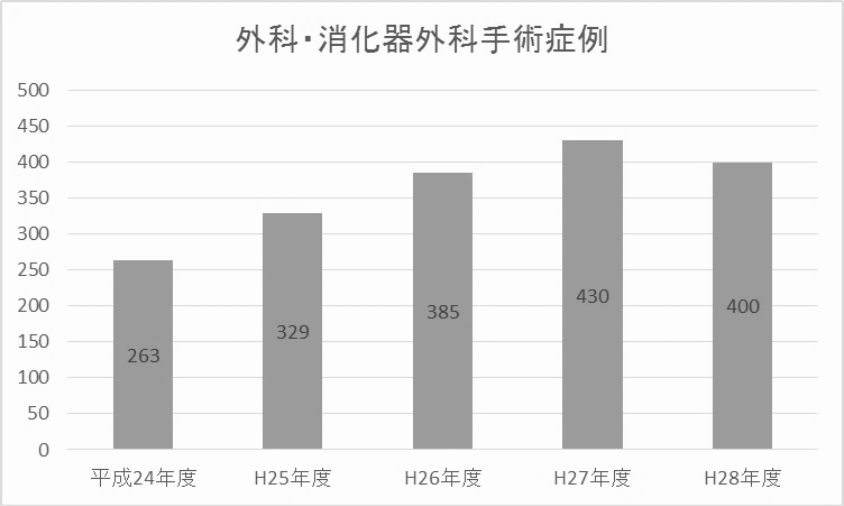
回日本大腸肛門病学会学術集会（三重）では、小野医師が「クローン病腸管切除術後症例において生物学的製剤が再手術に与える影響」について、当院と今村病院の症例を検討し発表した。また、第 108 回日本消化器病学会九州支部例会（熊本）では、研修医の是枝医師（共同演者：小野医師）が「メサラジンアレルギーによる脳梗塞を発症した潰瘍性大腸炎の 1 例」を発表し、研修医優秀演題奨励賞を授与された。

外　科

外科部長　菰方 輝夫

1．難治の肝胆膵がんに対する外科治療
2．胃・大腸がんに対する腹腔鏡手術
3．保険収載された腹腔鏡肝切除・膵切除
4．心大血管疾患を有した症例に対する外科治療
5．抗血栓剤を服用中の症例に対する外科治療

平成 28 年度の臨床業績は、原著英語論文 1、国際学会発表 1、国内学会・研究会発表 4 であった。手術実績は 400 例で、食道 7 例、胃・十二指腸 34 例（鏡視下 1 例）、小腸 25 例（鏡視下 0 例）、大腸 79 例（鏡視下 9 例）、肝・脾 15 例（鏡視下 4 例）、胆・膵 77 例（鏡視下 30 例）、その他 163 例（鏡視下 50 例）であり、平成 27 年度 430 例に比し 30 例減少した。内視鏡手術は 94 例、高難度内視鏡手術（胃・大腸・膵体尾部切除等）は 13 例、高難度肝胆膵手術（肝葉切除、膵頭十二指腸切除等）は 20 例で、以下に過去 5 年間の手術症例実績の推移を示す。



泌 尿 器 科

医 長　恒吉 研吾

当院では仙骨麻酔下、経直腸エコーを用い経会陰式に前立腺生検（12 本針生検）を行っている。平成 28 年 3 月から平成 29 年 2 月まで 117 例の前立腺生検を行った（仙骨麻酔下、経直腸エコーを用い経会陰式）。陽性率は約 57.2%であった。今後、PSA 値との相関、全摘標本での検討を行っていきたい。

GC 療法は進行性尿路上皮癌において現在ファーストラインの治療になっており、導入のほとんどが GC 療法になっているのがここ数年の動きである。今後、それぞれのレジメンにおいて無効例、再発例でスイッチ療法を行い、奏効率など検討していきたい。

婦　人　科

医 長　簗詰 伸太郎

婦人科癌についての治験および臨床試験を中心に行っている。治験では「Randomized, double-blind, placebo-controlled trial of Z-100 plus radiation therapy in patients with locally advanced cervical cancer-A phase 3 trial」が開始となり、症例を蓄積中である。その他、婦人科悪性腫瘍研究機構、西日本婦人科腫瘍グループ、北関東婦人科癌臨床試験コンソーシアムなどでの多施設共同試験に参加している。

耳 鼻 咽 喉 科

耳鼻咽喉科部長　松崎　勉

耳鼻咽喉科では、頭頸部癌診療と入院・手術が必要な耳鼻咽喉科領域疾患に対し、県内の医療機関と連携し診療にあたっている。耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域手術症例は、本年度も約 650 例を数えている。

頭頸部癌においては、予後および Quality of life に関する検討および耳鼻咽喉科・頭頸部外科医療の質向上のためのチーム医療について引き続き、臨床研究に取り組んでいる。

1. 頭頸部進行癌治療において、手術治療、化学放射線治療等の治療法による予後と治療後の QOL について検討し、QOL について手術治療が化学放射線治療に比較して従来の報告のように劣るものではないと考えられ、さらに症例を集積中である。また、分子標的薬の導入により、放射線治療や化学療法との併用により、進行癌や再発がんでの治療効果について、どのような治療法の組合せが良いかを検討しており、副障害対策や外来化学療法の体制を確立しつつある。

2. 頭頸部癌の診療において、精神心理的・臨床倫理的問題を検討するために多職種を加えたチームカンファレンスを行い、患者の自己決定を支えるための介入について、家族の支援について、その有効性について症例を重ねている。また、多職種介入による職員の満足度も引き続き調査研究中である。

3. 頭頸部がん治療に伴う合併症予防のための口腔ケアや機能低下予防のためのリハビリの介入の意義についても、引き続き検討中である。

4. 当院で治療した、希少症例や手術手技につき、学会誌等で報告している。

放 射 線 科

放射線科部長　内山 典明

「石綿関連疾患の画像診断に関する検討」について症例を集積中である。放射線治療は新型加速器導入より 3 年が経過し、耳鼻咽喉科、婦人科、泌尿器科を中心として悪性腫瘍の治療症例における治療効果についての研究を検討している。骨転移のある前立腺癌に対して、塩化ラジウムを用いる放射線治療が可能となり、適合症例の画像診断に関する研究を開始する予定である。

麻　酔　科

医 長　佐保 尚三

宗教的輸血拒否患者の使用可能製剤、輸血回避手技などを後ろ向きに検討中である。同種血輸血を出来るだけ回避するために手術中に希釈式自己血貯血を行っているが、このことがいかに同種血輸血の減少や血液凝固系、術後出血量への影響を及ぼすかを検討している。また、最近挿管困難症例対策として色々な挿管補助器具（間接喉頭鏡）が開発され臨床に導入されているので、それらの有用性を検討している。脊髄クモ膜下麻酔において、クモ膜下腔に投与した薬液の頭側への広がりに関しては不明なことも多く、体位や腹圧が薬液の頭側への拡大にいかなる影響を及ぼすかを検討中である。また、ICU での血液浄化を施行した患者としなかった患者で、入院日数、重症度、転帰について検討し、学会発表を行った。また、新しい低侵襲の非観血的血圧、心拍出量モニターの有用性について検討中である。

病　理　診　断　科

病理診断科部長　野元 三治

平成 15 年以降の心臓粘液腫の 23 症例を用い、浸潤している形質細胞について IgG4 関連で検討している。（鹿児島大学医歯学総合研究科との共同研究を始めている）また、IgG4 関連疾患として、血管周囲炎のみを来たした症例について学会にて症例報告を行う予定である。

歯 科 口 腔 外 科

医 長　中村 康典

がん治療開始前から開始する口腔ケアによってもたらされる口腔衛生環境改善が術後局所合併症の軽減へ及ぼす効果、及び化学療法における口腔粘膜炎重症化へ及ぼす予防効果についての研究を実施してきた。また、平成 27 年度より鹿児島県よりがん拠点病院医科歯科連携推進事業の委託を受け、がん治療における医科歯科連携の推進を行ってきた。現在も周術期の口腔機能管理についてがん治療患者に対する効果の検討は継続して行っている。また、本年度より心臓血管手術患者における周術期口腔機能管理の効果についての分析、研究を開始した。

院内口腔ケアについては、口腔ケアの充実に向けて口腔ケアチーム活動後の看護師の口腔ケアに対する認識、意識の変化の分析、検討を行い、口腔ケアの教育普及活動の課題を明らかにした。今後は得られた課題を踏まえ、口腔ケアチーム活動の改善を図っていく予定である。また、口腔ケアチーム介入による口腔衛生状態の改善や全身状態に対する効果に関する研究についても継続して実施していく予定である。

腫　瘍　内　科

腫瘍内科部長　魚住 公治

平成 25 年 4 月 1 日に腫瘍内科として診療を開始し、4 年目を終えた。4 年目も医師の増員は叶わず 1 名体制で診療を継続した。本年度も患者数は順調に増加し、外来患者は毎週 50 名前後、入院患者は 1 日あたり 10 名前後で推移している。 外来患者総数は約 2,300 名、入院患者総数は 90 名であった。患者内訳は、およそ血液腫瘍1割、胃癌・大腸癌 2 割、肺癌 1 割、肉腫 1 割、甲状腺癌 1 割、その他（乳癌、原発不明癌、食道癌、胆膵癌、悪性黒色腫、腎細胞癌、膀胱癌、胚細胞腫瘍、卵巣癌、頭頸部癌など）4 割となっている。昨年に

引き続き、様々な腫瘍の紹介が増加してきており、全身ほぼ全ての癌腫を診療している。今年度は同時性の重複がんの治療を 3 例行った. 今年度は昨年度以上に、特に分子標的薬による治療が増加したが、この傾向は今後も続くと考えられる。免疫チェックポイント阻害薬の治療件数も増加してきた. 化学療法を専門とする診療科として、より一層の診療レベルの向上を図りたい。

皮膚腫瘍科・皮膚科

医 長　松下 茂人

皮膚腫瘍科・皮膚科では以下の研究を主に多施設共同で推進しており成果がみられている。また当施設は JCOG（Japan Clinical Oncology Group）皮膚腫瘍グループのメンバーであり、1.のよう JCOG study にも参加している。

1. JCOG1309 病期 II 期および III 期皮膚悪性黒色腫に対するインターフェロン β 局所投与による術後補助療法のランダム化比較第 III 相試験

遠隔転移を有さない皮膚悪性黒色腫に対する根治手術後の病理組織学的病期 II 期および III 期の患者を対象とし、経過観察に対するインターフェロン β（IFN-β）を用いた術後補助療法の全生存期間における優越性を検証する。

2. メラノーマ患者に対する PD-1 阻害薬の免疫学的作用を検討する多施設共同臨床研究

免疫チェックポイント阻害剤である抗 PD-1 抗体（ニボルマブ）はメラノーマに対する新規薬物療法である。ニボルマブによるメラノーマの治療前後の患者の免疫状態を詳細に調べた研究は未だなく、また患者個体により効果に差があるという問題点もある。本研究は京都大学を中心とした共同研究であり、ニボルマブ投与前後で患者の血液を当院で採取し、採取した末梢血中の免疫関連バイオマーカー（次項に詳述）を京都大学で比較し、ニボルマブによるヒトの免疫への影響を詳細に解析する。また、この解析結果と、メラノーマ細胞の組織型や発現分子、患者の治療予後とを比較し、予後関連因子を調べる。そして、ニボルマブがメラノーマ患者において治療効果を発揮する詳細な免疫学的機序をより詳細に解明する。

3. 掌蹠病変の取扱いに関する 3 段階アルゴリズムの有用性を検討する多施設共同臨床研究

信州大学皮膚科が提唱した、硝石の母斑とメラノーマの鑑別で行われるダーモスコピー検査の 3 段階あるごり図ムの有用性を多施設の症例で検討することを目的とする。信州大学皮膚科を主管機関として、当院を含めた各参加施設において、カルテ上の臨床情報（病歴、年齢、性別、病変の掌蹠における部位・サイズ・ダーモスコピー所見・臨床所見・病理組織所見）を集積する。

4. メラノーマの腋窩センチネルリンパ節転移陽性例に対する至適リンパ節郭清範囲を明らかにするための後方視的多施設共同研究

本研究は国立がん研究センター中央病院を中心とした多施設共同研究であり、皮膚原発メラノーマの腋窩センチネルリンパ節転移例に対して至適な腋窩リンパ節郭清範囲を明らかにするために多施設におけるデータを集積し現況を明らかにすることを目的としており、Frequency of level II and III axillary nodes metastases in patients with positive sentinel lymph nodes in melanoma: a multi-institutional study in Japan として Int J Clin Oncol. 2016 Aug; 21(4): 796-800 で報告された。

５．皮膚悪性腫瘍（non-melanoma skin cancer）の Sentinel node 同定に関する研究

本研究では、皮膚悪性腫瘍（non-melanoma skin cancer）患者の摘出リンパ節を用いて、免疫染色法による検討を行い転移の有無を判定し、微小転移の有無を正確に判断して、適切なリンパ節郭清の決定を目指すことを目的とする。

６．ニボルマブによる有害事象の発現と末梢血リンパ球減少率の相関についての検討

本研究の目的は、切除不能な悪性黒色腫患者に対してニボルマブを使用した際に生じる様々な免疫関連副作用（irAE）を末梢血中のリンパ球減少率と相関するかを検討し、さらにこの現象で irAE を早期に診断することが可能であるかを明らかにすることである。

７．悪性黒色腫の新薬の副作用に関連する遺伝子の探索

本研究は、根治切除不能な悪性黒色腫に対する免疫チェックポイント阻害薬による副作用の発現を予測する簡便な検査方法を確立し、どの症例にこれら新薬が適切であるのかを判定できるようにするのが目的である。

８．乳房外パジェット病における HER2 発現と予後に関する解析

本研究は、乳房外パジェット病における HER2 蛋白の発現に関する検討を中心に行い、進行期症例における過剰発現の割合の検討や予後との関連、既存の治療の有効性に関する評価等を目的とする。

９．血管肉腫・乳房外パジェット病の発がんに関連する遺伝子の探索

血管肉腫や乳房外パジェット病の PD-L1 の発現状況とエクソンを解析し、発がん原因遺伝子や臨床的予後との相関を検討する。

１０．血管肉腫に対するエリブリン単剤療法の有効性に関する多施設共同前向き観察研究

Efficacy of Eribulin Monotherapy in Patients with Unresectable Angiosarcoma-A Multicenter Prospective Observational Study 軟部肉腫に対して適応を有するエリブリン(ハラヴェン®)について、日常診療において血管肉腫患者に対して用いられる際の有効性を評価することを目的とする。

１１．乳房外パジェット病患者の血清中ケモカインを用いた疾患予後予測に関する前向き観察研究

本研究は、乳房外パジェット病における血清中のマクロファージ関連因子を、外科的治療前後及び病期別に検討し、疾患の進行及び予後との関連を解析することにより、乳房外パジェット病の予後因子を探索することを目的とする。

１２．悪性黒色腫における免疫応答解析に基づくがん免疫療法予測診断法の確立

本研究は、がん免疫療法に感受性の高い患者（レスポンダー）と低い患者（ノンレスポンダー）を層別化するがん免疫療法の効果予測基盤を確立することを目的とする。

１３．メラノーマ患者に対する PD-1 阻害薬の免疫学的作用を検討する多施設共同臨床研究

進行期メラノーマに対してニボルマブ投与を行なった患者において治療効果と血中 Th9 数が相関することを解明し、Peripheral blood Th9 cells are a possible pharmacodynamic biomarker of nivolumab treatment efficacy in metastatic melanoma patients.として Oncoimmunology.で報告された。

研究概要 3：看 護 部 門

看護部長　上別府　昌子

院外発表 33 題。学術講演 2 題であった。今年度院外発表が増えたのは、国立病院総合医学会や国立病院看護研究学会学術集会が九州で行われたことが要因の一つになっている。今年も各病棟や専門領域での研究が多くあるので、院外発表に向けて準備していく予定である。これらの取り組みを看護実践に活かしていきたい。

平成 28 年度　院内看護研究発表

病棟	演　　題	発表者
東 2 病棟	ICU に勤務する看護師が一人前になるまでのストレス～卒後 4～8 年目看護師へのインタビューを通して～	岩正佳子
東 2 病棟	集中治療室勤務における男性看護師が感じる思いについて	出口喬一
東 3 病棟	未成年の子を持つ補助療法中の婦人科がん患者の役割遂行への思いとそれに対する看護援助	入江美紅
東 4 病棟	退院指導を受けた心臓手術後患者の思い ～退院後の後期高齢者へのインタビューを通して～	濱﨑博恵
東 5 病棟	経管栄養患者へ嚥下回診を取り入れた効果 ～誤嚥性肺炎の減少を目指して～	藤元亜里沙
東 6 病棟	在宅で慢性心不全患者に関わる地域医療スタッフへの質問紙調査～看護サマリーに記載する情報の検討～	中村　匠
東 7 病棟	心不全患者の療養指導における効果的アプローチ～6ステップ・メソッドに基づいた介入～	新村直子
西 3 病棟	がん患者の治療中の意思決定支援の場面で「ゆらぎ」を感じる看護師のその原因と支援方法	田山麻衣
西 4 病棟	がん看護における困難感への対処～がん看護 6 年目以上の看護師へインタビューを通して～	鶴森由華
手術室	アクションカードを用いた災害シミュレーション後の手術室看護師の意識	西園聖八
外　来	婦人科手術を受ける患者の術前不安の実態 ～患者背景別に分析して～	有元ゆり

研究概要 4：看 護 学 校

副看護学校校長　有村　優子

今年度は、看護教員の教育活動における取り組みを国立病院総合学会で 2 例、看護教員のキャリア発達に関する研究1例を日本看護科学学会学術集会で発表した。研究の成果は学生指導や教育方法の検討や看護教員の個々の成長支援に活かせるものであり、継続して研究的に取り組んでいきたい。

研究概要 5：コメディカル部門

薬　剤　部

薬剤部長　平山 俊一

平成 28 年度は、「ニカルジピン注射液による静脈炎発症の危険因子の解析」を第 40 回国立病院九州地区薬学研究会・総会、「呼吸サポートチーム（RST）における薬剤師の役割」を第 28 回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会、「バンコマイシン初回投与設計時における TDM ソフトと TDM ガイドライン投与量の比較検討」を宮崎・鹿児島地区薬学研究会、「ニカルジピン注射液による静脈炎発症の危険因子の解析と対応」および「呼吸サポートチーム（RST）における薬剤師の役割」を第 70 回国立病院総合医学会、「VCM 初回投与設計に対するソフトとガイドラインの比較検討」を第 1 回鹿児島県病院薬剤師会学術大会で報告した。

臨 床 検 査 科

検査科技師長　本山 眞弥

平成 28 年度は院内学会、研究会等の学会報告が 23 題あった。各々の担当分野のスキルアップを目的に活発に研究が行われた。

放 射 線 室

放射線技師長　本村　登

放射線室の研究テーマである画像処理技術と被ばく低減については引き続き検討を行っていきたい。MRI に関する研究も今後行っていきたい。

栄 養 管 理 室

栄養管理室長　淵脇 美保子

平成28年度は、前年度に引き続き「咽頭がん患者の栄養状態」に関する研究を充実させた。また、心不全チームでは、「低栄養患者へのアプローチ」や糖尿病チームにおいては「カーボカウントを用いた栄養食事指導の画一化と職種間連携」を充実させるための取り組み、また集団栄養食事指導においては、「効果的な生活習慣病教室」の分析を行い指導内容の充実につなげた。

臨 床 工 学 室

副臨床工学技士長　宮之下 誠

平成 28 年度は、学会にて 1 題、研究会などで 2 題の体外循環に関する発表を行った。現在、血液浄化分野の研究を検討中である。

【Ⅲ】　原　著

欧文原著　（以下、下線は当院職員）

1. **Kawaida K, Moriyama Y, Fukumoto Y, Ueno T.**
   Spontaneous Round-Shaped Left Atrial Hematoma.
   ***Intl J Angiol*; 25(5): e145-e146, 2016 Dec. (Epub 2015 Jul 31)**
   Abstract
   Spontaneously occurring left atrial hematoma as are very rare and most of them followed acute clinical course due to hemodynamic deterioration.We presented a case of gradually developing hematoma protruding into the left atrial cavity as a round mass, which was completely encapsulated with intact endocardial wall. Emergency surgery was successfully performed.Histopathological study demonstrated subendocardial-aged hematoma with papilary endothelial hyperplasia.

2. **Yoshinaga M, Kucho Y, Nishibatake M, Ogata H, Nomura Y.**
   Probability of diagnosing long QT syndrome in children and adolescents according to the criteria of the HRS/EHRA/APHRS expert consensus statement.
   ***Eur Heart J*; 37(31): 2490-2497, 2016 Aug. (Epub 2016 Mar 29).**
   Abstract
   AIMS:
   The present study aimed to determine the probability of diagnosing long QT syndrome (LQTS) in children and adolescents based on the HRS/EHRA/APHRS criteria for LQTS. We used data of a school-based electrocardiographic screening programme in Japan.
   METHODS AND RESULTS:
   The total numbers of subjects who participated in the screening programme between 2008 and 2013 in Kagoshima, Japan, were 33 051 first- and 34 751 seventh-grade students, aged 6 and 12 years, respectively. The screening process consisted of three steps of examination: the first screening, and the second and third examinations. Among the total subjects, 32 982 first graders (99.8% of the total) and 34 572 seventh graders (99.5% of the total) participated in the first screening. After the first, second, and third screening or examinations, the programme determined 10 first and 32 seventh graders as having a high probability of LQTS according to the HRS/EHRA/APHRS criteria for LQTS. The probability of diagnosing LQTS by the screening programme was 1:3298 (0.30/1000) and 1:1080 (0.93/1000) in first and seventh graders, respectively. During the study periods, three subjects of 7th graders were already diagnosed as having LQTS at the first grade. Therefore, the overall probability of diagnosing LQTS was 1:3298 (95% confidence interval, 1:2036 to 1:8673) and 1:988 (95% confidence interval, 1:742 to 1:1477) in first and seventh graders, respectively.
   CONCLUSION:
   This study shows important data on the probability of diagnosing LQTS as ~1:3300 in subjects aged 6 years and 1:1000 in those aged 12 years based on the HRS/EHRA/APHRS criteria.

3. **Hirabayashi M, Yoshinaga M, Nomura Y, Ushinohama U, Sato S, Tauchi T, Horigome H, Takahashi T, Sumitomo N, Shiraishi H, Nagashima M.**
   Environmental risk factors for sudden infant death syndrome in Japan.
   ***Eur J Pediatr*; 175(12): 1921-1926. 2016 Dec. (Epub 2016 Sep 23)**

Abstract
While the prevalence of sudden infant death syndrome (SIDS) has decreased worldwide, this decline has plateaued recently. Strategies are needed to resume the constant decrease of SIDS in Japan. A prospective electrocardiographic screening program for infants was performed between July 2010 and March 2011. Parents of 4319 infants were asked about environmental factors related to SIDS through questionnaires at a one-month medical checkup and one year. Parental awareness of prone position, smoke exposure, and breast feeding as environmental factors were 81.4 %, 69.0 %, and 47.8 %, respectively. The prevalence of laying infants exclusively in a supine position was 96.7 %. At the one-month medical checkup, smoking prevalence was 41.7 % in fathers and 2.1 % in mothers. Maternal smoking prevalence was significantly increased at one year after ($p < 0.001$). Multivariate regression analysis showed that risk factors for new or continued maternal smoking habits were maternal smoking habits at one month ($p < 0.001$), paternal smoking habits one year later ($p < 0.001$), and younger maternal age ($p = 0.02$).
CONCLUSION:
Most parents already avoid laying infants in the prone position, and parental smoking is still a SIDS risk concern in Japan. Smoking cessation programs should be further implemented for parents to decrease risks of SIDS in Japan. What is Known: • The prevalence of sudden infant death syndrome (SIDS) has decreased worldwide, however, this decline has plateaued recently. What is New: • Most infants were laid sleeping in the supine position (96.7 %) and were fed breast milk or a mix of expressed milk and formula (92.7 %), and 2.1 % of mothers smoked at the one-month medical checkup. • Maternal smoking prevalence significantly increased from the one-month medical checkup to one year later, and smoking mothers were more likely to feed infants by formula rather than breast milk. • Independent risk factors for new or continued maternal smoking habits included younger maternal age, maternal smoking habits at one month, and paternal smoking habits one year later.

4. **Suzuki K, Shinagawa A, Uchida T, Taniwaki M, Hirata H, Ishizawa K, Matsue K, Ogawa Y, Shimizu T, Otsuka M, Matsumoto M, Iida S, Terui Y, Matsumura I, Ikeda T, Takezako N, Ogaki Y, Midorikawa S, Houck V, Ervin-Hynes A, Chou T.**
Lenalidomide and low-dose dexamethasone in Japanese patients with newly diagnosed multiple myeloma: A phase II study.
***Cancer Science*; 107(5): 653-658. 2016 May. (Epub 2016 Mar 30)**
Abstract
BACKGROUND:
In the FIRST trial (MM-020), lenalidomide plus low-dose dexamethasone (Rd) reduced the risk of disease progression or death compared with combination melphalan−prednisone−thalidomide. As the FIRST trial did not include any Japanese patients, the efficacy and safety of continuous treatment with Rd was evaluated in 26 Japanese patients with newly diagnosed multiple myeloma (NDMM) in a single-arm, multicenter, open-label phase II trial (MM-025). Patients received lenalidomide on days 1−21 of each 28-day cycle, with a starting dose of 25 mg/day (dose adjusted for renal impairment), and 40 mg/day dexamethasone (dose adjusted for age) on days 1, 8, 15 and 22 of each 28-day cycle until disease progression or discontinuation for any reason. In the efficacy evaluable population, overall response rate was 87.5%, including 29.2% of patients who achieved a complete response/very good partial response. Median durations of response, progression-free survival and overall survival have not been reached. The most common grade 3–4 adverse events were neutropenia (23%) and

anemia (19%). The efficacy and safety of Rd were consistent with data from larger studies, including the FIRST trial, thereby supporting the use of Rd continuous in Japanese patients with NDMM who are ineligible for stem cell transplantation.

5. **Ishida T, Fujiwara H, Nosaka K, Taira N, Abe Y, Imaizumi Y, Moriuchi Y, Jo T, Ishizawa K, Tobinai K, Tsukasaki K, Ito S, Yoshimitsu M, Otsuka M, Ogura M, Midorikawa S, Ruiz W, Ohtsu T.**
   Multicenter Phase II Study of Lenalidomide in Relapsed or Recurrent Adult T-Cell Leukemia/Lymphoma: ATLL-002.
   ***J Clin Oncol*; 34(34): 4086-4093, 2016 Dec. (Epub 2016 Sep 30)**
   Abstract
   Purpose Few treatment options exist for adult T-cell leukemia/lymphoma (ATL), and the prognosis for this disease is poor. A phase I study of lenalidomide demonstrated preliminary antitumor activity in patients with relapsed ATL. The current phase II study evaluated the efficacy and safety of lenalidomide monotherapy in patients with relapsed or recurrent ATL.
   Patients and Methods
   Patients 20 years of age or older with acute, lymphoma, or unfavorable chronic subtype ATL, who had received one or more prior anti-ATL systemic chemotherapy and achieved stable disease or better on their last anti-ATL therapy with subsequent relapse or recurrence, were eligible. Patients received oral lenalidomide 25 mg/d continuously until disease progression or unacceptable toxicity. The primary end point was overall response rate; secondary end points included safety, tumor control rate (stable disease or better), time to response, duration of response, time to progression, progression-free survival, and overall survival.
   Results
   Objective responses were noted in 11 of 26 patients (overall response rate, 42%; 95% CI, 23% to 63%), including four complete responses and one unconfirmed complete response. The tumor control rate was 73%. The median time to response and duration of response were 1.9 months and not estimable, respectively, and the median time to progression was 3.8 months. The median progression-free survival and overall survival were 3.8 and 20.3 months, respectively. The most frequent grade ≥ 3 adverse events were neutropenia (65%), leukopenia (38%), lymphopenia (38%), and thrombocytopenia (23%), which were all manageable and reversible.
   Conclusion
   Lenalidomide demonstrated clinically meaningful antitumor activity and an acceptable toxicity profile in patients with relapsed or recurrent aggressive ATL, hinting at its potential to become a treatment option. Further investigations of lenalidomide in ATL and other mature T-cell neoplasms are warranted.

6. **Aryal B, Komokata T, Ueno T, Yamamoto B, Senokuchi T, Yasuda H, Kaieda M, Imoto Y.**
   A Two-Surgical and Endovascular Treatment of Rare Multiple Aneurysms of Pancreatic Arteries
   ***Ann Vasc Surg*; 2016 Nov. [Epub ahead of print]**
   Abstract
   Aneurysms of pancreatic arteries (PAs) are often found incidentally during evaluation of other abdominal pathology. Aneurysms involving multiple PAs are rarely reported in the literature. In case reports of PA aneurysm, inferior pancreaticoduodenal artery is

the usual site of aneurysm occurrence. PA aneurysms can be treated surgically by aneurysm exclusion, excision, and by endovascular techniques. However, no clear consensus exists regarding treatment modality, leaving the surgeon to determine the most appropriate approach bearing in mind their experience, anatomical location of the aneurysm, involved artery, and urgency of the procedure. We report a rare PA aneurysm involving dorsal pancreatic artery (DPA) and anterior inferior pancreaticoduodenal artery (AIPDA) associated with celiac stenosis that was incidentally diagnosed in a patient with hepatic hemangioma. In addition, we reviewed data from the literature on patients with diffuse or multiple PA aneurysms and discuss the treatment modality in these rare variants. Both surgical and endovascular procedures are equally advocated in treatment of multiple PA aneurysms. In our report, we demonstrate a 2-stage surgical and endovascular treatment modality; DPA aneurysm that was not suitable for endovascular treatment was surgically resected and an iliohepatic bypass was made between left common iliac artery and AIPDA to ensure good hepatic perfusion. One month after the first procedure, AIPDA aneurysm was treated with endovascular embolization. Two-stage surgical and endovascular procedure may represent a useful strategy to treat aneurysms involving multiple PAs.

7. **Yanazume S, Orita Y, Koriyama C, Niihara Y, Kamio M, Togami S, Douchi T, Kobayashi H.**
Impact of subcutaneous drainage on wound disruption in gynecological malignancy surgery
***Kagoshima Journal of Obstetrics and Gynecology*; 25: 14-21. 2016**
Abstract
Background
The aim of this study was to compare wound disruption rates following skin closure between a subcutaneous drain and non-subcutaneous drain following gynecological malignancy surgery, and elucidate the risk factors of wound disruption.
Methods
A total of 362 patients who underwent gynecological malignancy surgery were retrospectively analyzed. Subjects were divided into two groups :a subcutaneous drain group (n=131) and non-drain group (n=231), to assess skin closure following surgery. Primary lesions were in the uterine cervix (n=125), corpus (n=121), and ovaries (n=116). In the drain group, a 3.3 mm closed silicone drain was introduced into the subcutaneous tissue and exited through a separate stab surgical incision.
Results
The incidence of overall wound disruption was less in the drain group than in the non-drain group (3/131 VS 18/231, p=0.031). The rate of wound disruption increased with a higher body mass index (P=0.007), more advanced disease (P=0.022), and longer operation times (P=0.013). Multiple logistic regression analysis identified obesity (P=0.002), advanced stages (P=0.010), and longer operation times (P=0.003) as independent risk factors for wound disruption. Regarding obese patients, a higher rate of wound disruption (odds ratio 14.1, 95% CI:1.47-134) was observed in the non-drain group.
Conclusions
Subcutaneous drains may reduce the rate of wound disruption at skin closure sites following gynecological malignancy surgery. In clinical practice, obese patients with advanced disease and longer operation times, but no subcutaneous drain had the highest rate of wound disruption following gynecological malignancy surger

8. **Ota S, Karakida N, Yanazume S.**
A new case of primary signet ring cell carcinoma of the uterine endometrium
***Kagoshima journal of obstetrics and gynecology*; 25: 31-34. 2016**

9. **Tanaka S, Kobayashi W, Haraguchi M, Ishihata K, Nakamura N, Ozawa M.**
Snail1 expression in human colon cancer DLD-1 cells confers invasive properties without N-cadherin.
***Biochemistry and Biophysics Reports*; 8: 120-126. 2016.**
Abstract
The epithelial-mesenchymal transition (EMT) is a fundamental characteristic of carcinoma cells. EMT is generally associated with a change in cellular morphology from cobblestone to spindle shape, reduced expression of epithelial markers such as E-cadherin, and enhanced expression of mesenchymal markers such as N-cadherin. This EMT-associated reciprocal expression of E-cadherin and N-cadherin has been called the "cadherin switch". Downregulation of E-cadherin enables cells to dissociate from c olonies while upregulation of N-cadherin is associated with increased invasiveness. The transcription factor Snail1 induces these changes in various epithelial cell lines, including canine MDCK cells and human A431 cells. In the present study, we introduced a Snail1 expression vector into human DLD-1 cells and isolated stable transfectants. These cells showed changes in morphology, reduced expression of epithelial marker E-cadherin and occludin, and elevated invasion and migration. However, nei ther expression of N-cadherin protein nor its corresponding mRNA was detected. Therefore, elevated N-cadherin expression is not required for invasiveness of the cells.

10. **Tsutsumida A, Takahashi A, Namikawa K, Yamazaki N, Uhara H, Teramoto Y, Takenouchi T, Fukushima S, Yokota K, Uehara J, Matsushita S, Shibayama Y, Hatta N, Masui Y, Uchi H, Fujisawa Y, Ogata D.**
Frequency of level II and III axillary nodes metastases in patients with positive sentinel lymph nodes in melanoma: a multi-institutional study in Japan.
***Int J Clin Oncol*; 21(4): 796-800. 2016 Aug. (Epub 2016 Jan 13)**
Abstract
BACKGROUND: Axillary lymph node dissection (ALND) has been recommended to include levels I-III for melanoma patients who have evidence of metastasis in the axillary sentinel lymph node (SLN). The extent of the subsequent axillary dissection is in debate. The objective of this study was to determine the frequency of metastasis of level III nodes in addition to that of level II nodes in this setting.
METHODS: A multi-institutional retrospective study was undertaken in 14 melanoma treatment centers in Japan.
RESULTS: Between 2007 and 2012, 69 patients with involved axillary SLNs underwent a subsequent ALND and 55 underwent level I and II dissections. Level III metastatic nodes, which is our primary endpoint, were seen in only 1 patient (1.5 %). The level II metastatic rate was 4.4 %.CONCLUSIONS: Our study sample size was small, but melanoma patients with positive SLN rarely had level III disease, suggesting that level III dissection may be unnecessary. We also found that level II metastasis was not so frequent. More evidence is needed to standardize the extent of ALND and to identify the patients who would have the most benefit with undergoing level II dissection for positive axillary SLNs.

11. **Ohara K, Fujisawa Y, Yoshino K, Kiyohara Y, Kadono T, Murata Y, Uhara H, Hatta N, Uchi H, Matsushita S, Takenouchi T, Hayashi T, Yoshimura K, Fujimoto M.**
A proposal for a TNM staging system for extramammary Paget disease: Retrospective analysis of 301 patients with invasive primary tumors.
***J Dermatol Sci*; 83(3): 234-239, 2016 Sep. (Epub 2016 Jun 3)**
BACKGROUND:
Although extramammary Paget disease (EMPD) usually appears as carcinoma in situ, it sometimes becomes invasive (iEMPD) and fatal. However, a TNM staging system for iEMPD has yet to be established.
OBJECTIVE:
The aim of this study was to establish a TNM staging system for iEMPD.
METHODS:
We retrospectively collected iEMPD patients treated at 12 institutes in Japan. Factors reported to be associated with survival such as distant metastasis, lymph node (LN) metastasis, and primary tumor status were evaluated using the log-rank test.
RESULTS:
We enrolled 301 iEMPD patients, of whom 114 had remote metastases (49 had both distant and LN metastasis; 2, distant metastasis only; and 63, LN metastasis only) and the remaining 187 patients had no remote metastasis. Distant metastasis (M1) showed worse survival (P<0.00001). In the analysis of the 250 patients without distant metastasis, LN metastasis also showed worse survival (P<0.00001). Among the patients with LN metastasis, 2 or more LN metastases (N2) showed worse survival than did single LN metastasis (N1, P=0.02). Lastly, in the analysis of the 187 patients without metastasis, tumor thickness of over 4mm or lymphovascular invasion showed worse survival (T2, P<0.05 and P<0.001, respectively). Patients with neither of these features were defined as T1. From these results, we propose this TNM staging system: stage I, T1N0M0; stage II, T2N0M0; stage IIIa, anyTN1M0; stage IIIb, anyTN2M0; stage IV, anyTanyNM1. Other than stages II and IIIa, each stage had a statistically distinct survival curve.
CONCLUSION:
We propose a TNM staging system for EMPD using simple factors for classification that could provide important prognostic information in managing EMPD. However, accumulation of more patient data and further revision of the system are required.

12. **Hamada T, Sugaya M, Tokura Y, Ohtsuka M, Tsuboi R, Nagatani T, Tani M, Setoyama M, Matsushita S, Kawai K, Yonekura K, Yoshida T, Saida T, Iwatsuki K.**
Phase I/II study of the oral retinoid X receptor agonist bexarotene in Japanese patients with cutaneous T-cell lymphomas.
***J Dermatol*; 44(2): 135-142, 2017 Feb. (Epub 2016 Aug 20)**
Abstract
Safety, tolerability, pharmacokinetics and efficacy of bexarotene, a novel retinoid X receptor (RXR)-selective retinoid, were evaluated in Japanese patients with stage IIB-IVB and relapsed/refractory stage IB-IIA cutaneous T-cell lymphomas (CTCL). This study was conducted as a multicenter, open-label, historically controlled, single-arm phase I/II study. Bexarotene was p.o. administrated once daily at a dose of 300 mg/m2 for 24 weeks in 13 patients, following an evaluation of safety and tolerability for 4 weeks at a dose of 150 mg/m2 in three patients. Eight of 13 patients (61.5%) with an initial dose of 300 mg/m2 met the response criteria using the modified severity-weighted assessment tool (mSWAT) at 24 weeks or discontinuation. Dose-limiting toxic effects

(DLT) were present in four of 13 patients (31%) at a dose of 300 mg/m2 : two neutropenia, one abnormal hepatic function and one hypertriglyceridemia. No DLT was observed in patients received 150 mg/m2 bexarotene. In the 13 patients at 300 mg/m2 , common drug-related adverse events (AE) included hypothyroidism (92%), hypercholesterolemia (77%), leukopenia or neutropenia (39%), nasopharyngitis or anemia (31%). The treatment-related grade 3 AE included hypertriglyceridemia (4/16 patients, 25%), increased alanine aminotransferase, increased aspartate aminotransferase, dyslipidaemia, leukopenia and neutropenia (1/16 patients, 6%), and one of 16 patients experienced grade 4 hypertriglyceridemia. No patients discontinued bexarotene due to the AE during the study, but dose reduction or suspension was required. Bexarotene was shown to be well tolerated at 300 mg/m2 once daily and effective in Japanese patients with CTCL.

13. **Baba A, Fujii K, Arimura A, Tada K, Higashi Y, Matsushita S, Kanekura T.**
Psoriasis with verrucous appearance.
***Int J Dermatol*; 55(7): e419-421, 2016 Jul. (Epub 2016 Feb 15)**

14. **Yamamura K, Otsuka A, Kaku Y, Seidel JA, Nomura M, Nagai H, Matsumoto S, Kabashima K.**
Dermoscopic changes in malignant melanoma after successful treatment with nivolumab: A case reportts.
***Journal of Dermatology,* 2016 Jul. [Epub ahead of print]**

※ 原著論文については、平成 28 年度中に Epub（online で公開）された論文も含む。
また、実際に印刷された年度に再度掲載する。

和文原著

1. 田上和幸、薗田正浩、蔡　榮鴻、山下恵里香、伊集院駿、石川裕輔、平峯聖久、東　健作、塗木徳人、田中秀樹、寺園和哉、豊川建二、上野隆幸、福元祥浩、森山由紀則、青木恵美、松下茂人、佐保尚三
鹿児島県内初のエキシマレーザーシースによるリード抜去症例
鹿児島県医師会報: 53-56; 2017.3

要約
近年ペースメーカ(PM)、植込み型除細動器(ICD)、および両心室ペーシング機能付き植込み型除細動器(CRT-D)等の植込み型デバイス治療(Cardiac Implantable Electronic Devices:CIEDs)の件数が増加してきており、それに伴いデバイス感染数も増加傾向にある1)。デバイス感染が起きると創部にとどまらず、敗血症や感染性心内膜炎といった全身性感染症を生じ致死性となる。このためジェネレータのみならずリードを全て抜去する必要がある。
2010 年に本邦において、エキシマレーザーシースによるリード抜去が保険償還された。波長 308nm で発するエキシマレーザー光は、先端から 0.05mm の深度で組織を分子レベルに蒸散し、到達深度が浅く、冠動脈や上大静脈内でも安全に使用できる。このレーザーシステムにより年数が経過した CIEDs 患者のリード抜去が可能となった（図 1）.ただし、上大静脈の損傷や心タンポナーデといった手技に関与する合併症が少なからずあり 2).認定施設でのみ可能となっている。鹿児島県においてはその認定施設がなく、県外に患者を紹介・搬送し、他院でリード抜去を行う必要があった。
今回、当院が施設認定を受け、鹿児島県において初めてエキシマレーザーシステムを用いたリード抜去を施行した。今後デバイス感染症例や遺残リード抜去の必要性が増加する可能性があり、第一例目の症例を提示する。

2. 大保崇彦、郡山暢之、小木曽和磨、時任紀明、赤尾綾子、向江美雪、尾辻真由美、赤尾綾子、西尾善彦
ダパグリフロジン隔日投与の有用性
Therapeutic Research 2016; 37(11): 1055 -1064
要旨
本研究において、SGLT2 阻害薬隔日投与の検討を行った。通院中の 2 型糖尿病患者 30 名の既存の経口血糖降下薬にダパグリフロジン（Dap）5 mg 隔日での追加投与を行った。12 名は連日投与へ変更してデータを解析した。3 か月後に、体重、腹囲、血圧、グリコヘモグロビン A1c、グリコアルブミン、低密度リポ蛋白コレステロール（LDL）、非高密度リポ蛋白コレステロールの有意な減少、酸化 LDL、Monocyte chemoattractant protein-1（MCP-1）の低下、アディポネクチンの有意な上昇を認めた。ヘマトクリットの有意な変化はなかった。推定糸球体濾過量は有意に低下し、6 か月後に上昇した。連日投与変更 3 か月後に、酸化 LDL の上昇と MCP-1 の有意な上昇を認めた。Dap の隔日投与は、脱水関連の有害事象を惹起せず代謝面を包括的に改善し、効果、忍容性、経済面から至適投与方法として期待出来る。

3. 太田俊一郎、唐木田智子、簗詰伸太郎
婦人科悪性腫瘍終末期における緩和的人工肛門造設の有用性に関する検討
鹿児島産科婦人科学会雑誌, 25 巻: 1-5

4. 簗詰伸太郎、貴島佳子、徳留明夫、森まり絵、内田那津子、唐木田智子、太田俊一郎
婦人科手術後の臀部皮膚障害の検討～腹腔鏡下手術から開腹術に **conversion** した症例での仙骨部潰瘍を経験して～
鹿児島産科婦人科学会雑誌**, 25** 巻**: 6-9**

5. 簗詰伸太郎、徳留明夫、唐木田智子、内田那津子、貴島佳子、太田俊一郎
腹腔鏡下手術における周術期創部合併症の検討
鹿児島産科婦人科学会雑誌**, 25** 巻**: 10-13**

6. 吉福孝介、西元謙吾、松崎　勉、松下茂人
気管切開術後創部感染に起因して **IgA** 血管炎を発症した症例
日本耳鼻咽喉科科学会会報 **2016**；**1397-1403**

7. 久徳貴之、吉福孝介、西元謙吾、松崎　勉
CO2 レーザー治療が有用であた両側外耳道尋常性疣贅　の1例 **Gastroenterological**
耳鼻と臨床**, 63** 巻**: 15-19. 2017** 年 **1** 月

8. 吉福孝介
他科への手紙：耳鼻咽喉科→麻酔科
日本医事新報 **No.4803: 45. 2016** 年 **5** 月 **14** 日

9. 吉福孝介、松崎　勉、西元謙吾
血痰を主訴とした胸部大動脈瘤の1例
耳鼻と臨床**: 62** 巻**, 6** 号**:** 別刷

10. 吉福孝介、西元謙吾、松崎　勉、朝隈真一郎、大野文夫
菊池病の2例
耳鼻と臨床　**62** 巻**:** 別刷、**2016** 年 **11** 月 **1** 日

11. 青木恵美、松下茂人
経皮的冠動脈形成術後に生じた難治性潰瘍の **1** 例
日本皮膚外科学会誌**:** 第 **20** 巻 **1** 号**: 50-51. 2016.7**

【Ⅳ】 著書・総説

1. **Ando K, IshiiK, TadaE, Kataoka K, Hirohata A, Goto K, Kobayashi, Sutsui H, Nakahama M, Nakashima H, Uchikawa S, Kanda J, Yasuda S, Yajima J, Kitabayashi H, Sakurai S, Nakanishi K, Inoue N, Noike H, Hasebe T, Sato T, Yamasaki M, Kimura T.**
   Prospective multi-center registry to evaluate efficacy and safety of the newly developed diamond-like carbon-coated cobalt–chromium coronary stent system.
   ***Cardiovascular Intervention and Therapeutics* 2016 Jul. [Epub ahead of print]**

2. 松岡秀樹
   内頚動脈狭窄により意識消失を繰り返した症例
   脳卒中症候学　症例編**: 138-139**

3. 脇田政之、松岡秀樹
   延髄内側梗塞
   脳卒中症候学　症例編**: 228-230**

4. 脇田政之、松岡秀樹
   bow hunter 症候群
   脳卒中症候学　症例編**: 231-233**

5. 中島隆宏、泊　晋也、松岡秀樹
   対側外斜視と両側眼球内転障害をきたした橋梗塞の **1** 例
   脳卒中症候学　症例編**: 234-236**

6. 濵田祐樹、脇田政之、松岡秀樹
   前下小脳動脈症候群
   脳卒中症候学　症例編**: 237-239**

7. 松岡秀樹
   脳動脈解離
   脳梗塞診療読本　第二版**: 314-324**

8. 吉永正夫
   小児期の肥満と問題点
   日本医師会雑誌 **2016; 145(3): 543-545**

9. 吉永正夫
   学校心臓検診
   小児科診療、**2016; 79(11): 1495-1499**

10. 吉永正夫
他科への手紙：小児科→学校心臓検診委員の先生
日本医事新報 **2016; 4829: 47.**

11. 住友直方、泉田直己、市田蕗子、岩本眞理、笠巻祐二、久賀圭祐、土井庄三郎、中西敏雄、馬場礼三、檜垣高史、堀米仁志、三谷義英、武者春樹、吉永正夫
2016 年版 学校心臓検診のガイドライン
日本循環器学会、**http://www.j-circ.or.jp/guideline/pdf/JCS2016_sumitomo_h.pdf**

12. 郡山暢之、赤尾綾子、尾辻真由美
Ⅵ.食事療法・運動療法の患者教育理念 **1.**食事療法・運動療法における自己効力感
CKD・透析患者の食事療法と運動療法； **256-261. 2016.6.30**

13. **Shintaro Yanazume, Hiroaki Kobayashi**
Chapter 14 Treatment of recurrent ovarian cancer
Frontiers in Ovarian Cancer Science; Springer Chapter 14

14. 野元三治、谷本昭英
第 **2** 章 症例から学ぶ－**CPC** の進め方・活かし方 **3.**発熱や呼吸困難の症状と肺動脈幹腫瘤影を呈した **50** 歳代半ばの男性
臨床病理検討会の進め方・活かし方 **CPC** の作法（青笹勝之、菅野祐幸著）**:33-40, 2016.7**

【V】 学会報告

国際学会・国際会議

1. Kataoka T, Anzaki K.
   Two Years Follow-up of a Case with Peri-stent Contrast Staining After Implanting 2 Types of Second-generation Drug-eluting Stents, Resulted in Coronary Thrombosis During Intravascular Ultrasound Procedure.
   21th CardioVascular Summit TCTAP 2016, Seoul, Korea, 2016.4.1

2. Higashi K, Matsumoto H, Ijuin S, Ishikawa Y, Hiramine K, Shimokawahara H, Tanaka H, Nuruki N, Sonoda M.
   SDNN can predict left ventricular remodeling and prognosis in patients with acute myocardial infarction.
   ESC CONGRESS 2016, Roma. 2016.8.28

3. Ijuin S, Shimokawahara H, Nuruki N, Sonoda M.
   The evaluation of segmental lung perfusion with biphasic contrast enhanced dual-energy computed tomography by type of lesion in patients with chronic thromboembolic pulmonary hypertension with chronic thromboembolic pulmonary hypertension.
   ESC CONGRESS 2016, Roma, 2016.8.28

4. Higashi K, Matsumoto H, Ijuin S, Ishikawa Y, Hiramine K, Shimokawahara H, Tanaka H, Nuruki N, Sonoda M.
   Nursing intervention is more effective for the elderly with acute heart failure.
   ESC CONGRESS 2016, Roma, 2016.8.29

5. Tanoue K, Nuruki N, Yamashita E, Sonoda M.
   Total transvenous cardioveter-defibrillator implantation in a patient with artificial tricuspid valve replacement.
   Asia Pacific Heart Rhythm Society 2016, Seoul, 2016.10.14

6. Yamashita E, Nuruki N, Tanoue K, Sonoda M.
   Right coronary artery occlusion after cavotricuspid isthmus ablation.
   Asia Pacific Heart Rhythm Society 2016, Seoul, 2016.10.14

7. Yoshinaga M, Ohno S, Ushinohama H, Sato S, Miyamoto T, Tauchi N, Horigome H, Sumitomo N, Kucho Y, Shiraishi H, Ichida F, Hata T, Nomura N, Horie H, Makita N, Nagashima M.
   ECG Screening of 1-Month-Old Infant May Prevent Out-of-Hospital Cardiac Arrest in Infancy.
   Scientific Session 2016 American Heart Association (AHA), New Orleans, 2016.11.13

8. Yoshinaga M.
   Analysis of Out-of-Hospital Cardiac Arrest in Infants, Children, and Adolescents in the Kyushu Area in Japan.
   Session 2016 American Heart Association (AHA), New Orleans, 2016.11.15

9. Yoshinaga M.
ECG screening and Brugada syndrome.
Pediatric and Congenital Rhythm Congress (Pedirhythm) VII. Thessaloniki, Greece, 2017.2.5

10. Ogiso K, Koriyama N, Ijuin T, Takiguchi T, Sakuma I, Sasano H, Nishio Y, Tanaka T.
123I-MIBG scintigram-negative functioning pheochromocytoma associated with low expression of norepinephrine transporters: A case report.
ENDO 2016 第 98 回米国内分泌学会議、Boston, 2016.4.1

11. Komokata T, Yasumura H, Aryal B, Yasuda H, Kaieda M.
Assignment for prevalence and standardization of laparoscopic pancreatic resection: from standpoint of a municipal hospital.
24th International congress of the EAES, Amsterdam, 2016.6.17

国内学会

①筆頭演者が鹿児島医療センターの職員

1. 内山洋太、楠元啓介、上坊翔太、毛利翔悟、安﨑和博、久保忠弘、片岡哲郎、中島　均、小木曽和磨、郡山暢之
劇症 1 型糖尿病による代謝性シドーシスによって急激な転機をたどった一例
第 313 回日本内科学会九州地方会、福岡、2016 年 5 月 28 日

2. 片岡哲郎、安﨑和博、楠元啓介、毛利翔悟、上坊翔太、久保忠弘、中島　均
冠動脈インターベンション後の虚血性心臓病患者のフォローアップ時における血小板凝集能検査の評価
第 25 回日本心血管インターベンション治療学会、東京、2016 年 7 月 8 日

3. 安﨑和博、上坊翔太、毛利翔悟、楠元啓介、久保忠弘、片岡哲郎、中島　均、皆越眞一
心臓死の転帰をたどった急性心筋梗塞症例における治療方針に及ぼす臨床的背景に関する検討
第 25 回日本心血管インターベンション治療学会、東京、2016 年 7 月 9 日

4. 楠元啓介、片岡哲郎、上坊翔太、安﨑和博、久保忠弘、有村俊博、薗田正浩、中島　均
冠動脈ステント留置後の抗血小板薬 2 剤併用療法における血小板凝集能測定の意義の検討
第 64 回日本心臓病学会、東京、2016 年 9 月 23 日

5. 上坊翔太、片岡哲郎、楠元啓介、安﨑和博、久保忠弘、薗田正浩、中島　均
冠動脈ステント留置後の抗血小板薬 2 剤併用患者における血小板凝集能と併用薬剤の関連の検討
第 64 回日本心臓病学会、東京、2016 年 9 月 25 日

6. 安﨑和博、片岡哲郎、上坊翔太、毛利翔悟、楠元啓介、久保忠弘、中島　均、皆越眞一
機械的合併症を有する急性心筋梗塞患者の心臓外科手術における術後生存に及ぼす影響についての検討
第 64 回日本心臓病学会、東京、2016 年 9 月 25 日

7. 有村俊博、皆越眞一、上坊翔太、安﨑和博、楠元啓介、久保忠弘、片岡哲郎、中島　均
MVR 術後 40 年目に急性僧帽弁閉鎖不全症となった一例
第 121 回日本循環器学会九州地方会、鹿児島、2016 年 12 月 3 日

8. 浜田有希、片岡哲郎、是枝め衣、楠元啓介、安﨑和博、上坊翔太、有村俊博、久保忠弘、中島　均
ペースメーカー植え込み後、発熱、炎症反応高値をきたし診断治療に苦慮した 1 例
第 315 回日本内科学会九州地方会、熊本、2016 年 11 月 20 日

9. 楠元啓介、片岡哲郎、上坊翔太、安﨑和博、久保忠弘、有村俊博、中島　均
Assessment of platelet aggregation analysis in patients with dual antiplatelet therapy at follow-up coronary angiogram after coronary intervention
第 81 回日本循環器学会学術集会、金沢、2017 年 3 月 19 日

10. 東　健作
急性大動脈解離保存的治療クリティカルパス　－ICU 入室期間の検討－
第 18 回日本医療マネジメント学会学術総会、福岡、2016 年 4 月 22 日

11. 石川裕輔、田中秀樹、松本洋之、伊集院駿、山下恵里香、下川原裕人、田上和幸、平峯聖久、東　健作、塗木徳人、薗田正浩
消化管出血性ショックからの心停止に対し、CPR 後に緊急内視鏡並びに IVR（Interventional Radiology）止血術を駆使して救命した一症例
第 20 回日本救急医学会九州地方会、鹿児島、2016 年 6 月 4 日

12. 伊集院駿、田中秀樹、松本洋之、石川裕輔、山下恵里香、下川原裕人、田上和幸、平峯聖久、東健作、塗木徳人、薗田正浩
心室細動からの失神で発症し、当院に救急搬送され救命しえた Brugada 症候群の 2 症例
第 20 回日本救急医学会九州地方会、鹿児島、2016 年 6 月 4 日

13. 西村時紘、薗田正浩、田上和幸、山下恵里香、伊集院駿、馬場善政、石川裕輔、平峯聖久、東　健作、田中秀樹、塗木徳人
ベーチェット病に起因する大動脈弁置換後の人工弁台座動揺を長期経過観察した 1 例
第 120 回　日本循環器学会九州地方会、大分、2016 年 6 月 25 日

14. 山下恵里香、薗田正浩、田上和幸、平峯聖久、田中秀樹、塗木徳人
着用型除細動器(WCD)の保険点数と患者・病院負担
第 120 回　日本循環器学会九州地方会、大分、2016 年 6 月 25 日

15. Yamashita E, Nuruki N, Tanoue K, Sonoda M.
Improvement of left ventricular function and reduction of left atrial volume after pulmonary vein isolation in patients with atrial fibrillation.
第 63 回日本不整脈心電学会学術大会、札幌、2016 年 7 月 16 日

16. Tanoue K, Yamashita E, NurukiN, Sonoda M.
A Case of LVOT obstruction caused by RV septal pacing.
第 63 回日本不整脈心電学会学術大会、札幌、2016 年 7 月 16 日

17. 伊集院駿、馬場善政、石川裕輔、山下恵里香、平峯聖久、田上和幸、東　健作、田中秀樹、塗木徳人、薗田正浩、下川原裕人
急性肺血栓塞栓症の抗凝固療法別血栓体積量の急性期変化についての検討
第 64 回日本心臓病学会学術集会、東京、2016 年 9 月 24 日

18. 山下恵里香、田上和幸、塗木徳人、田中秀樹、薗田正浩
下大静脈－三尖弁輪峡部線状焼灼術中に下壁誘導で ST 上昇を認め、PCI を施行した 1 例
日本不整脈心電学会第 28 回カテーテルアブレーション委員会公開研究会、福岡、2016 年 10 月 28 日

19. 田上和幸、塗木徳人、山下恵里香、蔡　榮鴻、薗田正浩
経静脈 ICD 植込みを必要とした三尖弁置換術後の1例
第 9 回植込みデバイス関連冬季大会、大阪、2017 年 2 月 18 日

20. 田中秀樹、松本洋之、伊集院駿、石川裕輔、馬場善政、平峯聖久、東　健作、塗木徳人、薗田正浩、中島　均
当院の低体温療法の現状と予後についての検討
鹿児島救急医学会学術集会、第 81 回医師部会、鹿児島、2017 年 3 月 4 日

21. Hiramine K, Higashi K, Ijuin S, Ishikawa Y, Yamashita E, Tanoue K, Tanaka H, Nuruki N, Sonoda M.
Aspirin and Clopidogrel Therapy is not Enough as Antiplatelet Therapy in Patients with Peripheral Artery Disease after Percutaneous Transcatheter Angioplasty.
81 Annual Scientific Meeting of Japanese Circulation Society、金沢、2017 年 8 月 17 日

22. Higashi K, Ijuin S, Ishikawa Y, Yamashita E, Hiramine K, Tanoue K, Tanaka H, Nuruki N, SonodaM.
Hemoglobin Level at Discharge is a Valid Prognostic Factor in Patients with Acute Myocardial Infarction after Percutaneous Coronary Intervention.
81 Annual Scientific Meeting of Japanese Circulation Society、金沢、2017 年 8 月 17 日

23. 大塚佳純、本村　登、山下恵里香、田上和幸、塗木徳人、薗田正浩
条件付き植込み型デバイス患者のMRI撮影時の当院における運用システム構築と現状
81 Annual Scientific Meeting of Japanese Circulation Society、金沢、2017 年 8 月 17 日

24. 是枝め衣、宮下史生、濵田祐樹、平嶺敬人、金子浩之、大山　賢、脇田政之、松岡秀樹
ステントリトリーバー導入が rt-PA 静注療法に与えた影響
第 41 回日本脳卒中学会総会、札幌、2016 年 4 月 14 日

25. 宮下史生、濵田祐樹、中島隆宏、武井　藍、脇田政之、松岡秀樹
急性期血行再建術に対する院内体制整備の効果の検討
第 41 回日本脳卒中学会総会、札幌、2016 年 4 月 14 日

26. 濵田祐樹、宮下史生、脇田政之、松岡秀樹
rt-PA 静注療法における Door to needle time(DNT)>60 分に影響を及ぼす因子についての検討
第 41 回日本脳卒中学会総会、札幌、2016 年 4 月 15 日

27. 田方健人、大山　賢、森山瑞葵、金子浩之、平嶺敬人、宮下史生、脇田政之、松岡秀樹
頭部回旋時にチタンプレートが右椎骨動脈を圧迫し脳梗塞を生じた 1 例
第 215 回日本神経学会九州地方会、鹿児島、2016 年 9 月 10 日

28. 金子浩之、大山　賢、田方健人、森山瑞葵、平嶺敬人、宮下史生、脇田政之、松岡秀樹
チタンプレートによる回旋性椎骨動脈閉塞が原因となった脳塞栓症の 1 例
第 19 回日本栓子検出と治療学会、神戸、2016 年 10 月 14 日

29. 宮下史生、是枝め衣、平嶺敬人、金子浩之、濵田祐樹、大山　賢、脇田政之、松岡秀樹
80 歳以上の高齢者に対する急性期血行再建術の特徴
第 32 回日本神経血管内治療学会学術総会、神戸、2016 年 11 月 24 日

30. 小田原敦子、大山　賢、平嶺敬人、金子浩之、宮下史生、脇田政之、松岡秀樹
めまいを契機に偶発的に診断された遺残前環椎動脈 I 型の 1 例
第 316 回日本内科学会九州地方会、福岡、2017 年 1 月 21 日

31. 永田真子、濵田祐樹、武井藍、宮下史生、脇田政之、松岡秀樹
潰瘍性大腸炎と好酸球増多症を伴った多発性脳梗塞について
第 217 回日本神経学会神経地方会、福岡、2017 年 3 月 11 日

32. 松岡秀樹、濵田祐樹、宮下史生、脇田政之、谷口　歩
イダルシズマブ投与により良好な転帰が得られたダビガトラン内服中の外傷性くも膜下出血の一例
第 42 回日本脳卒中学会総会、大阪、2017 年 3 月 17 日

33. 宮下史生、平嶺敬人、金子浩之、濵田祐樹、大山　賢、脇田政之、松岡秀樹
急性期血栓回収療法における t-PA 静注療法併用の効果
第 42 回日本脳卒中学会総会、大阪、2017 年 3 月 17 日

34. 平嶺敬人、高口　剛、金子浩之、大山　賢、宮下史生、脇田政之、松岡秀樹
卵巣明細胞癌を合併した多発性脳梗塞の二例
第 42 回日本脳卒中学会総会、大阪、2017 年 3 月 18 日

35. 是枝め衣、宮下史生、濵田祐樹、平嶺敬人、金子浩之、大山　賢、脇田政之、松岡秀樹
脳底動脈閉塞症例に対する急性期血栓回収療法の有効性
第 42 回日本脳卒中学会総会、大阪、2017 年 3 月 18 日

36. 寺園和哉、福元祥浩、上野隆幸、立岡修治、山下正文、森山由紀則
Stanford A 型急性大動脈解離を発症した重複大動脈弓の一例
第 44 回日本血管外科学会学術総会、東京、2016 年 5 月 25 日

37. 立岡修治、福元祥浩、上野隆幸、寺園和哉、山下正文、森山由紀則
膝窩動静脈瘻を合併した右膝窩動脈瘤の 1 例
第 44 回日本血管外科学会学術総会、東京、2016 年 5 月 25 日

38. 寺園和哉、福元祥浩、上野隆幸、立岡修治、山下正文、森山由紀則
当院における鎖骨下動脈起始異常に対する治療経験
第 44 回日本血管外科学会学術総会、東京、 2016 年 5 月 26 日

39. 立岡修治、福元祥浩、上野隆幸、寺園和哉、山下正文、森山由紀則
下行大動脈遺残解離破裂に対する偽腔内留意 TEVAR
第 49 回日本胸部外科学会九州地方総会、鹿児島、2016 年 7 月 21 日

40. 寺園和哉、福元祥浩、上野隆幸、立岡修治、山下正文、森山由紀則
ASD 根治術後に左心不全をきたし PCPS を要した一例
第 49 回日本胸部外科学会九州地方総会、鹿児島、2016 年 7 月 21 日

41. 立岡修治、福元祥浩、上野隆幸、寺園和哉、山下正文、森山由紀則
腹部大動脈高度石灰化狭窄に対する TEVAR の経験
第 49 回日本胸部外科学会九州地方総会、鹿児島、2016 年 7 月 22 日

42. 寺園和哉、福元祥浩、上野隆幸、立岡修治、山下正文、森山由紀則
左房壁内血腫摘出後の再発で平滑筋肉腫と判明した一例
第 49 回日本胸部外科学会九州地方総会、鹿児島、2016 年 7 月 22 日

43. 寺園和哉、福元祥浩、上野隆幸、豊川建二、海江田衛、森山由紀則
総肝動脈に生じた巨大仮性動脈瘤の一切除例
第 73 回鹿児島県臨床外科学会医学会、鹿児島、2017 年 3 月 18 日

44. 吉永正夫、青木真智子、宮崎あゆみ、堀米仁志、伊藤善也、徳田正邦
小学生のための肥満解消プロジェクト
第 119 回日本小児科学会学術集会、札幌、2016 年 5 月 13 日

45. 吉永正夫、牛ノ濱 大也、長嶋正實、佐藤誠一、畑 忠善、堀米仁志、住友直方、白石裕比湖、野村裕一、田内 宣生、西原 栄起、市田 蕗子、大野聖子
1 か月健診時の心電図記録による乳児突然死予防に関する研究
第 52 回日本小児循環器学会総会・学術集会、東京、2016 年 7 月 6 日

46. 田中裕治
フォンタン術後遠隔期患者におけるプレセプシン値の検討
第 52 回日本小児循環器学会総会・学術集会、東京、2016 年 7 月 7 日

47. 吉永正夫、堀米仁志、住友直方、長嶋正實、牛ノ濱大也、田内宣生、岩本眞理、泉田直己、阿部克己、緒方裕光、高橋秀人
新しい「小児心電図の基準値」を用いた小児期肥大型心筋症の心電図抽出基準に関する検討
第 52 回日本小児循環器学会総会・学術集会、東京、2016 年 7 月 8 日

48. 吉永正夫、牛ノ濱大也、長嶋正實、佐藤誠一、畑 忠善、堀米仁志、田内宣生、西原栄起、市田蕗子、大野聖子、住友直方
Electrocardiographic (ECG) screening of 1-month-old infants for identifying prolonged QT intervals to prevent sudden infant death.
第 63 回日本不整脈心電学会、札幌、2016 年 7 月 17 日

49. 吉永正夫、牛ノ濱大也、長嶋正實、佐藤誠一、畑 忠善、堀米仁志、田内宣生、西原栄起、市田蕗子、大野聖子、住友直方、岩本眞理
1 か月健診時の心電図検診は乳児突然死を防げるか
第 121 回日本循環器学会九州地方会、鹿児島、2016 年 12 月 3 日

50. 徳永美菜子、田中裕治
Fontan 術後遠隔期患者におけるプレセプシン値の検討
第 162 回日本小児科学会鹿児島地方会、鹿児島、2016 年 06 月 12 日

51. 西藤 陽、徳永美菜子、田中裕治、四元景子、溝田美智代
母親を亡くし、グリーフケアに苦労したネフローゼ症候群中学生の1例
第 163 回日本小児科学会鹿児島地方会、鹿児島、2016 年 10 月 16 日

52. 西藤 陽、二宮由美子、田中裕治、塗木徳人、大野聖子、堀江 稔、吉永正夫
QT 延長を伴うカテコラミン誘発多形性心室頻拍 (CPVT) の 3 例
第 164 回日本小児科学会鹿児島地方会、2017 年 2 月 4 日 鹿児島

53. Miyata Y, Yano T, Abe Y, Iwasaki H, Otsuka M, Hidaka M, Sunami K, Inoue N, Sawamura M, Ito T, Nagai H.
Rituximab during induction might not improve overall survival of very eldely DLBCL patients.
第 78 回日本血液学会学術集会、横浜、2017 年 10 月 13 日

54. Suzuki Y, Yano T, Abe Y, Iwasaki H, Hidaka M, Otsuka M, Sunami K, Inoue N, Sawamura M, Ito T, Nagai H.
Clinical charactaristics and outcome of DLBCL in adolescents and young adults
第 78 回日本血液学会学術集会、横浜、2017 年 10 月 13 日

55. Jo T, Ishida T, Fujiwara H, Nosaka K, Taira N, Abe Y, Imaizumi Y, Moriuchi Y, Ishizawa K, Tobinai K, Tsukasaki K, Ito S, Yoshimitsu M, Otsuka M, Ogura M, Midorikawa S, Ruiz W, Ohtsu T.
ATLL-002:A phase 2 study of lenalidomide in relapsed/recurrent adult T-cell leukemia-lymphoma.
第 78 回日本血液学会学術集会、横浜、2017 年 10 月 15 日

56. 小木曽和磨、郡山暢之、大保崇彦、時任紀明、西尾善彦
持効型インスリン補充による朝食後血糖改善効果とその関連因子の検討―デグルデクとグラルギンの比較を含めて―
第 59 回日本糖尿病学会年次学術集会、京都、2016 年 5 月 19 日

57. 時任紀明、郡山暢之、大保崇彦、小木曽和磨、西尾善彦
アデホビル長期投与に起因した薬剤性 Fanconi 症候群による低 P 血症性骨軟化症と推察された一例
第 16 回日本内分泌学会九州支部学術集会、鹿児島、2016 年 9 月 10 日

58. 小木曽和磨、郡山暢之、野津寛大、大保崇彦、時任紀明、西尾善彦
NCCT 機能異常を伴う偽性副甲状腺機能低下症の一例
第 16 回日本内分泌学会九州支部学術集会、鹿児島、2016 年 9 月 10 日

59. 大保崇彦、小木曽和磨、時任紀明、郡山暢之、西尾善彦
抗てんかん薬内服による甲状腺ホルモン値の異常を認めた一例
第 16 回日本内分泌学会九州支部学術集会、鹿児島、2016 年 9 月 10 日

60. 郡山暢之、木ノ脇真弓、大保崇彦、小木曽和磨、時任紀明、尾辻真由美、赤尾綾子
末期がんを合併した糖尿病者死の直前 3 日間の語り～記憶のケア～
第 3 回日本糖尿病医療学学会、京都、2016 年 10 月 8 日

61. 郡山暢之
教育講演　糖尿病と心理（糖尿病医療学）
第 54 回日本糖尿病学会九州地方会、鹿児島、2016 年 10 月 14 日

62. 時任紀明、郡山暢之、大保崇彦、小木曽和磨、向江美雪、尾辻真由美、赤尾綾子、西尾善彦
ダパグリフロジン隔日投与の有用性に関する検討
第 54 回日本糖尿病学会九州地方会、鹿児島、2016 年 10 月 14 日

63. 小木曽和磨、郡山暢之、大保崇彦、時任紀明、西尾善彦
局所インスリンアレルギーを有する肝硬変合併 2 型糖尿病にエキセナチド 3 回注が著効した 1 例
第 54 回日本糖尿病学会九州地方会、鹿児島、2016 年 10 月 14 日

64. 大保崇彦、郡山暢之、小木曽和磨、時任紀明、西尾善彦
DPP-Ⅳ阻害薬からグリニド薬への変更が昼食前低血糖の改善に有効であった一例
第 54 回日本糖尿病学会九州地方会、鹿児島、2016 年 10 月 14 日

65. 大石華子、郡山暢之、小木曽和磨、大保崇彦、時任紀明、西尾善彦
ICA 単独陽性を呈した急性発症 1 型糖尿病の 1 例
第 54 回日本糖尿病学会九州地方会、鹿児島、2016 年 10 月 14 日

66. 小木曽和磨、郡山暢之、大保崇彦、時任紀明、西尾善彦
インスリン抗体の性質を追跡しえた 2 型糖尿病の 1 例
第 26 回臨床内分泌代謝 Update、大宮、2016 年 11 月 18 日

67. 小野陽平、上村修司、小田耕平、藤田俊浩、川畑活人、有馬志穂、那須雄一郎、
佐々木文郷、橋元慎一、田口宏樹、瀬戸山仁、宇都浩文、井戸章雄
クローン病におけるアポトーシス抑制因子 AIM の臨床的意義
第 102 回日本消化器病学会総会、東京、2016 年 4 月 21 日

68. 小野陽平、大井秀久、生駒今日子、鮫島洋一、指宿和成、坪内直子、山路尚久、
藤田 浩、中馬 豊、帆北修一
クローン病腸管切除術後症例において生物学的製剤が再手術に与える影響
第 71 回日本大腸肛門病学会学術集会、三重、2016 年 11 月 18 日

69. 是枝め衣、小野陽平 、指宿和成、坪内直子、山路尚久、永田真子、脇田政之、
松岡秀樹、上村修司、井戸章雄
メサラジンアレルギーによる脳梗塞を発症した潰瘍性大腸炎の 1 例
第 108 回日本消化器病学会九州支部例会、熊本、2016 年 11 月 25 日

70. 安田 洋、安村拓人、ビベック・アリヤル、海江田衛、菰方輝夫
転移性肝腫瘍（S1）に対する下大静脈合併尾状葉単独切除の 1 例
第 53 回九州外科学会、長崎、2016 年 5 月 13 日

71. ビベック・アリヤル、安村拓人、安田 洋、上野隆幸、米山知秀、海江田衛、菰方輝夫
Two-stage treatment for pancreatic-duodenal artery aneurysm
第 53 回九州外科学会、長崎、2016 年 5 月 13 日

72. 安村拓人、安田 洋、ビベック・アリヤル、海江田衛、菰方輝夫
巨大後腹膜脂肪肉腫の 2 切除例
第 53 回九州外科学会、長崎、2016 年 5 月 13 日

73. 古屋敷和歌子、千代丸剛、恒吉研吾
AML が疑われた腎癌が対側腎に pT3b の転移性病変をきたしたものと思われた両側腎癌の 1 例
第 132 回日本泌尿器科学会鹿児島地方会、鹿児島、2016 年 7 月 9 日

74. 千代丸剛、古屋敷和歌子、恒吉研吾
当院における転移性腎細胞癌に対するニボルマブの初期使用経験
第 133 回日本泌尿器科学会鹿児島地方会、鹿児島、2016 年 12 月 18 日

75. Yanazume S, Tokudome A, Mori M, Uchida N, Kijima Y, Douchi T, Kobayash H.
Genital bleeding during curative radiotherapy in cervical cancer
第 68 回日本産科婦人科学会、東京、2016 年 4 月 22 日

76. 唐木田智子、新谷光央
胎児循環における短絡路の変化が原因と考えられた胎児不整脈の 2 例
第 68 回日本産科婦人科学会、東京、2016 年 4 月 23 日

77. 唐木田智子、大田俊一郎、簗詰伸太郎
多職種介入により一命を取り留めた術後急性肺血栓塞栓症の 1 例
第 135 回鹿児島産科婦人科学会学術集会、鹿児島、2016 年 9 月 17 日

78. 簗詰伸太郎、唐木田智子、永田真子、大田俊一郎
絨毛性疾患が疑われた子宮峡部妊娠の一例
第 136 回　鹿児島産科婦人科学会学術集会、鹿児島、2017 年 2 月 5 日

79. 吉福孝介、西元謙吾、松崎　勉
血痰を主訴に当科を受診した胸部大動脈瘤症例
第 117 回日本耳鼻咽喉科学会学術講演会、名古屋、2016 年 5 月 21 日

80. 久徳貴之、吉福孝介、西元謙吾、松崎　勉
外耳道に多発した尋常性疣贅の1症例
第 78 回耳鼻咽喉科臨床科学会・学術講演会、鹿児島、2016 年 6 月 23 日

81. 西元謙吾、吉福孝介、松崎　勉
声門下にハナビル（Dinobdella Ferox)が寄生した内部蛭症
第 78 回耳鼻咽喉科臨床科学会・学術講演会、鹿児島、2016 年 6 月 24 日

82. 松崎　勉、池田智子、塩川沙織、金城莉紗
電子化クリティカルパスの運用の利点と問題点
第 17 回クリティカルパス学会学術集会、金沢、2016 年 11 月 25 日

83. 野元三治
当院にて摘出された心臓粘液腫の臨床病理学的検討
第 105 回日本病理学会春期総会、仙台、2016 年 5 月 13 日

84. 江口洋子、夏迫亜弥、養田尚美、椋木里美、村上杏理、中山　歩、西　恭宏、中村康典
鹿児島医療センター病棟看護師の口腔ケアに関する意識調査~口腔ケアチーム導入後の現状と課題~
第 13 回日本口腔ケア学会総会・学術大会、千葉、2016 年 4 月 24 日

85. 村上杏理、中村康典、江口洋子、田中荘子、西　恭宏
鹿児島医療センターにおける口腔ケアチーム介入の現状とその効果
第 27 回日本老年歯科医学会総会・学術大会、岡山、2016 年 6 月 19 日

86. 松下茂人、青木恵美、鎌田博之、森口智江、安村拓人、是枝め衣、永田真子
頭頚部化学放射線施行患者における栄養管理～PEG と非 PGE との比較～
第 174 回日本皮膚科学会鹿児島地方会、鹿児島、2016 年 4 月 17 日

87. 山村健太郎、大塚篤司、加来　洋、椛島健治、野村基雄、松下茂人
悪性黒色腫 に対してニボルマブによる加療後にメラノファージの残存と脱色素斑の出現を認めた一例
第 32 回皮膚悪性腫瘍学会学術大会、鹿児島、2016 年 5 月 27 日

88. 山村健太郎、松下茂人、青木恵美
Melanoacanthoma の Bowenoid transformation が疑われた 1 例
第 445 回日本皮膚科学会京滋地方会、京都、2016 年 6 月 25 日

89. 青木恵美、松下茂人、山村健太郎
鹿児島医療センター皮膚腫瘍科における皮膚癌診療への取り組み
第 59 回日本形成外科学会総会・学術集会、福岡、2016 年 4 月 14 日

90. 青木恵美、松下茂人、山村健太郎、野元三治、田代幸恵、米倉健太郎、高木信介、春山勝紀、米良健太郎
母斑細胞のリンパ管・リンパ節浸潤を認めた 3 例~悪性黒色腫リンパ節転移との鑑別~
第 32 回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会、鹿児島、2016 年 5 月 28 日

91. 青木恵美、松下茂人、山村健太郎、寺崎健治朗、後藤正道
ブルーリ潰瘍の 1 例
第 101 回九州・沖縄形成外科学会学術集会、福岡、2016 年 7 月 9 日

92. 青木恵美、松下茂人、山村健太郎、小森園康二
自己免疫疾患を合併したメラノーマに対するニボルマブ治療
第 174 回日本皮膚科学会鹿児島地方会、鹿児島、2016 年 4 月 17 日

93. 恒吉美穂、井手智子
脳卒中急性期病棟におけるFIM導入の取り組み
第 41 回日本脳卒中学会、札幌、2016 年 4 月 15 日

94. 井手智子、西園さつき、水迫友和、橋口美和子、郡山香奈子
脳卒中地域連携における看護添書記入マニュアルの作成と今後の課題
第 41 回日本脳卒中学会、札幌、2016 年 4 月 15 日

95. 江口洋子、養田尚美、椋木里美、村上杏理、中山　歩、西　恭宏、中村康典
鹿児島医療センター病棟看護師の口腔ケアに関する意識調査～口腔ケアチーム導入後の現状と課題～
第 13 回日本口腔ケア学会総会・学術大会、千葉、2016 年 4 月 24 日

96. 伊藤由加、重森直子、松岡秀樹、宮下史生
当院における脳梗塞患者の急性期血行再建治療の現状
第 20 回日本救急学会九州地方会、山口、2016 年 6 月 4 日

97. 伊藤由加、重森直子、田中秀樹、東　健作
当院における急性期心筋梗塞患者の door-to-balloon 時間短縮への取り組み評価
第 20 回日本救急学会九州地方会、鹿児島、2016 年 6 月 4 日

98. 月見祐子、並松あずさ
ICU に緊急入院した患者家族のニードとコーピングの調査～CNS-FACE 家族アセスメントツールを使用して
第 26 回日本集中治療医学会九州地方会、沖縄、2016 年 6 月 25 日

99. 入江美紅、瀬戸佳代子、重久美咲、米森初枝
急性期病院の混合病棟で勤務する看護師が抱えるジレンマ～フライ S の倫理原則にあてはまらない事柄のカテゴリ分類～
第 47 回日本看護学会学術集会　急性期看護、沖縄、2016 年 7 月 15 日

100. 吉中愛美、野田麻美、松崎弘子、片平智子、松本志保
ボディイメージ変化の理解による術後経過の影響について
第 47 回日本看護学会学術集会　急性期看護、沖縄、2016 年 7 月 16 日

101. 水口梨花、岩本安以里、東真梨奈、東　健作
私の心臓手帳～地域連携パス～の新規作成
日本医療マネジメント学会第 15 回九州・山口連合大会、佐賀、2016 年 9 月 16 日

102. 児玉和代、有薗　愛、上浦さとみ、丸目芳美、園田喜子
慢性心不全患者の生活指導システムの構築～指導率の向上を目指して
第 20 回日本心不全学会学術集会、札幌、2016 年 10 月 7 日

103. 尾辻真由美
難治性糖尿病患者の 1 例を振り返る
第 54 回日本糖尿病学会九州地方会、鹿児島、2016 年 10 月 15 日

104. 赤尾綾子、 尾辻真由美
教育入院プログラムに導入した「患者間の語りの場（ひだまり）」を通して
第 54 回日本糖尿病学会九州地方会、鹿児島、2016 年 10 月 15 日

105. 山﨑　瞳、玉利優里花、藤﨑佑貴子
虚血性心疾患により生活指導を受けた患者の退院後の行動変容に伴う思いと成功体験～困難感を抱きながら生活習慣改善を行う患者の心理～
第 13 回日本循環器看護学会、仙台、2016 年 10 月 23 日

106. 濱本健二、岩川　亜、梅下陽子
手術室クリニカルラダー導入後の意識・行動の変化
第 38 回日本手術医学会総会、沖縄、2016 年 11 月 4 日

107. 高崎裕子、樋園琴美、瀧山絢子
看護師が脳血管障害患者へ行ったリハビリテーションの効果～看護師による休日リハビリテーションを取り入れて～
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 11 日

108. 丸目芳美、大迫朋子、渡邊真裕子、伊藤由加、赤尾綾子、後藤隆彦、柏木千穂、田代祐子、栄順子、脇田由紀子、薮田由紀子、松元幾代
地震発生に備えた行動計画の見直し～災害訓練を通して
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 11 日

109. 江内谷彩佳、井手智子、今村朋子、岩切志織、神門　舞、栗脇千春、水流尚子、徳永志保、濱口明美、前田麻美、上野みゆき
PNS の現状と今後の課題
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 11 日

110. 松田理恵、渡邊真裕子、森山由記則
インシデントからの医療安全活動事例報告～蘇生バッグ統一化に向けて～
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 11 日

111. 平佐田育恵、井上正敏、上原真知子
脳卒中急患対応パス使用状況の把握と問題点の抽出
ICU におけるせん妄患者によるルート・ライン自己抜去防止への取り組み～CAM-ICU～
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 12 日

112. 木之下誠
CNS-FACE を用いた危機的状況にある患者の家族支援への効果
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 12 日

113. 米森初枝
急性期病棟における看護師のジレンマに対するマネジメント
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 12 日

114. 荒木信枝、小迫多喜子、河野仁美、水流尚子、池田智子
がん患者における胃瘻造設後のスキントラブルの現状
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 12 日

115. 田上さとみ、米森初枝、池田智子、堂園文子
退院調整加算の算定に繋がらなかった要因と対策
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 12 日

116. 大迫朋子、松崎　勉、緒方義史
デジタルカメラ汎用画像管理システム（Taurusシステム）の導入と評価
第 36 回医療情報連合大会（第 17 回医療情報学会学術大会）、横浜、2016 年 11 月 22 日

117. 岩本安以里、東真梨奈、東　健作
心不全クリニカルパス改定による心不全指導への効果
第 17 回日本クリニカルパス学会学術集会、金沢、2016 年 11 月 25 日

118. 塩川沙織、金城莉紗、田山麻衣、池田智子
耳鼻咽喉科領域におけるクリティカルパス使用状況の分析
第 17 回日本クリニカルパス学会学術集会、金沢、2016 年 11 月 25 日

119. 畠野　綾、﨑田綾美、有村知里、瀧山絢子、久保彩香、井手智子、高木幸子、大山　賢、宮下史生、松岡秀樹
緊急脳血管内治療パスの分析
第 17 回日本クリニカルパス学会学術集会、金沢、2016 年 11 月 26 日

120. 岡村陽子、三角朋恵、山之内美樹
夜間看護業務におけるストレスの傾向～病棟の看護師と救急外来看護師を比較して
第 14 回国立病院看護研究学会学術集会、熊本、2016 年 12 月 17 日

121. 下之薗留美、上野光代、養田尚美
化学療法を受ける患者の転倒予防に対する意識や行動の変化～転倒アセスメントシートを用いて～
第 14 回国立病院看護研究学会学術集会、熊本、2016 年 12 月 17 日

122. 中元めぐみ、養田尚美、神野美子
看護管理者のコンピテンシー・モデルを用いた事例検討会の評価と課題
第 14 回国立病院看護研究学会学術集会、熊本、2016 年 12 月 17 日

123. 井手智子、西園さつき、水迫友和、橋口美和子、郡山香奈子
脳卒中地域連携における看護添書記入マニュアルの作成と今後の課題
平成 28 年度鹿児島県リハビリテーション看護研究会、鹿児島、2017 年 1 月 14 日

124. 山下真澄、上野光代、春山千種、夏迫亜弥、奥沙也香、肝付千明、田川桃圭
家族危機の段階的過程に基づいた看護介入の検討
第 3 回九州HIV看護研修会、大分、2017 年 1 月 28 日

125. 栗脇千春、渡邊真裕子
A 病院の医療看護必要度からみる手指衛星回数の比較
第 32 回日本環境感染学会総会・学術集会、神戸、2017 年 2 月 24 日

126. 岩屋しほり、夏迫亜弥、養田尚美
血液造血器疾患患者に対する苦痛のスクリーニングシートの活用後の看護師の意識変化
第 39 回日本造血細胞移植学会総会、松江、2017 年 3 月 3 日

127. 有村優子、堤由美子
看護学校教員が職業継続において直面する困難感の分析－中堅期の役割変化に焦点をあてて－
第 36 回日本看護科学学会学術集会、東京国際フォーラム、2016 年 12 月 11 日

128. 小倉裕香
対人関係能力に課題を抱える学生の自己理解を促すための試みービデオを使用した教育方法を用いてー
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄コンベンションセンター、2016 年 11 月 12 日

129. 石川志保
学校で行う看護研究発表会での教育的効果の考察ー各学年の学習目標に沿った学習発表会の企画・運営を通してー
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄コンベンションセンター、2016 年 11 月 11 日

130. 髙城沙也香
ニカルジピン注射液による静脈炎発症の危険因子の解析
第 40 回薬学研究会及び九州地区国立病院薬剤師会総会、福岡、2016 年 7 月 02 日

131. 佐澤卓哉
呼吸サポートチーム（RST）における薬剤師の役割
第 26 回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会、東京、2016 年 10 月 10 日

132. 永光華菜
バンコマイシン初回投与設計時における TDM ソフトと TDM ガイドライン投与量の比較検討
宮崎・鹿児島地区薬学研究会及び薬剤科長協議会、鹿児島、2016 年 10 月 22 日

133. 髙城沙也香
ニカルジピン注射液による静脈炎発症の危険因子の解析と対応
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 11 日

134. 佐澤卓哉
呼吸サポートチーム（RST）における薬剤師の役割
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 11 日

135. 永光華菜
VCM 初回投与設計に対するソフトとガイドラインの比較検討
第 1 回鹿児島県病院薬剤師会学術大会、鹿児島、2017 年 2 月 12 日

136. 梅橋功征、山本将義、時任紀明、竹ノ下葉子、城ケ崎倫久
インターロイキン-33 による血管内皮細胞でのインターロイキン 8 の発現および分泌
第 20 回日本心血管内分泌代謝学会、東京、2016 年 12 月 16 日

137. 山本将義、梅橋功征、城ヶ崎倫久
炎症性サイトカインであるインターロイキン 33 は血管内皮細胞に作用し、ケモカイン GRO-αを発現誘導する
第 64 回日本心臓病学会学術集会、東京国際フォーラム、2016 年 9 月 25 日

138. 福田　勝、花田修一
同種造血幹細胞移植後に再発したドナー由来慢性骨髄性白血病の一例
第 17 回日本検査血液学会学術集会、福岡国際会議場、2016 年 8 月 6 日

139. 福田　勝
慢性骨髄性白血病』の症例提示・解説
日臨技九州支部卒後研修会・第 28 回血液検査研修会、長崎大学医学部、2017 年 2 月 18 日

140. 桑崎理絵、櫛田千晴、波野真伍、岡村優樹、梅橋功征、富園正朋、高永　恵、佐々木康雄、本山眞弥
上行大動脈解離と急性心筋梗塞に対する D-dimer の有用性
第 26 回国立病院臨床検査技師協会九州支部学会、長崎県総合福祉センター、2016 年 7 月 10 日

141. 桑崎理絵
僧帽弁に疣腫を認め 左室-左房交通を生じた 感染性心内膜炎の一例
鹿児島県超音波検査研究会、鹿児島、2017 年 1 月 26 日

142. 桑崎理絵、櫛田千晴、波野真伍、岡村優樹、梅橋功征、富園正朋、高永　恵、佐々木康雄、本山眞弥
上行大動脈解離と急性心筋梗塞に対する D-dimer の有用性
第 13 回鹿児島県医学検査学会、鹿児島、2017 年 2 月 18 日

143. 吉野　歩、山本将義、窪田美和、本山眞弥、野元三治
多形腺腫由来筋上皮癌の一例
第 13 回鹿児島県医学検査学会、鹿児島、2017 年 2 月 19 日

144. 吉野　歩、窪田美和、波野真悟、安藤諭吉、本山眞弥、佐々木康雄
シクロスポリン測定試薬の性能比較
第 26 回国臨協九州学会プログラム、長崎、2016 年 7 月 9 日

145. 時吉恵美、橋本剛志、梅橋功征、高永　恵、富園正朋、本山眞弥
大動脈弁狭窄症の重症度別における心電図所見の検討
第 13 回鹿児島県医学検査学会、鹿児島、2017 年 2 月 19 日

146. 宮崎いずみ
肺高血圧を契機に発見された肺動脈腫瘍の一症例
鹿児島県超音波研究会、鹿児島、2016 年 10 月 27 日

147. 岡村優樹、橋本剛志、波野真伍、桑崎理絵、梅橋功征、富園正朋、高永　恵、本山眞弥
Stanfod A 型急性大動脈解離における予後予測評価の検討
国立病院機構検査技師九州支部学会、長崎、2016 年 7 月 10 日

148. 岡村優樹
高齢で修正大血管転移症を認めた一症例
九州循環器エコーカンファレンス、鹿児島、2017 年 2 月 25 日

149. 大渕一葉、橋本剛志、梅橋功征、髙永　恵、富園正朋、佐々木康雄、本山眞弥
心臓超音波検査における三尖弁輪収縮期移動距離（TAPSE）の有用性
第 26 回　国立病院臨床検査技師協会九州支部学会、長崎、2016 年 7 月 10 日

150. 髙永　恵、富園正朋、梅橋功征、橋本剛志、橋本恵美、宮﨑いづみ、大渕一葉、本山眞弥
僧帽弁置換術後約 40 年目に発症した急性心不全の 1 例
鹿児島超音波研究会、鹿児島超音波研究会、鹿児島、2016 年 6 月 30 日

151. 髙永　恵、富園正朋、梅橋功征、橋本剛志、橋本恵美、宮﨑いづみ、大渕一葉、本山眞弥
僧帽弁置換術後約 40 年目に発症した急性心不全の 2 例
第 52 回日本臨床検査技師会九州支部医学検査学会、佐賀、2016 年 10 月 9 日

152. 髙永　恵、富園正朋、梅橋功征、橋本剛志、橋本恵美、宮﨑いづみ、大渕一葉、本山眞弥
急激な経過をたどった左房内血管肉腫の 1 例
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 11 日

153. 髙永　恵、富園正朋、梅橋功征、橋本剛志、橋本恵美、本山眞弥
遺残前環椎動脈の 2 例
第 13 回鹿児島医学検査学会、鹿児島、2017 年 2 月 18 日

154. 羽田里美
DECT を使用した CTEPH 患者の肺区域枝別部分潅流評価
第 95 回鹿児島県診療放射線技師会春季学術大会、鹿児島、2016 年 6 月 19 日

155. 山下一也、瀬筒美紀、野田一也、本村　登
画像誘導小線源治療（IGBT）における 帰室前後のアプリケータ位置ずれの検討
平成 28 年度九州国立病院療養所放射線技師会学術大会、大分、2016 年 10 月 1 日

156. 瀬筒美紀、宇治野喜宣、熊野純泰、野田一也、本村　登
画像誘導小線源治療（IGBT）における 帰室前後のアプリケータ位置ずれの検討
平成 28 年度九州国立病院療養所放射線技師会学術大会、大分、2016 年 10 月 1 日

157. 宇治野喜宣、瀬筒美紀、野田一也、本村　登
オートフュージョンを用いた セットアップ精度についての基礎的検討
第 80 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 11 日

158. 羽田里美、増井飛沙人、室屋英人、瀬筒美紀、山下一也、野田一也、本村 登
Dual-EnergyCT を使用した慢性血栓塞栓性肺高血圧症患者の肺区域枝別部分灌流評価
第 80 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 11 日

159. 大塚佳純、本村 登、山下絵里香、田上和幸、塗木徳人、薗田正浩
条件付き植込み型デバイス患者の MRI 撮影時の当院における運用システム構築と現状
第 81 回日本循環器学会学術集会、金沢、2017 年 3 月 18 日

160. 加來正之
心不全チーム管理栄養士としての現状と課題
第 20 回日本心不全学会、北海道、2016 年 10 月 7 日

161. 加來正之
心不全チーム管理栄養士が介入した食事摂取不良患者への対応と課題
第 70 回総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 11 日

162. 廣石さやか
カーボカウントを用いた栄養食事指導の画一化と職種間の連携に向けて
第 70 回総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 11 日

163. 加來正之
咽頭がん患者の放射線化学療法治療前及び治療期間中の栄養状態
第 20 回病態栄養学会、京都、2017 年 1 月 13 日

164. 廣石さやか
カーボカウントを用いた栄養食事指導の画一化と職種間の連携に向けて
第 20 回病態栄養学会、京都、2017 年 1 月 14 日

165. 石原亮一、黒岩綱成、黒木弘志、安永容子
当院心臓血管外科術後リハビリテーションにおける最終到達指導の再考～連続歩行評価からバランス評価への転換
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 12 日

166. 井上順一
作業療法のエンドポイントに関する一考察;急性期の片麻痺患者を対象とした治療プログラムに関する無作為化比較試験の経験を通して
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 12 日

167. 植囿航太
急性 MR を呈し PCPS を導入後、緊急手術を施行した症例に対する検討
第 70 回国立病院総合医学会、沖縄、2016 年 11 月 12 日

② 筆頭演者が鹿児島医療センターの職員以外

1. 瀬戸口春香、小倉道広、松元秀次、外山慶一、竹中恵太、山野啓輔、中村康典、下堂薗恵
舌圧測定器及び舌筋力計を用いた舌運動機能評価:脳卒中患者での検討-第 3 報-
第 22 回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会、新潟、2016 年 9 月 24 日

2. 西　恭宏、手塚征宏、吉村卓也、後藤雄一、河野真紀、西山　毅、鉛山光代、中村康典
摂食嚥下チームの連携と口唇閉鎖補助を兼ねたPAPを用いて経口摂取可能となった口腔癌多発症例
第 22 回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会、新潟、2016 年 9 月 24 日

3. 田村真吾、内野慶太、魚住公治、牧山明資、陶山浩一、福田　実、草場仁志、江崎泰斗、馬場英司、前田茂人
九州地区における甲状腺癌診療連携プログラム　現状と課題
第 14 回日本臨床腫瘍学会、神戸、2016。年 7 月 29 日

4. 青木めぐみ、伊集院裕康、古賀哲也、厚地伸彦、神山拓郎、野元三治、魚住公治
原発性腹膜癌（漿液性腺癌）の一例
日本超音波医学会九州地方会、長崎、2016 年 10 月 2 日

その他・研究会

1. 楠元啓介、片岡哲郎、上坊翔太、安﨑和博、久保忠弘、有村俊博、薗田正浩、中島　均
冠動脈ステント留置後の抗血小板薬2剤併用療法における血小板凝集能測定の意義の検討
第 3 回鹿児島循環器カンファレンス、鹿児島、2016 年 10 月 29 日

2. 田中秀樹
心不全と不整脈の最近のトレンド
薬剤師対象　服薬指導セミナー　in Kagoshima、鹿児島、2016 年 7 月 9 日

3. 薗田正浩
弁の閉鎖不全と弁置換
薬剤師対象第 5 回　服薬指導セミナー　in Kagoshima、鹿児島、2016 年 8 月 6 日

4. 塗木徳人
心房細動の治療
臨床医のための不整脈診断・治療勉強会、薩摩川内、2016 年 9 月 15 日

5. 塗木徳人
心房細動の治療
第 22 回鹿児島消化器・生活習慣病フォーラム、鹿児島、2016 年 10 月 16 日

6. 田上和幸
当院で施行したリード抜去治療
第 34 回黎明心臓フォーラム、鹿児島、2016 年 10 月 22 日

7. 馬場善政、伊集院駿、石川裕輔、山下恵里香、平峯聖久、田上和幸、東　健作、田中秀樹、塗木徳人、薗田正浩
僧帽弁人工弁置換術後に状態が急変した大動脈弁下部狭窄の一例
第 3 回鹿児島循環器カンファレンス、鹿児島、2016 年 10 月 29 日

8. 伊集院駿、田中秀樹、石川裕輔、馬場善政、山下恵里香、平峯聖久、田上和幸、東　健作、塗木徳人、薗田正浩
弁輪形成後の機能的僧帽弁狭窄により病態が悪化したため再手術を要した症例
第 3 回鹿児島循環器カンファレンス、鹿児島、2016 年 10 月 29 日

9. 田上和幸
新の不整脈治療―バルーンによる心房細動アブレーション、リード抜去等―
第 234 回南薩心臓疾患研究同好会、鹿児島、2016 年 11 月 16 日

10. 石川裕輔
サムスカの使用方法についての検討
サムスカ発売5周年記念講演会、鹿児島、22016 年 12 月 7 日

11. 伊集院駿
急性肺血栓塞栓症の抗凝固療法別血栓体積量の急性期変化についての検討
第 20 回城山循環器カンファレンス、鹿児島、2016 年 12 月 7 日

12. 伊集院駿
急性肺血栓塞栓症の抗凝固療法別血栓体積量の急性期変化についての検討
抗凝固法セミナーin Kagoshima、鹿児島、2016 年 12 月 14 日

13. 大山　賢
脳梗塞急性期における当院での NOAC 使用状況について
脳卒中治療連携懇話会、鹿児島、2016 年 5 月 16 日

14. 宮下史生
当院の急性期脳梗塞に対する血行再建術の現状
エドキサバンフォーラム　in　鹿児島、鹿児島、2016 年 6 月 24 日

15. 宮下史生
急性期再開通治療の時間短縮の試み
軽井沢脳血管内治療セミナー、長野、2016 年 7 月 18 日

16. 宮下史生、濵田祐樹、金子浩之、平嶺敬人、大山　賢、脇田政之、松岡秀樹
大量の血栓を認めた総頚動脈閉塞の高齢者の 1 例
第 1 回　Cerebrovascular Neurologist 研究会、福岡、2016 年 12 月 3 日

17. 宮下史生、濵田祐樹、金子浩之、平嶺敬人、大山　賢、脇田政之、松岡秀樹
大量の血栓を認めた総頚動脈閉塞の高齢者の 1 例
第 1 回神奈川脳血栓回収療法セミナー、神奈川、2017 年 1 月 28 日

18. 宮下史生
当院の急性再開通療法の現状
Thrombosis Expert Meeting、鹿児島、2017 年 2 月 16 日

19. 永田真子、濵田祐樹、武井　藍、宮下史生、脇田政之、松岡秀樹
潰瘍性大腸炎と好酸球増多症を伴った多発性脳梗塞について
鹿児島 Stroke 研究会、鹿児島、2017 年 2 月 17 日

20. 山路尚久、藤島弘光、小野陽平、指宿和成、坪内直子、藤田　浩
ロンサーフの長期投与が可能であった一症例
鹿児島消化器がん治療フォーラム、鹿児島、2016 年 6 月 14 日

21. 安村拓人、安田　洋、井上真岐、海江田衛、菰方輝夫
循環器内科・外科の collaboration で 救命し得た脾動脈瘤破裂の 1 例
第 72 回鹿児島県臨床外科学会、鹿児島、2016 年 8 月 20 日

22. 中村康典
病気に罹る前からのお口のケア・生涯口から食べることを目指して　-
第 59 回春季日本歯周病学会学術大会市民公開講座、鹿児島、2016 年 5 月 21 日

23. 中村康典
急性期病院における口腔ケアと医科歯科連携
NPO 在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク第 22 回全国の集い in 鹿児島 2016、鹿児島、2016 年 9 月 19 日

24. 松下茂人
メラノーマ治療における免疫療法の位置づけと将来展望
第 2 回がん免疫療法セミナーin Miyagi、仙台、2016 年 4 月 7 日

25. 松下茂人
保存的治療（外用薬・ドレッシング材）
2016 年日本褥瘡学会公認九州・沖縄地方会教育セミナー、佐賀、2016 年 4 月 30 日

26. 松下茂人
メラノーマにおけるリンパ節郭清を review する
第 32 回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会、鹿児島、2016 年 5 月 27 日

27. 松下茂人
地元で看取る～人生の最期を何処で過ごすか～
第 32 回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会、鹿児島、2016 年 5 月 28 日

28. 松下茂人
乳房外パジェット病の治療と問題点
平成 28 年度皮膚悪性腫瘍指導専門医研修会、鹿児島、2016 年 5 月 28 日

29. 松下茂人
Dermato-Oncology と皮膚外科医のこれから～メラノーマ治療の黎明期を迎えて～
第 6 回皮膚悪性腫瘍治療フォーラム、名古屋、2016 年 9 月 27 日

30. 松下茂人
皮膚悪性腫瘍治療のパラダイムシフトと最先端医療の確立
第 15 回神戸がん研究会、神戸、2017 年 1 月 19 日

31. 松下茂人
皮膚悪性腫瘍治療のパラダイムシフトと最先端医療の確立
第 15 回神戸がん研究会、神戸、2017 年 1 月 19 日

32. 松下茂人
メラノーマ治療における免疫療法の位置づけと将来展望
北九州 Melanoma Expert Meeting 2016、北九州、2017 年 1 月 26 日

33. 松下茂人
メラノーマ治療のパラダイムシフト～がん免疫療法の黎明期～
広島県病院薬剤師会東支部学術講演会、福山、2017 年 2 月 10 日

34. 松下茂人
メラノーマ治療のパラダイムシフト～Overview & Future Directions～
Melanoma Symposium 2017 in Fukuoka、福岡、2017 年 2 月 11 日

36. 松下茂人
メラノーマ治療のパラダイムシフト～がん免疫療法の黎明期～
学術講演会 2017、熊本、2017 年 3 月 24 日

37. 井手智子
チームで取り組む DVT 対策と脳卒中領域での DVT 予防の必要性
第 17 回 VTE 医療安全セミナーin 鹿児島～肺塞栓症ゼロを目指して～、鹿児島、2016 年 9 月 3 日

38. 田代祐子
ケアにつなげようフィジカルアセスメント～呼吸管理の苦手意識を克服する方法～
呼吸セミナーin 鹿児島、鹿児島、2017 年 1 月 28 日

39. 橋本恵美
ミトコンドリア心筋症の一例
第 262 回鹿児島超音波医学研究会、鹿児島、2016 年 8 月 25 日

40. 福田 勝
慢性骨髄性白血病の症例提示・解説
日臨技九州支部卒後研修会・第 28 回血液検査研修会、長崎、2017 年 2 月 18 日

41. 桑崎理絵
僧帽弁に疣腫を認め 左室-左房交通を生じた 感染性心内膜炎の一例
鹿児島県超音波検査研究会、鹿児島、2017 年 1 月 26 日

42. 宮崎いずみ
肺高血圧を契機に発見された肺動脈腫瘍の一症例
鹿児島県超音波研究会、鹿児島、2016 年 10 月 27 日

43. 岡村優樹
高齢で修正大血管転移症を認めた一症例
九州循環器エコーカンファレンス、鹿児島、2017 年 2 月 25 日

44. 高永 恵、富園正朋、梅橋功征、橋本剛志、橋本恵美、宮崎いずみ、大渕一葉、本山眞弥
僧帽弁置換術後約 40 年目に発症した急性心不全の 1 例
鹿児島超音波研究会、長崎、2016 年 6 月 30 日

45. 橋本剛志
PAD へのアプローチ「ABI 検査から病気をみる」
鹿児島県臨床検査技師会臨床生理部門合同研修会、鹿児島、2016 年 7 月 16 日

46. 羽田里美
DECT を使用した CTEPH 患者の肺区域枝別部分灌流評価
肺塞栓症を考える～診断と治療～in、沖縄、2016 年 5 月 31 日

47. 熊野純泰
医療被ばく低減施設 活動と課題
平成 28 年度九州地域放射線技師研修会、福岡、2016 年 9 月 3 日

48. 田上俊平、佐々木美香子、花房豊宜、野田一也、本村 登
当院での頭部 CT における 水晶体被ばく低減の基礎的検討
平成 28 年度南九州地区研修会、姶良、2016 年 9 月 10 日

49. 大浦美樹、羽田里美、野田一也、本村 登
201Tl 心筋血流シンチ撮像時のアーチファクト軽減の検討
平成 28 年度九州国立病院療養所放射線技師会学術大会、大分、2016 年 9 月 10 日

50. 平川　遼、山下一也、田上俊平、瀬筒美紀、野田一也、本村登
当院の冠動脈 CT における陰性的中率について
平成 28 年度南九州地区研修会、姶良、2016 年 9 月 10 日

51. 大塚佳純、山下一也、平川　遼、野田一也、本村　登
SIEMENS 社製 MRI 装置の Dot アップグレードの使用経験～心臓 MRI 検査において～
平成 28 年度南九州地区研修会、姶良、2016 年 9 月 10 日

52. 宇治野喜宣、瀬筒美紀、野田一也、本村　登
2 種類の画像誘導方式の セットアップエラーの比較
第 10 回南九州地域放射線治療合同研究会、熊本、2017 年 2 月 4 日

53. 淵脇美保子
脳卒中予防の食生活
第 14 回　脳卒中市民講座、鹿児島、2016 年 5 月 29 日

54. 加來正之
咽頭がん患者の放射線化学療法治療前及び治療期間中の栄養状態
鹿児島県栄養士会研究発表会、鹿児島、2017 年 2 月 11 日

55. 倉見谷耕太
水分バランス算出方法とデータ
Experts Conference of Circulation in Kagoshima、鹿児島、2017 年 2 月 24 日

56. 湯田大介
血栓溶解療法および血栓回収療法により左 ICA の再開通が得られた重度ブローカ失語の一症例～超急性期治療後の回復過程と言語訓練に着目して～
鹿児島県言語聴覚士会（鹿児島地区）症例検討会（日本 ST 協会生涯学習プログラム）
鹿児島、2016 年 10 月 22 日

【VI】　学術講演

1. 中島　均
インターベンション医が DOAC を考えると
抗血栓療法を考える会、鹿児島、2016 年 4 月 6 日

2. 中島　均
PCI 後の長期予後改善を目指した治療戦略
第 2 回服薬指導セミナー、鹿児島、2016 年 5 月 7 日

3. 中島　均
虚血性心疾患の抗血小板療法
抗血栓療法トータルケアセミナー、鹿児島、2016 年 5 月 20 日

4. 片岡哲郎
狭心症・心筋梗塞
第 3 回服薬指導セミナー、鹿児島、2016 年 6 月 11 日

5. 片岡哲郎
診断治療セッション①「PCI①」
第 10 回九州インターベンションヤングフェローシップ、福岡、2016 年 8 月 6 日

6. 片岡哲郎
冠動脈ステント留置後の抗血小板薬 2 剤併用療法における血小板凝集能測定の意義の検討
PCI Network Coference、鹿児島、2016 年 9 月 28 日

7. 片岡哲郎
Stent Elongation についての追加考察
第 18 回鹿児島インターベンション・カンファレンス、鹿児島、2015 年 11 月 12 日

8. 久保忠弘
高血圧について
第 1 回服薬指導セミナー、鹿児島、2016 年 4 月 2 日

9. 久保忠弘
DVT 治療における新たな選択肢　NOAC への期待
抗凝固療法 WEB カンファレンス、鹿児島、2016 年 5 月 12 日

10. 久保忠弘
DVT 治療における新たな選択肢　NOAC への期待
エリキュース　症例検討カンファレンス、奄美、2016 年 9 月 1 日

11. 上坊翔太
2 種類の第 2 世代 DES 留置部に同時に PSS を認めた症例の 2 年間にわたる経過観察
Intervention Joint Meeting、奈良、2016 年 7 月 29 日

12. 塗木徳人
心房細動のカテーテル・アブレーション
指宿内科医会学術講演会、指宿、2016 年 9 月 13 日

13. 塗木徳人
心房細動の治療～外来で考えていること～
鹿屋地区内科医会学術講演会、鹿屋、2016 年 12 月 2 日

14. 松岡秀樹
抗血栓（抗凝固）療法の実際について
抗血栓療法を考える会、鹿児島、2016・年 4 月 6 日

15. 松岡秀樹
脳梗塞再発予防の現状と課題
Care AF 講演会、大分、2016 年 7 月 30 日

16. 松岡秀樹
脳卒中重症化予防のための危険因子管理
鹿児島県国保連合会研修会、鹿児島、2016 年 8 月 27 日

17. 松岡秀樹
高齢者心房細動患者における抗凝固療法の現状と問題点
抗凝固療法を語る会、鹿児島、2016 年 10 月 31 日

18. 松岡秀樹
脳卒中治療と地域連携
鹿屋肝属地区の脳卒中医療の現状を語る会、鹿児島、2016 年 11 月 4 日

19. 松岡秀樹
脳卒中再発予防を目指した治療戦略
Arteriosclerosis Conference、鹿児島、2016 年 11 月 17 日

20. 松岡秀樹
高齢者における抗血栓療法の現状と課題
沖永良部地区医師会学術講演会、鹿児島、2017 年 1 月 20 日

21. 松岡秀樹
抗凝固療法の新たな展開
脳卒中 Expert Meeting、鹿児島市、2017 年 1 月 27 日

22. 松岡秀樹
脳卒中をどこでくい止めるか
奄美市脳卒中予防フォーラム、鹿児島、2017 年 1 月 29 日

23. 松岡秀樹
寝たきりにならないために -脳卒中の予防と対策-
松元地区脳卒中予防教室、鹿児島、2017 年 2 月 2 日

24. 松岡秀樹
高齢者における抗血栓療法の現状と課題
瀬戸内地区抗血栓療法学術講演会、鹿児島、2017 年 2 月 3 日

25. 松岡秀樹
脳卒中を理解する -重症化予防のために-
奄美地区国保団体協議会保健事業研修会、鹿児島、2017 年 2 月 10 日

26. 松岡秀樹
高齢者における抗血栓療法の現状と課題
循環器連携セミナー、鹿児島、2017 年 2 月 15 日

27. 松岡秀樹
脳卒中とその後遺症
市民公開講座 健康セミナー、鹿児島、2017 年 2 月 19 日

28. 松岡秀樹
高齢者心房細動患者における抗凝固療法の現状と問題点
脳卒中地域連携フォーラム in 出水、鹿児島、2017 年 2 月 20 日

29. 松岡秀樹
脳動脈解離
第 42 回日本脳卒中学会総会教育講演、大阪、2017 年 3 月 18 日

30. 宮下史生
脳卒中の診断と治療
小倉病院学術講演会、鹿児島、2017 年 2 月 10 日

31. 吉永正夫
『パネルディスカッション 6 学校心臓検診の意義：各心疾患毎のアウトカムから探る』
QT 延長症候群
52 回日本小児循環器学会総会・学術集会、東京、平成 28 年 7 月 7 日

32. 吉永正夫
小児遺伝性不整脈について
第1回平成 28 年度スポーツ庁女性アスリート育成・支援プロジェクト戦略推進会議、別府市、平成 28 年 9 月 30 日

33. 吉永正夫
日本の学校心臓検診の意義
平成 28 年度山口県医師会学校心臓検診精密検査医療機関研修会、山口市、平成 28 年 12 月 4 日

34. 吉永正夫
小児肥満の現状とこれからの課題
第 49 回若年者心疾患・生活習慣病対策協議会総会、岡山市、平成 29 年 1 月 29 日

35. 吉永正夫
子どもの生活習慣病に関する全国調査・介入試験結果と今後の課題
平成 28 年度愛知県学校保健シンポジウム、名古屋、平成 29 年 3 月 5 日

36. 郡山暢之
糖尿病　Brush Up !
平成 28 年鹿児島県耳鼻咽喉科医会総会第 54 回臨床懇話会、鹿児島市、2016 年 4 月 9 日

37. 小木曽和磨
ライゾデグ配合注への期待～当院の使用経験からの考察～
インスリン療法 UPDATE、鹿児島、2016 年 6 月 3 日

38. 郡山暢之
「こころ」を支える糖尿病治療を目指して！～予防的糖尿病フットケア臨床の実際を含めて～
第 7 回奄美糖尿病教育コメディカル研修会、奄美、2016 年 6 月 4 日

39. 小木曽和磨
インスリン持続静注用アルゴリズムを用いた当院の周術期血糖管理の取り組みについて
第 383 回 医師会病院薬物療法研修会、鹿児島、2016 年 6 月 21 日

40. 時任紀明
DPP4 阻害薬の血糖低下作用と多面的効果について
第 383 回医師会病院薬物療法研修会、鹿児島、2016 年 8 月 6 日

41. 郡山暢之
Lecture 2　SGLT2 阻害薬の至適投与法とは？
第 64 回鹿児島 SDM 研究会、京都、2015 年 10 月 10 日

42. 郡山暢之
SGLT2 阻害薬の可能性　（パネルディスカッション）SGLT2 阻害薬をファーストラインで用いるとすれば、そのようなケースか？
SGLT2 PREMIUM CONFERENCE、鹿児島、2017 年 2 月 4 日

43. 郡山暢之
糖尿病治療 Update
服薬指導セミナー（糖尿病 2）、鹿児島、2017 年 3 月 4 日

44. 郡山暢之
甲状腺障害・1 型糖尿病
がん免疫療法連携セミナー、鹿児島、2017 年 3 月 9 日

45. 郡山暢之
糖尿病薬物療法の Brush Up
北薩糖尿病セミナー、川内、2017 年 3 月 15 日

46. 簗詰伸太郎
婦人科癌診療における臨床研究～子宮頸癌を中心に～
平成 28 年度子宮癌検診精密検査講習会、鹿児島、2016 年 9 月 17 日

47. 大田俊一郎
教育講演：大規模震災の教訓
第 136 回 鹿児島産科婦人科学会学術集会 、鹿児島、2017 年 2 月 5 日

48. 大田俊一郎
高齢者婦人科癌治療の検討
碩門会、鹿児島、2017 年 12 月 4 日

49. 大田俊一郎
緩和的人工肛門増設の検討
第 1 回鹿児島婦人科悪性腫瘍フォーラム、鹿児島、2017 年 11 月 2 日

50. 田代祐子
ケアにつなげようフィジカルアセスメント～呼吸管理の苦手意識を克服する方法～
呼吸セミナーin 鹿児島、鹿児島、2017 年 1 月 28 日

51. 梅橋功征
大動脈解離と Ddimer
南九州凝固・線溶セミナー、鹿児島、2016 年 11 月 12 日

52. 富園正朋、橋本剛志、橋本恵美、大渕一葉、宮崎いずみ、高永 恵、本山眞弥
若年者に認めた Barlow 病の1症例
第 26 回九州地方会学術集会、長崎、2016 年 10 月 2 日

53. 橋本剛志
PAD へのアプローチ「ABI 検査から病気をみる」
鹿児島県臨床検査技師会臨床生理部門合同研修会、鹿児島、2016 年 7 月 16 日

54. 羽田里美
DECT を使用した CTEPH 患者の肺区域枝別部分潅流評価
肺塞栓症を考える～診断と治療～in 沖縄、沖縄、2016 年 5 月 31 日

55. 加來正之
咽頭がん患者の放射線化学療法治療前及び治療期間中の栄養状態
鹿児島県栄養士会研究発表会、鹿児島、2017 年 2 月 11 日

56. 倉見谷耕太
水分バランス算出方法とデータ
Experts Conference of Circulation in Kagoshima、鹿児島、2017 年 2 月 24 日

57. 田場　要
摂食・嚥下障害がある人への食事支援について
鹿児島県ホームヘルパー協議会講習会、鹿児島、2016 年 5 月 24 日

58. 田場　要
摂食・嚥下障害～がん患者への対応～
平成 28 年度理学・作業療法士等特定技能派遣研修会（Ⅰ）、福岡、2016 年 7 月 8 日

59. 田場　要
摂食嚥下障害のメカニズムと支援方法
福祉用具の日　2016　快護生活フェス！福祉機器展＆セミナー　in　かごしま、鹿児島、2016 年 10 月 8 日

60. 田場　要
摂食嚥下の基礎・対応・方法
鹿児島県介護実習・普及センター主催　介護職基礎研修、鹿児島、2016 年 12 月 7 日

【Ⅶ】研究助成報告書

厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業）（平成 27 年度）
「小児期心筋症の心電図学的抽出基準、心臓超音波学的診断基準の作成と遺伝学的検査を反映した診療ガイドラインの作成に関する研究」
平成 27 年度総括・分担研究報告書　研究代表者：吉永正夫

Ⅰ. 総括研究報告書
吉永正夫
「小児期心筋症の心電図学的抽出基準、心臓超音波学的診断基準の作成と遺伝学的検査を反映した診療ガイドラインの作成に関する研究」 P. 1

Ⅱ. 分担研究報告書
1. 小児の心電図基準値作成に関する研究
吉永正夫、堀米仁志、住友直方、牛ノ濱大也、岩本眞理、泉田直己、田内宣生、長嶋正實　P.13-25

2. 新しい「小児の心電図基準値」を用いた肥大型心筋症の早期抽出基準に関する検討
吉永正夫、堀米仁志、住友直方、牛ノ濱大也、岩本眞理、泉田直己、田内宣生、長嶋正實　P. 26-33

3. 健常小児の心臓超音波所見の基準値作成に関する研究
吉永正夫、堀米仁志、大野聖子、市田蕗子、住友直方、長嶋正實、緒方裕光、堀江稔、蒔田直昌、牛ノ濱大也、田内宣生、佐藤誠一、高橋秀人、岩本眞理、太田邦雄、立野　滋、泉田直己、畑　忠善、小垣滋豊、安田和志、西原栄起、野村裕一、江口大助、鮎沢　衛　P. 34-50

4. 心筋症患児情報の収集と抽出基準・診断基準作成に関する研究
吉永正夫、堀米仁志、大野聖子、市田蕗子、住友直方、長嶋正實、緒方裕光、堀江稔、蒔田直昌、牛ノ濱大也、田内宣生、佐藤誠一、高橋秀人、岩本眞理、太田邦雄、立野　滋、泉田直己、畑　忠善、小垣滋豊、安田和志、西原栄起、野村裕一、江口大助、鮎沢　衛　P.51-60

【Ⅷ】助成金による研究

I. 公費臨床試験

以下 27 課題に参加した。

1. 皆越眞一
ST 上昇型急性心筋梗塞患者におけるβ遮断薬の有効性を検証する多施設共同無作為化比較試験（CAPITAL-RCT）

2. 中島　均
実地臨床におけるバイオリムス溶出性ステント（BES)とエベロリムス溶出性ステインと（EES)の有効性および安全性についての多施設前向き無作為オープンラベル比較試験【NOBORI　Biolims-Eluting versus XIENCE/PROMUS Everolimus-eluting Stent Trail】（NEXT）

3. 中島　均、薗田正浩
冠動脈疾患患者に対するピタバスタチンによる積極的脂質低下療法または通常脂質低下療法のランダム化比較試験 (Randomizesd Evaluation if Aggressive or Moderate Lipid Lowering Therap with Pitavastatin in Coronary Artery Disease)（REAL-CAD）

4. 中島　均
腎動脈狭窄症に対するステント治療の治療反応群予測因子の検討（VERDICT　trial）

5. 中島　均
冠動脈ステント留置術後 12 か月超を経た心房細動患者に対するワーファリン単独療法の妥当性を検証する多施設無作為化試験（OAC-ALONE Study）

6. 中島　均
心筋 SPECT 検査による心筋血流測定に関する研究

7. 中島　均
高尿酸血症に対するキサンチンオキシダーゼ阻害剤フェブキソスタットの血管障害予防効果に関する多施設ランダム化比較試験（PRIZE Study）

8. 中島　均、久保忠弘
SGLT2 阻害薬による動脈硬化予防の多施設共同ランダム化比較試験 2 管球 CT を用いた冠動脈狭窄、心筋虚血、心筋線維化の総合評価に関する多施設共同研究（AMPLIFiED）

9. 中島　均
SGLT2 阻害薬による動脈硬化予防の多施設共同ランダム化比較試験（PROTECT）

10. 片岡哲郎
日本人糖尿病合併冠動脈疾患患者における積極的脂質低下・降圧療法と標準治療のランダム化比較試験（CHD 介入・観察）

11. 中島　均、片岡哲郎
エベロリムス溶出性コバルトクロムステント留置後の抗血小板剤 2 剤併用療法(DAPT)期間を 1 か月に短縮することの安全性を評価する研究（STOPDAPT2）

12. 中島　均、薗田正浩
実臨床における Nobori バイオリムス A9 エリューティングステントの至適二剤併用抗血小板療法（DAPT）期間の検討（NIPPON）

13. 中島　均、薗田正浩
日本人糖尿病合併冠動脈疾患患者における積極的脂質低下・降圧療法と標準治療のランダム化比較試験（IMPROVE HF Japan Pilot 試験）

14. 中島　均、薗田正浩、東　健作、
安定型冠動脈疾患を合併する非弁膜症性心房細動患者におけるリバーロキサバン単剤療法に関する臨床研究（AFIRE Study）

15. 中島　均、薗田正浩
心不全患者の実態調査および予後に関する予後に関する前向き観察研究（多施設共同研究）

16. 中島　均、薗田正浩、松岡秀樹
非弁膜症性心房細動患者の脳卒中および全身性閉塞症に対するリバーロキサバンの有効性と安全性に関する登録観察研究（EXPAND 研究）

17. 塗木徳人
心房細動アブレーションを施行予定の非弁膜症心房細動患者を対象に、心房細動アブレーション周術期におけるダビガトランの安全性及び有効性をワルファリンを対照薬として比較する前向き、多施設共同、並行群間試験（ABRIDGE-J）

18. 塗木徳人
心房細動を合併する冠動脈疾患症例に対するアピキサバン併用下DAPT投与期間に関する医師主導型臨床研究（SAFE-A）

19. 塗木徳人、今村純一
脳卒中既往患者を対象とした厳格降圧療法の二次予防効果を検討する大規模臨床研究（RESPECT Study）

20. 松岡秀樹
脳梗塞再発高リスク患者を対象とした抗血小板薬へ尿療法の有効性及び安全性の検討（CSPS.com 研究）

21. 松岡秀樹
非弁膜症性心房細動患者の急性脳梗塞/TIAにおけるリバーロキサバンの投与開始時期に関する観察研究（RELAXED）

22. 郡山暢之
NAFLD を有する日本人 2 型糖尿病患者に対するリナグリプチン研究（J-LINK study）

23. 簗詰伸太郎
局所進行子宮頸癌根治放射線療法施行令に対するUFTによる補助科学療法のランダム化第Ⅲ相比較試験（GITIC002）

24. 魚住公治
ヨンデリス点滴（症例登録）

25. 松下茂人
進行悪性黒色腫に対するニボルマブの有効性評価に関する観察研究
（CSPOR-melanoma）

26. 片岡哲郎
非弁膜症性心房細動を有する後期高齢患者を対象とした前向き観察研究
（REAL-ST）

27. 大塚眞紀
日本におけるゴーシェ病の実態調査

28. 片岡哲郎、塗木徳人、松岡秀樹
非弁膜症性心房細動を有する後期高齢患者を対象とした前向き観察研究（ANAFIE Registry）

29. 中島　均
大動脈瘤/大動脈解離患者の実態調査および予後に関する前向き観察研究

30. 楠元啓介
動脈硬化を基盤とした虚血性心臓病における新規血液マーカーの確立

31. 片岡哲郎、塗木徳人、松岡秀樹
非弁膜性心房細動を有する後期高齢者患者を対象とした前向き観察研究
（ANAFIE-Registry）

II. EBM推進のための大規模臨床研究

国立病院機構の病院グループで大規模な臨床研究を行い、EBM（科学的根拠に基づいた医療）の普及促進に貢献する目的で「EBM推進のための臨床研究」が実施されている。この「EBM推進のための臨床研究」には治験コーディネーターが研究補助担当者への支援を行っている。当院が参加している課題を以下に示す。

平成26年度採択課題

城ヶ崎倫久（施設臨床研究責任医師）
疾患特異的iPS細胞作製研究基盤支援整備研究　H26-指定-05
研究代表者　尾方克久（東埼玉病院）
平成27年2月~平成29年3月の研究期間中に5症例の登録を行い、研究を終了した。

平成 22 年度採択課題

郡山暢之（施設臨床研究責任医師）
2 型糖尿病を併せ持つ高血圧患者におけるメトホルミンの心肥大・心機能に対する効果の検討（ABLE-MET） H22-EBM(介入)-01
研究代表者　尾野　亘（京都医療センター）
現在解析中である。

平成 24 年度採択課題

城ヶ崎倫久（施設臨床研究責任医師）
わが国における尿酸排泄動態に関する基準範囲の検討（RICE-U） H24-EBM（観察）-01
研究代表者　津谷　寛（あわら病院）
平成 26 年 2 月~平成 28 年 6 月の研究期間中に 9 症例の登録を行い、研究を終了した。

平成 26 年度採択課題

1. 郡山暢之（施設臨床研究責任医師）
日本人の肥満症の発症と治療効果・抵抗性に関連する遺伝素因の探索~オーダーメイド医療の確立~（G-FORCE） H26-遺伝子-03
研究代表者　浅原哲子（京都医療センター）
平成 28 年度より研究を開始し、現在症例登録作業中である。

2. 菰方輝夫（施設臨床研究責任医師）
膵がん切除後の補助化学療法におけるS-1 単独療法とS-1とメトホルミンの併用療法の非盲検ランダム化第Ⅱ相比較試験（ASMET） H26-EBM(介入）-03
研究代表者　古川　正幸（九州がんセンター）
平成 28 年 1 月より研究を開始し、現在登録作業中である。

3. 大塚眞紀（施設臨床研究責任医師）
未治療多発性骨髄腫における遺伝子解析による治療感受性・予後予測因子の探索的研究（NGSMM） H26-遺伝子-02
研究代表者　神谷悦功（東名古屋病院）
平成 28 年度より研究を開始し、現在症例登録作業中である。

平成 27 年度採択課題

菰方輝夫（施設臨床研究責任医師）
免疫抑制患者に対する 13 価蛋白結合型肺炎球菌ワクチンと 23 価莢膜多糖体型肺炎球菌ワクチンの連続接種と 23 価莢膜多糖体型肺炎球菌ワクチン単独接種の有効性の比較～二重盲検無作為化比較試験～（CPI STUDY） H27-EBM(介入）-01
研究代表者　丸山貴也（三重病院）
平成 28 年度より研究を開始し、現在症例登録作業中である。

Ⅲ. NHO ネットワーク共同研究

以下 9 課題に参加した。

ⅰ) 文書患者の同意の必要なもの

1. 大塚眞紀（分担研究者）
多発性骨髄腫の遺伝子異常と治療効果および予後に関する研究、H26-NHO（血液）-01、研究代表者：角南一貴（岡山医療センター）

2. 大塚眞紀（分担研究者）
再発又は難治性の高齢者びまん性大細胞型B細胞リンパ腫に対する R-GDP 療法に関する第II相試験、H26-NHO（血液）-02、研究代表者：山崎　聡（岡山九州医療センター）

3. 郡山暢之（分担研究者）
多面的管理達成者の糖尿病腎症予後改善効果を予測できる非侵襲的指標の確立（DNrem 研究）、H27-NHO(糖尿)-01、研究代表者：西村元伸（千葉東病院）

4. 大塚眞紀（分担研究者）
加齢性 Epstein-Barr virus 関連リンパ増殖性疾患における PD-1/PD-L1 シグナルの病態への関与と予後予測に関する解析、H27-NHO(血液)-01、研究代表者：國富あかね（名古屋医療センター）

5. 大塚眞紀（分担研究者）
特発性血小板減少性紫斑病に対する初期治療としての短期デキサメタゾン大量療法の多施設共同非盲検無対照試験、H27-NHO(血液)-02、研究代表者：高瀬謙（九州医療センター）

ⅱ) 患者の同意が必要ないもの

1. 菰方輝夫（分担研究者）
消化器外科緊急手術症例における術後死亡予測モデル CORES、NSQIP の比較検証試験、H26-NHO（外科）-01、研究代表者：芳賀克夫（熊本医療センター）

2. 野元三治（分担研究者）
病理診断支援システムの機能と病理部門インシデントの関係を調査する前向き登録研究、H27-NHO(多共)-02、研究代表者：寺本典弘（四国がんセンター）

3. 大塚眞紀（分担研究者）
NHO 血液・造血器疾患ネットワーク参加施設に新たに発生する多発性骨髄腫の予後に関する臨床的要因を明らかにするコホート研究、H28-NHO(血液)-01、研究代表者：積山明弘（東京医療センター）

Ⅳ.プロトコール（承認順）

当院で独自に作成したプロトコールは 44 題あった。倫理審査委員会の承認順に以下に記す。

1. リハビリテーション科　井上順一
脳卒中患者における麻痺側上肢の自主訓練と機能的な使用のための問題解決に対する介入効果

2. 臨床研究部　山本将義
心臓原発腫瘍における生理活性物質の発現及び分泌とその役割についての研究

3. 放射線科　山下一也
心臓 CT 検査における管電圧自動調整機能による被ばく提言に関する研究

4. 臨床検査科　橋本恵美
たこつぼ型心筋症と急性前壁中隔心筋梗塞における QT 時間と生命予後予測因子の検討

5. 看護部　川畑博美
当院のエンゼルケアの現状と課題～カルテ調査からみた教育課題～

6. 看護部　今村亜紀
婦人科手術を受ける患者の術前不安の実態～疾患・患者背景別に分析して～

7. 看護部　濱﨑博恵
心臓手術後患者の退院指導を受けての思い

8. 看護部　藤元亜里沙
経管栄養患者への嚥下回診を取り入れた効果～誤嚥性肺炎の減少を目指して～

9. 看護部　富永庸子
心不全患者の療養指導における効果的アプローチ～6ステップ・メソッドに基づいた介入～

10. 看護部　入江美江
未成年の子を持つ女性生殖器がん患者の家族への思い

11. 放射線科　熊野純泰
心臓血管撮影検査における放射線被ばく線量管理レポートシステムに関する研究

12. 看護部　東真梨奈
心不全患者に関わる地域医療スタッフへの継続看護の充実化にむけて

13. 看護部　水流尚子
転院に対する患者・家族の思いと今後に向けた展望

14. 看護部　田山麻衣
意思決定の場面で「ゆらぎ」を感じる看護師の「ゆらぎ」の原因と支援方法

15. 看護部　江口洋子
スクリーニングシート「生活のしやすさの質問票」導入における看護師の意識の変化

16. 看護部　西園聖八
アクションカードを用いた災害シミュレーションによる手術室看護師の意識の変化

17. 看護部　岩正佳子
ICU に配属された看護師のストレス要因～卒後4～6年目看護師へのインタビューを通して～

18. 看護部　出口喬一
病棟における男性看護師が感じる困難や思い～集中治療室勤務者に焦点を当てて～

19. 糖尿病・内分泌科　大保崇彦
カルシウム感知受容体遺伝子の遺伝子検査

20. 看護部　池田智子
当病院における卒後3年目看護師の社会人基礎力の現状～社会人基礎力調査の結果から考察する～

21. 皮膚腫瘍科・皮膚科　松下茂人
メラノーマ患者に対する PD-1 阻害薬の免疫作用を検討する多施設共同臨床研究

22. 看護部　台場　楓
がん看護における困難感への対処～がん看護6年目以上の看護師へのインタビューを通して～

23. 歯科・口腔外科　村上杏里
鹿児島医療センターにおける口腔ケアチームの現状とその効果

24. 看護部　赤尾綾子
中堅看護師の副看護師長に対する思い

25. 小児科　吉永正夫
小児期心筋症の心電図学的抽出基準、心臓超音波学的診断基準の作成と遺伝子学的検査を反映した診療ガイドラインの作成に関する研究」1.健常児の心臓超音波所見の基準値（正常値）作成に関する研究

26. 小児科　吉永正夫
小児期心筋症の心電図学的抽出基準、心臓超音波学的診断基準の作成と遺伝子学的検査を反映した診療ガイドラインの作成に関する研究」2.心筋症患児の臨床的データ収集に関する研究

27. 小児科　吉永正夫
QT 延長症候群患児の管理基準作成に関する研究

28. 看護部　東　美希
造血幹細胞移植を受ける患者の口腔粘膜障害軽減へ向けた口腔ケアの有用性

29. 看護部　栗脇千春
鹿児島医療センターの医療・看護必要度からみる手指衛生回数の比較

30. 臨床検査科　梅橋功征
頸動脈プラークにおける Interleukin-33 及び Interleukin-8 の発現についての研究

31. 臨床検査科　橋本剛志
心電図変化による大動脈弁狭窄症の重症度評価に関する研究

32. 麻酔科　佐保尚三
開心術における肺出血症例の検討

33. 看護部　井出智子
エキスパートナース研修の評価及び研修後の支援方法の検討

34. 小児科　吉永正夫
遺伝性心疾患の遺伝子解析

35. 小児科　吉永正夫
学校心臓検診でスクリーニングされた小児期 Burugada 症候群の頻度と予後に関する研究

36. 小児科　田中裕治
学校心臓検診で診断される心室期外収縮の予後に関する観察研究

37. 放射線科　井手上淳一
塩化ラジウム（223RaCl2）注射液による内用療法の画像評価に関する研究

38. 糖尿病・内分泌内科　小木曽和磨
バイエッタの 1 日 3 回投与による食後血糖改善効果の検討

39. 糖尿病・内分泌内科　小木曽和磨
アセトアミノフェン試験

40. 糖尿病・内分泌内科　小木曽和磨
肝性糖尿病患者に対するグルカゴン試験と GLP-1 受容体作動薬の効果の検討

41. 糖尿病・内分泌内科　小木曽和磨
開胸術周術期の血糖管理における当院インスリン持続静注用アルゴリズムの成績

42. 薬剤部　山口康弘
Support Vector Machine を用いた薬物動態の解析

43. 臨床検査科　岡村優樹
D-dimer による Stanfod　A 型急性大動脈解離の予後予測評価の研究

44. 栄養管理室　加來正之
咽頭がん患者の心電図変化による大動脈弁狭窄症の重症度評価に関する研究

V. 競争的資金獲得額

1. 厚生労働科学研究費

1. 吉永正夫（主任研究者）
難治性疾患等政策研究事業
小児期心筋症の心電図学的抽出基準、心臓超音波学的診断基準の作成と遺伝学的検査を反映した診療ガイドライン作成に関する研究
8,190,000 円

2. 吉永正夫（分担研究者）
難治性疾患等克服研究事業
遺伝子診断に基づく不整脈疾患群の病態解明および診断基準・重症度分類・ガイドライン作成に関する研究
研究代表者：滋賀医科大学　堀江　稔
150,000 円

3. 吉永正夫（分担研究者）
成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業
乳幼児突然死症候群(SIDS)及乳幼児突発性危急事態(ALTE)の病態解明と死亡数減少のための研究
研究代表者：三重大学　加藤稲子
700,000 円

2. 民間セクターからの寄付金

1. 森山由紀則（主任研究者）
高齢者の心臓・血管疾患に対する外科治療の研究（日本ライフライン株式会社）
700,000 円

2. 森山由紀則（主任研究者）
心臓病治療に関する研究助成（エドワーズライフサイエンス株式会社）
300,000 円

3. 森山由紀則（主任研究者）
心臓病治療に対する研究助成（エドワーズライフサイエンス株式会社）
300,000 円

4. 森山由紀則（主任研究者）
臨床研究部の循環器疾患の治療法確立などに関する研究（センチュリーメディカル株式会社）
300,000 円

5. 森山由紀則（主任研究者）
外科における研究を助成するため（科研製薬株式会社福岡支店）
200,000 円

6. 菰方輝夫（主任研究者）
外科における研究を助成するため（科研製薬株式会社福岡支店）
100,000 円

7. 菰方輝夫（主任研究者）
外科・消化器外科治療の研究のため（エドワーズライフサイエンス株式会社）
150,000 円

8. 菰方輝夫（主任研究者）
科領域がんにおけるがん治療に関する研究（株式会社メディコン）
100,000 円

9. 木村　登（主任研究者）
放射線画像診断技術に関する研究助成（日本メジフィジックス株式会社社長　竹内豊）
500,000 円

10. 木村　登（主任研究者）
放射線画像診断における撮像技術向上研究の支援（富士フィルムRIファーマ株式会社）
500,000 円

11. 松下茂人（主任研究者）
皮膚腫瘍科・皮膚科に対する研究助成（小野薬品工業株式会社）
500,000 円

12. 松下茂人（主任研究者）
皮膚腫瘍科・皮膚科に対する研究助成（科研製薬株式会社福岡支店）
100,000 円

13. 佐保尚三（主任研究者）
安全な麻酔管理の研究のため（エドワーズライフサイエンス株式会社）
150,000 円

【Ⅸ】治験実績

以下に平成 28 年度の治験の実績を示す。

2016.4～2017.3

	第Ⅱ相試験	第Ⅲ相試験	製造販売後臨床試験	受託研究
件数	1 （新規:0）	9 （新規:3）	1 （新規:0）	76 （新規:25）
実施症例数 （人数）	新規:1 継続:0	新規:5 継続:24	新規: 0 継続: 1	
請求金額	治　　験:21,692,423 円 受託研究: 6,198,037 円			

【第Ⅱ相試験】

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
大塚眞紀	ブリストル・マイヤーズ株式会社	未治療の多発性骨髄腫患者を対象とした、Elotuzumab / レナリドミド/低用量デキサメタゾン併用療法とレナリドミド/低用量デキサメタゾン併用療法のランダム化オープンラベル国内第 2 相臨床試験	新たに診断された未治療多発性骨髄腫の被験者において、Elotuzumab+レナリドミド/低用量デキサメタゾン（ELd 療法）とレナリドミド/低用量デキサメタゾン（Ld 療法）を比較して、ELd 療法の奏効割合を評価する。

【第Ⅲ相試験】

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
松岡秀樹	第一三共株式会社	CS-747S 第Ⅲ相試験 虚血性脳血管障害患者を対象としたクロピドグレル硫酸塩に対する非劣性検証試験	虚血性脳血管障害患者を対象に、CS-747S の脳心血管系イベント抑制効果についてクロピドグレル硫酸塩との非劣性を検証する。また、長期投与時の安全性を検討する。副次的に、脳心血管系イベント抑制効果または安全性に影響を及ぼす背景因子を検討する。
簗詰伸太郎	ゼリア新薬工業株式会社	Randomized,Double-blind,Placebo-controlled Trial of Z-100 plus Radiation Therapy in Patients with Locally Advanced Cervical Cancer-A Phase III trial	FIGO Stage ⅢB 期の子宮頸癌患者を対象として、全生存期間を用いて、Z-100 の 0.2μg/mlのプラセボに対する優越性を検証する。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
中島　均	オーバスネイチメディカル株式会社	オーバスネイチComboステントの無作為化多施設共同試験による日米共同試験（HARMONEE試験）：虚血性心疾患患者を対象とした経皮的冠動脈血行再建での新規DESプラットフォームの評価	最先端技術の第 2 世代 EES と比較して、以下の点で非劣性であることを実証する。 1. 1年目の標的血管不全（TVF）：心臓死・標的血管の心筋梗塞・虚血に基づく経皮的方法又は外科的方法による標的血管再血行再建術（TVR） 2. 1年目のFFRによってみる主要標的血管の虚血回避率（FFR 値：0.80 以上）・BMS（Historical コントロール群）と比較して 1 年目 TVF において優越性を実証する。
薗田正浩	アストラゼネカ株式会社	2型糖尿病患者を対象として、心血管死、心筋梗塞及び脳卒中に対するチカグレロル1日2回投与の予防効果をプラセボと比較する国際共同無作為化二重盲検プラセボ対照並行群間比較試験（THEMIS - effect of Ticagrelor on Health outcomes in diabEtes Mellitus patients Intervention Study）	心血管性（CV）イベントの発生リスクが高く、心筋梗塞（MI）又は脳卒中の既往ないし 2 型糖尿病（T2DM）患者を対象として、主要 CV イベント（心血管死、MI 及び脳卒中からなる複合イベント）に対するチカグレロル 1 日 2 回 bd の長期投与の予防効果をプラセボと比較する。
松岡秀樹	日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社	ダビガトランエテキシラートによる治療中で、止血困難な出血を発現している患者又は緊急手術若しくは緊急処置を要する患者を対象に、idarucizumab (BI655075) 5.0gを静脈内投与し、ダビガトランの抗凝固作用に対する中和効果を検討する第Ⅲ相症例集積試験（RE-VERSE AD試験：A study of the RE-VERSal Effects of Idarucizumab on Active Dabigatran）	ダビガトランエテキシラートによる治療中に、止血困難な出血又は生命を脅かす出血を発現しており緊急処置を要する患者、及び緊急の手術又はその他の侵襲的処置を要する患者を対象に、ダビガトランの抗凝固作用に対する中和効果を明らかにする。 副次的な目的は、出血の軽減又は止血、臨床的転帰、安全性及び idarucizumab 投与時のダビガトランの薬物動態を評価する。
中島　均	小野薬品工業株式会社	ONO-1162 第Ⅲ相試験 慢性心不全に対するプラセボを対照とした多施設共同二重盲検無作為化並行群間比較試験	左室収縮性が低下した慢性心不全患者に対する ONO-1162 の有効性について、プラセボを対照とした多施設共同二重盲検無作為化比較試験により検討する。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
松岡秀樹	日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社	塞栓源不明の脳塞栓症を発症した患者を対象に、経口直接トロンビン阻害剤であるダビガトランエテキシラート（110mg又は150mg、経口1日2回）の脳卒中の再発予防における有効性及び安全性をアセチルサリチル酸（100mg経口1日1回）と比較するランダム化、二重盲検試験（RE-SPECT ESUS）	塞栓源不明の脳塞栓症（ESUS）を発症した患者を対象として、脳卒中の再発予防に関して、ダビガトランエテキシラート（DE）（110mg1日2回又は150mg1日2回、年齢及び腎機能に応じて用量を決定する）の有効性がアセチルサリチル酸（アスピリン（ASA））（100mg1日1回）と比較して優れているか否かを検証する。また、本対象患者におけるダビガトランエテキシラートの安全性を検討する。
中島　均	第一三共株式会社	DU-176第Ⅲ相臨床試験（非弁膜症性心房細動） ―既存の経口抗凝固薬の投与が困難な80歳以上の非弁膜症性心房細動患者を対象とした多施設共同無作為化プラセボ対照二重盲検比較試験―	既存の経口抗凝固薬（ワルファリン、ダビガトラン、リバーロキサバン、アピキサバン、またはエドキサバン）の承認用法・用量の投与が困難な 80 歳以上の NVAF 患者を対象に、DU-176b 15mg を投与したときの有効性及び安全性を検討する。脳卒中及び全身性塞栓症の複合エンドポイントを有効性の主要評価項目として、プラセボ群に対する優越性を検証する。
松下　茂人	MSD 株式会社	切除不能又は転移性悪性黒色腫患者を対象としたMK-3475とINCB024360又はプラセボ併用療法の無作為化二重盲検プラセボ対象第Ⅲ相試験（KEYNOTE-252/ECHO-301）	組織学的に診断された切除不能又は転移性の悪性黒色腫を有する 18 歳以上の無作為割付されたすべての男女の患者を対象として、 1) 目的：MK-3475+INCB024360 併用投与と MK-3475+プラセボ（両投与群）の独立中央判定期間によりRECIST1.1に基づき評価されたム増悪生存期間（PFS）を比較する。 仮説（H1）：MK-3475+ INCB024360 併用投与は、MK-3475+プラセボと比較し、独立中央判定期間により RECIST1.1 に基づき評価された PFS を延長する。 2) 目的：両投与群の全生存期間（OS）を比較する。 仮説（H2）：MK-3475+ INCB024360 併用投与は、MK-3475+プラセボと比較し、OS を延長する。 PFS 又は OS のいずれかで、MK-3475+ INCB024360 が MK-3475+プラセボよりも優れていた場合に、本試験は試験目的を達成したとみなす。

【製造販売後臨床試験】

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
大塚眞紀	セルジーン株式会社	未治療の多発性骨髄腫の日本人患者を対象としたレナリドミドの低用量デキサメタゾン併用による第Ⅱ相多施設共同単群オープンラベル試験	65 歳以上又は造血幹細胞移植の適応とならない未治療の日本人多発性骨髄腫患者を対象に 1 サイクルを 28 日間とし、レナリドミドをデキサメタゾンとの併用で投与し有効性、安全性を検証する。投与は、病勢進行又は何らかの理由で中止するまで継続する。

【市販後調査等】

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
中島　均	グラクソ・スミスクライン㈱	ヴォリブリス®錠 2.5mg使用成績調査	本剤の承認条件に基づき、一定数の症例に係るデータが集積されるまでの間、全投与症例を対象として本剤の使用実態下での長期的な安全性および臨床経過について調査を行い、未知の副作用医薬品の使用実態下における副作用の発現状況、安全性に影響をおよぼす要因、有効性に影響をおよぼす要因、患者の予後、長期使用時の有効性および安全性を把握することを目的とする。重点調査項目として、貧血、体液貯留、心不全、肝障害、出血の発現状況、肝障害を有する患者における有効性および安全性を検討する。
大塚眞紀	セルジーン㈱	レブラミド®カプセル 5mg, 2.5mg 特定使用成績調査「未治療の多発性骨髄腫に対する 有効性・安全性調査」	本剤を投与された未治療の多発性骨髄腫患者を対象とし、使用実態化における二次発がん及び白内障の発現状況を調査することを目的とする。
郡山暢之	ｱｽﾄﾗｾﾞﾈｶ㈱	エキセナチド(バイエッタ®皮下注) 長期使用に関する特定使用成績調査	目的：日本人2型糖尿病患者に対するエキセナチドの使用実態下における長期使用時の安全性および有効性を確認する 内容：エキセナチド(バイエッタ®皮下注)長期使用に関する特定使用成績調査実施計画書に従って調査を実施する。
花田修一	ノバルティスファーマ㈱	レボレード®錠使用成績調査	本剤の承認条件に基づき、一定数の症例に係るデータが集積されるまでの間、全投与症例を対象として本剤の使用実態下での長期的な安全性ならびに有効性に関する情報を収集し、それらに影響を与えると考えられる要因を把握することを目的とする。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
松下茂人	小野薬品工業㈱	ヤーボイ点滴静注液 50 ㎎ 特定使用成績調査 「根治切除不能な悪性黒色腫に対する全例調査」	ヤーボイ点滴静注液 50mg（以下、本剤）の承認条件に基づき、本剤の使用実態下での 12 ヶ月の観察における以下の事項を把握することを主な目的とします。 ・副作用（有害事象）の発現状況 ・全生存期間（OS） ・安全性、有効性に影響を与えると考えられる要因 ＜重点調査項目＞ RMP(医薬品リスク管理計画書)に記載された重要な特定されたリスク
中島　均	田辺三菱製薬㈱	ノバスタン HI 注 10 ㎎/2mL 使用成績調査 ヘパリン起因性血小板減少症（HIT）Ⅱ型（発症リスクのある場合を含む）における経皮的冠インターベンション（PCI）施行時の血液凝固防止	本調査は承認条件に基づき実施し、以下の事項を把握することを目的とする。 1)本剤の使用実態下における副作用の発生状況の把握 2)安全性又は有効性等に影響を与えると考える要因 3)重点調査事項 《安全性》重篤な出血関係の副作用発現状況の把握 肝障害を有する患者における出血関係の副作用発現状況の把握 《有効性》経皮的冠インターベンション（以下PCI）施行の結果 ①イベント（血栓・塞栓症）フリーでのPCI終了 ②投与開始後初回測定時のACT（250秒以上）の達成 ③PCI施行翌日までの新たな血栓塞栓発症の有無 ④肝障害を有する患者における上記①～③
花田修一	協和発酵キリン㈱	ロミプレート皮下注 250μg 調製用　特定使用成績調査「長期使用に関する調査」	本剤の使用実態下における　1)未知の副作用の検出　2)副作用発生状況の把握　3)安全性及び有効性に影響を及ぼすと考えられる要因の把握　4)重点調査事項　等を検討し長期使用における安全性、有効性について確認する
森山由紀則	日本ライフライン㈱	生体弁マイトロフローの有用性に関する 探索的検討	心機能の回復に関して、被験器具の有効性および術中操作性の評価を行う。
花田修一	ノバルティスファーマ㈱	ジャカビ®錠　5mg　特定使用成績調査	真性多血症（既存治療が効果不十分又は不適当な場合に限る）患者を対象に、ジャカビ錠を使用実態下で長期経口投与したときの安全性及び有効性を検討する。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
花田修一	協和発酵キリン㈱	ポテリジオ点滴静注 20mg 特定使用成績調査 「全例調査」	本剤の使用実態下での (1)未知の副作用の検出 (2)副作用発生状況の把握 (3)安全性および有効性に影響を及ぼすと考えられる要因の把握 (4)重点調査事項　等を検討し、安全性および有効性を確認することを目的とする。
藤田　浩	ノバルティスファーマ㈱	アフィニトール錠　特定使用成績調査「膵神経内分泌腫瘍に対する特定使用成績調査」	膵神経内分泌腫瘍に対する本剤の長期使用例における製造販売後の使用実態下での本剤の使用患者の背景情報を把握するとともに、本剤の安全性及び有効性の確認、並びに問題点等を迅速に把握し、医療関係者へ評価結果等を遅滞なく情報提供することを目的とする。なお、本特定使用成績調査において得られた調査結果は、厚生労働省へ提出する再審査申請のための資料とする。
大塚眞紀	協和発酵キリン㈱	ロミプレート皮下注 250μg 調製用 特定使用成績調査「長期使用に関する調査」	本剤の使用実態下における　1)未知の副作用の検出　2)副作用発生状況の把握　3)安全性及び有効性に影響を及ぼすと考えられる要因の把握　4)重点調査事項　等を検討し長期使用における安全性、有効性について確認する
郡山暢之	ノバルティスファーマ㈱	エクア錠 50mg 特定使用成績調査 「糖尿病合併症と患者背景・治療経過との関連性の評価」	ビルダグリプチン（エクア錠 50mg）の使用実態下において以下の目的で実施し、本剤の安全性および有効性について評価・検討し厚生労働省へ提出する再審査申請のための資料とする。 ・エクア錠長期使用時（2 年間）の安全性の確認 ・エクア錠長期使用時（2 年間）の糖尿病合併症の発症及び増悪の頻度と治療経過（HbA1c 推移、HbA1c 変化量）との関係の検討 ・エクア錠長期使用時（2 年間）の有効性に確認
藤田　浩	バイエル薬品㈱	スチバーガ錠 40mg 使用成績調査（CRC）	本調査は、使用実態下における安全性及び有効性を把握するため、以下の事項を確認するために実施します。 ① 主に重点調査項目と定めた有害事象及びそのリスク因子の探索 ② 安全性、有効性等に影響を与えると考えられる要因 ③ 未知の副作用及び使用実態下における副作用発生状況
花田修一	武田薬品工業㈱	アドセトリス点滴静注特定使用成績調査 「血液内科における再発又は難治性の CD30 陽性のホジキンリンパ腫又は未分化大細胞リンパ腫」	日常診療の使用実態下での再発又は難治性の CD30 陽性のホジキンリンパ腫又は未分化大細胞リンパ腫に対する本財の安全性を検証する。また、参考までに有効性に関する情報も収集する。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
松岡秀樹	ﾌﾞﾘｽﾄﾙ･ﾏｲﾔｰｽﾞｽｸｲﾌﾞ㈱	エリキュース錠 2.5mg･5mg 特定使用成績調査（長期使用）	本剤が投与された症例の臨床経過を調査し、未知の副作用、医薬品の使用実態下における副作用の発生状況の把握、安全性及び有効性等に影響を与えると考えられる要因を調査することを目的とする。なお、重点調査項目として身体各部位の出血を設定し、出血の発現状況及び出血に影響を与えると考えられる要因（好発する背景因子、好発出血部位、好発時期、併用薬）を調査検討する。
中島　均	ﾌﾞﾘｽﾄﾙ･ﾏｲﾔｰｽﾞｽｸｲﾌﾞ㈱	エリキュース錠 2.5mg･5mg 特定使用成績調査（長期使用）	本剤が投与された症例の臨床経過を調査し、未知の副作用、医薬品の使用実態下における副作用の発生状況の把握、安全性及び有効性等に影響を与えると考えられる要因を調査することを目的とする。なお、重点調査項目として身体各部位の出血を設定し、出血の発現状況及び出血に影響を与えると考えられる要因（好発する背景因子、好発出血部位、好発時期、併用薬）を調査検討する。
魚住公治	ｸﾞﾗｸｿ･ｽﾐｽｸﾗｲﾝ㈱ (㈱EP ﾌｧｰﾏﾗｲﾝ)	マラロン®配合錠使用成績調査（治療）	選定した施設において、一定期間、マラリアの治療のためにマラロン®配合錠（以下、本剤）を使用した全症例を対象として本剤の使用実態下での安全性及び有効性について調査を行い、以下の事項を把握することを目的とする。 1) 未知の副作用　2) 本剤の使用実態下における副作用の発現状況 3) 安全性及び有効性に影響を及ぼす要因
郡山暢之	武田薬品工業㈱	ネシーナ錠　特定使用成績調査 「2 型糖尿病　血糖降下薬（インスリン製剤、速効型インスリン分泌促進薬）併用」	食事療法、運動療法に加えて、インスリン製剤、速効型インスリン分泌促進剤等の血糖降下薬を使用しても十分な効果が得られない2型糖尿用患者に対するネシーナ錠の長期投与時の安全性及び有効性を検討する。
伊集院駿	バイエル薬品㈱	アデムパス錠　使用成績調査	本剤の使用実態下における安全性及び有効性等の医薬品を有効かつ安全に使用するための情報の検出または確認を行う。
松崎　勉	バイエル薬品㈱	ネクサバール錠 200 ㎎使用成績調査 「根治切除不能な分化型甲状腺癌」	本調査は、ネクサバール錠の根治切除不能な分化型甲状腺癌患者に対する使用実態下における副作用発生状況及び有効性を把握するために実施する。
魚住公治	武田薬品工業㈱	アドセトリス点滴静注特定使用成績調査 「腫瘍内科における再発又は難治性の CD30 陽性のホジキンリンパ腫又は未分化大細胞リンパ腫」	日常診療の使用実態下での再発又は難治性の CD30 陽性のホジキンリンパ腫又は未分化大細胞リンパ腫に対する本財の安全性を検証する。また、参考までに有効性に関する情報も収集する。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
田中裕治	日本製薬㈱	川崎病急性期治療ガイドライン公表後の川崎病治療における献血グロベニンーIの使用実態調査	改訂版ガイドライン公表後の川崎病治療における本剤の使用実態について調査することを目的とする。
魚住公治	バイエル薬品㈱	ネクサバール錠 200 ㎎使用成績調査 「根治切除不能な分化型甲状腺癌」	本調査は、ネクサバール錠の根治切除不能な分化型甲状腺癌患者に対する使用実態下における副作用発生状況及び有効性を把握するために実施する。
松下茂人	小野薬品工業㈱	オプジーボ点滴静注　使用成績調査 「根治切除不能な悪性黒色腫」	オプジーボ（以下、本剤）の製造販売後における副作用（有害事象）、特に医薬品リスク管理計画書（以下 RMP）に重要な特定されたリスクとして記載された事象の発現状況を把握し、安全性及び有効性に影響を与えると考えられる要因について検討を行うことを目的とする。なお、本調査は承認条件「国内での治験症例が極めて限られていることから、製造販売後、一定数の症例に係るデータが集積されるまでの間は、全症例を対象に使用成績調査を実施することにより、本剤使用患者の背景情報を把握するとともに、本剤の安全性及び有効性に関するデータを早期に収集し、本剤の適正使用に必要な措置を講じること。」に基づいて実施する。
郡山暢之	ｱｽﾄﾗｾﾞﾈｶ㈱	フォシーガ錠 長期使用に関する特定使用成績調査	本調査は使用実態下における安全性及び有効性を把握するため、以下の事項を確認するために実施する。 ・主に重点調査項目と定めた副作用の発現状況及びそのリスク因子の検索 ・安全性、有効性等に影響を与えると考えられる要因 ・未知の副作用及び使用実態下における副作用発生状況
恒吉研吾	アステラス製薬㈱	イクスタンジカプセル 40mg 長期特定使用成績調査 〔プロトコル No.XTA001〕	特定使用成績調査 本剤長期使用時の安全性及び有効性について確認するとともに、以下の事項について検討する。 1. 未知の副作用 2. 使用実態下での副作用の発生状況 3. 安全性及び有効性に影響を与えると考えられる要因 《重点調査項目》痙攣発作
郡山暢之	田辺三菱製薬㈱	カナグル 100mg 錠　特定使用成績調査 「長期使用に関する調査」	カナグル錠 100mg の使用実態下における長期使用例での安全性および有効性の検討
菰方輝夫	日本製薬㈱	日本版敗血症診療ガイドライン公表後の重症感染症治療における献血グロベニンーIの使用実態調査	日本版敗血症診療ガイドライン公表後の重症感染症治療における本剤の使用実態について調査することを目的とする。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
藤田　浩	アステラス製薬㈱	アコファイド錠 100 ㎎ 使用成績調査 〔プロトコル No.ACO 001〕	使用成績調査 承認申請時には、安全性の懸念事項は特にありませんでしたが、製造販売後には承認申請時までに得られていない安全性及び有効性のデータを幅広い患者から収集する必要があると判断し、次の事項を把握することを目的に実施します。 (1)未知の副作用（特に重篤な副作用について） (2)使用実態下での副作用発生状況 (3)安全性、有効性に影響を与えると考えられる要因
郡山暢之	田辺三菱製薬㈱	カナグル 100mg 錠　特定使用成績調査 「長期使用に関する調査」	カナグル錠 100mg の使用実態下における長期使用例での安全性および有効性の検討
菰方輝夫	日本製薬㈱	日本版敗血症診療ガイドライン公表後の重症感染症治療における献血グロベニン－Iの使用実態調査	日本版敗血症診療ガイドライン公表後の重症感染症治療における本剤の使用実態について調査することを目的とする。
恒吉研吾	日本製薬㈱	日本版敗血症診療ガイドライン公表後の重症感染症治療における献血グロベニン－Iの使用実態調査	日本版敗血症診療ガイドライン公表後の重症感染症治療における本剤の使用実態について調査することを目的とする。
松岡秀樹	日本製薬㈱	日本版敗血症診療ガイドライン公表後の重症感染症治療における献血グロベニン－I の使用実態調査	日本版敗血症診療ガイドライン公表後の重症感染症治療における本剤の使用実態について調査することを目的とする。
菰方輝夫	一般社団法人 日本血液製剤機構	ノイアート静注用　特定使用成績調査 DIC　[汎発性血管内凝固症候群]	本調査は、汎発性血管内凝固症候群（DIC）にノイアート静注用 500 単位/1500 単位を使用した患者を対象に、重症度（SIRS スコア、DIC スコア、SOFA スコアなど）を把握した上で、使用実態下における本剤の有効性及び安全性を把握することを目的とします。
松下茂人	中外製薬㈱	ゼルボラフ錠 240mg 特定使用成績調査	承認条件に基づき、本剤の使用実態下での長期（24 カ月）の観察における以下の事項を把握することを主な目的とします。 ・副作用の発現率 ・未知の副作用 ・全生存期間（OS） ・安全性、有効性に影響を与えると考えられる要因
魚住公治	中外製薬㈱	ゼルボラフ錠 240mg 特定使用成績調査	承認条件に基づき、本剤の使用実態下での長期（24 カ月）の観察における以下の事項を把握することを主な目的とします。 ・副作用の発現率 ・未知の副作用 ・全生存期間（OS） ・安全性、有効性に影響を与えると考えられる要因

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
松下茂人	日本製薬㈱	献血グロベニン-I静注用使用成績調査（再審査用）「スティーブンス・ジョンソン症候群及び中毒性表皮壊死症」	スティーブンス・ジョンソン症候群及び中毒性表皮壊死症に対し本剤が投与された患者における使用実態下での安全性並びに有用性を確認する。
花田修一	ノバルティスファーマ㈱	ジャカビ錠 5 ㎎　特定使用成績調査（骨髄線維症）	骨髄線維症患者を対象にジャカビ錠 5 ㎎を使用実態化で長期投与したときの安全性及び有効性を確認する
中島　均	第一三共㈱	リクシアナ錠特定使用成績調査	静脈血栓塞栓症の治療及び再発抑制を目的として、リクシアナ錠を新規に使用した患者における使用実態下での安全性及び有効性等に関する情報の検出又は確認を行うことを目的とする。
薗田正浩	第一三共㈱	リクシアナ錠特定使用成績調査	静脈血栓塞栓症の治療及び再発抑制を目的として、リクシアナ錠を新規に使用した患者における使用実態下での安全性及び有効性等に関する情報の検出又は確認を行うことを目的とする。
花田修一	シャイアー・ジャパン㈱	アグリリンカプセル 0.5mg 使用成績調査	本態性血小板血症（ET）と診断された患者を対象として、市販後のアグリリン（アナグレリド塩酸塩）の安全性と有効性を評価するためのデータを収集する。 以下の項目に関するデータを収集する: ・使用実態下における安全性　・使用実態下における有効性
魚住公治	エーザイ㈱	レンビマ®カプセル 4mg・10mg　特定使用成績調査－根治切除不能な甲状腺癌患者における安全性及び有効性に関する調査（全例調査）－	根治切除不能な甲状腺癌患者に対するレンビマカプセル 4mg、同カプセル 10mg の使用実態下における安全性及び有効性を把握することを目的とする。中央登録方式で、1 症例あたりの観察期間は 12 ヵ月間とし、分冊型調査票を使用する。
花田修一	セルジーン㈱	ポマリスト®カプセル 特定使用成績調査	使用実態下におけるポマリスト®カプセルを投与された全ての患者を対象に安全性及び有効性を把握することを目的とする。
中島　均	第一三共㈱	エフィエント錠　特定使用成績調査 ―虚血性心疾患患者を対象とした長期使用に関する調査―	エフィエント®　錠（以下「本剤」）に関する使用実態下での情報を得るとともに、日常診療下における本剤の長期使用での安全性（未知の副作用の検出、副作用の発生状況）及び有効性に関する問題点を把握することを目的とする。
薗田正浩	第一三共㈱	エフィエント錠　特定使用成績調査 ―虚血性心疾患患者を対象とした長期使用に関する調査―	エフィエント®　錠（以下「本剤」）に関する使用実態下での情報を得るとともに、日常診療下における本剤の長期使用での安全性（未知の副作用の検出、副作用の発生状況）及び有効性に関する問題点を把握することを目的とする。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
薗田正浩	第一三共㈱	リクシアナ錠特定使用成績調査	虚血性脳卒中及び全身性塞栓症の発症抑制を目的として、リクシアナ錠（以下「本剤」）を新規に使用した非弁膜症性心房細動患者における使用実態下（2 年間）での安全性及び有効性等に関する情報の検出又は確認を行うことを目的とする。
松岡秀樹	第一三共㈱	リクシアナ錠特定使用成績調査	虚血性脳卒中及び全身性塞栓症の発症抑制を目的として、リクシアナ錠（以下「本剤」）を新規に使用した非弁膜症性心房細動患者における使用実態下（2 年間）での安全性及び有効性等に関する情報の検出又は確認を行うことを目的とする。
藤田　浩	田辺三菱製薬㈱	レミケード点滴静注用 100 特定使用成績調査「腸管型、神経型、血管型ベーチェット病の長期使用に関する調査」	腸管型、神経型及び血管型ベーチェット病の治療に対し、使用実態下における長期使用時の安全性及び湯構成を確認する。
塗木徳人	アクテリオン ファーマシューティカルズ ジャパン㈱	ｵﾌﾟｽﾐｯﾄ錠 10mg 特定使用成績調査(長期使用)	本剤の長期使用における重要な特定されたリスク、重要な潜在的リスク、重要な不足情報について、収集された情報を評価し、検討を行うとともに安全性及び有効性に影響を与えると考えられる要因を評価する。 本剤を使用した肺動脈性肺高血圧症患者を対象とし、観察期間は、1 症例当たり標準 1 年間、最長 3 年間とする。なお、契約締結日より前に本剤を投与した患者についても本調査の対象とする。
魚住公治	大鵬薬品工業㈱	ヨンデリス点滴静注用 0.25 mg/1mg 特定使用成績調査（全例調査）	本調査は、ヨンデリス点滴静注用 0.25 mg / 1 mg（以下、本剤と記す）による肝機能障害及び骨髄抑制の発現に関するリスク因子を検討することを主な目的とし、あわせて使用実態下における本剤の安全性等を検討するための情報収集を本剤が投与された全症例を対象に行う。
森山由紀則	エア・ウォーター㈱	アイノフロー吸入用 800ppm 使用成績調査	調査を行う事項として、患者背景、本剤の使用状況、前治療薬・併用薬剤・併用療法、有効性・安全性等に関する項目とする。、なお、本調査は全例調査であることから、2015 年 8 月 24 日(追加効能承認日)から本調査の契約締結日前に本剤を使用した症例がいる場合、当該症例についても調査票への記載対象とする。
塗木徳人	東レ株式会社	SATAKE・HotBalloon カテーテル使用成績調査 <薬剤抵抗性を有する再発性症候性の発作性心房細動>	薬剤抵抗性を有する再発性症候性の発作性心房細動患者に対する本品によるアブレーション術の安全性および有効性を検討する。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
花田修一	シャイアー・ジャパン㈱	ビプリブ®点滴静注用 400 単位　使用成績調査	ゴーシェ病に対し初めて本剤による治療を開始するか、他の治療薬から切替えて本剤の治療をゴーシェ病に対し初めて本剤による治療を開始するか、他の治療薬から切替えて本剤の治療を開始する患者の両方を含むゴーシェ病患者に対する本剤の製造販売後における安全性及び有効性に関するデータを収集・解析することを目的とする。以下の検討項目について、データを収集する: ・Infusion-related reactions [基本語（PT）: Infusion related reaction]の発生率 ・治療歴のない日本人患者に対する安全性 ・2 型及び 3 型ゴーシェ病の患者に対する安全性 ・日本人患者における長期投与時の有効性 ・日本人小児患者における安全性 ・日本人高齢者における安全性
魚住公治	小野薬品工業㈱	オプジーボ点滴静注 20 ㎎・100 ㎎特定使用成績調査「切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌に対する全例調査」	オプジーボ点滴静注 20mg・100 ㎎（以下、本剤）の承認条件に基づき、本剤の使用実態下での 12 か月の観察における以下の事項を把握することを主な目的とします。 ・副作用（有害事象）の発現状況 ・全生存期間（OS） ・安全性、有効性に影響を与えると考えられる要因 ＜重点調査項目＞ RMP(医薬品リスク管理計画書)に記載された重要な特定されたリスク
郡山暢之	MSD㈱	マリゼブ®錠 12.5mg、25mg 特定使用成績調査（長期使用に関する調査）	日常診療下において、マリゼブ®錠（一般名　オマリグリプチン;以下、被験薬）の長期使用例での安全性、被験薬が中等度腎機能障害患者・重度腎機能障害患者（血液透析又は腹膜透析を要する末期腎不全患者を含む）に投与された際の安全性、有効性の確認及び新たな問題点の検出並びに医薬品リスク管理計画書で特定した被験薬の安全性を確認することを目的とする。
魚住公治	小野薬品工業㈱	オプジーボ特定使用成績調査〔根治切除不能又は転移性の腎細胞癌〕	オプジーボ点滴静注 20mg、100 ㎎（以下、本剤）の製造販売後における副作用（有害事象）、特に医薬品リスク管理計画書（RPM）に重要な特定されたリスクとして記載している事象の発現状況を把握し、安全性及び有効性に影響を与えると考えられる要因について検討し、また、重要な特定されたリスクのうち、特に間質性肺疾患に関する詳細な検討を行うことを目的とする。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
魚住公治	ノバルティスファーマ㈱	ジャカビ®錠　5mg　特定使用成績調査 （真性多血症）	真性多血症（既存治療が効果不十分又は不適当な場合に限る）患者を対象に、ジャカビ錠を使用実態下で長期経口投与したときの安全性及び有効性を検討する。
花田修一	ノバルティスファーマ㈱	ファリーダック®カプセル 10・15mg 特定使用成績調査	再発又は難治性の多発性骨髄腫患者を対象に、本剤を使用実態下で投与した際の、　安全性及び有効性を検討することを目的とする。
安﨑和博	大塚製薬㈱	サムスカ錠 15mg　副作用・感染症調査	サムスカ錠 15mg での副作用・感染症報告の関連資料収集
薗田正浩	ﾌﾞﾘｽﾄﾙ・ﾏｲﾔｰｽﾞｽｸｲﾌﾞ㈱	エリキュース錠 2.5mg・5mg 特定使用成績調査（VTE・長期使用）	・日本人の静脈血栓塞栓症（VTE）患者を対象とし、本剤の使用実態下における安全性プロファイ ルを把握する。 ・出血に影響を与えると考えられる危険因子を把握する。 副次目的 ・本剤の使用実態下における有効性プロファイルを把握する。
築詰伸太郎	中外製薬㈱	アバスチン点滴静注用　特定使用成績調査 「進行又は再発の子宮頸癌」	本剤の国内使用実態下における骨盤部における瘻孔の副作用発現状況を確認するため
田中裕治	ｱｸﾃﾘｵﾝﾌｧｰﾏｼｭｰﾃｨｶﾙｽﾞｼﾞｬﾊﾟﾝ㈱	ｵﾌﾟｽﾐｯﾄ錠 10mg 特定使用成績調査(長期使用)	本剤の長期使用における重要な特定されたリスク、重要な潜在的リスク、重要な不足情報について、収集された情報を評価し、検討を行うとともに安全性及び有効性に影響を与えると考えられる要因を評価する。本剤を使用した肺動脈性肺高血圧症患者を対象とし、観察期間は、1 症例当たり標準 1 年間、最長 3 年間とする。なお、契約締結日より前に本剤を投与した患者についても本調査の対象とする。
松下茂人	大鵬薬品工業㈱	ヨンデリス点滴静注用 0.25 mg/1mg 特定使用成績調査（全例調査）	本調査は、ヨンデリス点滴静注用 0.25 mg / 1 mg（以下、本剤と記す）による肝機能障害及び骨髄抑制の発現に関するリスク因子を検討することを主な目的とし、あわせて使用実態下における本剤の安全性等を検討するための情報収集を本剤が投与された全症例を対象に行う。
恒吉研吾	小野薬品工業㈱	オプジーボ特定使用成績調査 〔根治切除不能又は転移性の腎細胞癌」	オプジーボ点滴静注 20mg、100 ㎎（以下、本剤）の製造販売後における副作用（有害事象）、特に医薬品リスク管理計画書（RPM）に重要な特定されたリスクとして記載している事象の発現状況を把握し、安全性及び有効性に影響を与えると考えられる要因について検討し、また、重要な特定されたリスクのうち、特に間質性肺疾患に関する詳細な検討を行うことを目的とする。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
花田修一	小野薬品工業㈱	オプジーボ特定使用成績調査〔再発又は難治性の古典的ホジキンリンパ腫〕	オプジーボ点滴静注 20mg、100 ㎎（以下、本剤）の製造販売後における副作用（有害事象）、特に医薬品リスク管理計画書（RPM）に重要な特定されたリスクとして記載している事象の発現状況を把握し、安全性及び有効性に影響を与えると考えられる要因について検討し、また、重要な特定されたリスクのうち、特に間質性肺疾患に関する詳細な検討を行うことを目的とする。
森山由紀則	日本ライフライン㈱	被覆人工血管「J-Graft SHIELD NEO」の有用性に関する調査	J-Graft SHIELD NEO における、既往歴、術中の出血・止血時間、輸血の有無、体外循環時間を調査し、総合的な製品評価をする。
郡山暢之	日本イーライリリー㈱	デュラグルチド（トルリシティ皮下注 0.75 mg アテオス）特定使用成績調査	調査目的：日常診療下における国内2 型糖尿病患者に対し、デュラグルチドを長期投与した際の低血糖、急性膵炎及び心血管系事象（MACE: Major Adverse Cardiovascular Events）を含む安全性プロファイルを検討する。 調査方法：デュラグルチド(トルリシティ皮下注.075mg アテオス)特定使用成績調査　実施計画書に従って調査を実施する
松下茂人	ノバルティスファーマ㈱	タフィンラーカプセル 50 ㎎、75 ㎎/メキニスト錠 0.5 ㎎、2 ㎎ 特定使用成績調査「BRAF 遺伝子変異を有する根治切除不能な悪性黒色腫」	BRAF 遺伝子変異を有する根治切除不能な悪性黒色腫患者を対象にタフィンラー及び（又は） メキニストを使用実態下で投与したときの安全性及び有効性を検討する。
花田修一	ブリストル・マイヤーズスクイブ㈱	エムプリシティ点滴静注 300mg・400mg 特定使用成績調査	エムプリシティ®点滴静注用 300 mg、エムプリシティ®点滴静注用 400 mg（以下、本剤）の使用実態下における以下の事項を把握することを主な目的とする。 副作用（有害事象）の発現状況、奏効率、安全性、有効性に影響を与えると考えられる要因
大保崇彦	日医工㈱	カンデサルタン錠 8mg「日医工」 副作用・感染症症例調査「肝障害に対する副作用症例調査」	カンデサルタン錠 8mg「日医工」の副作用が疑われる症例についての詳細情報を入手することを目的とし、乙様式の副作用・感染症詳細調査票に詳細情報を転記する。
伊集院駿	バイエル薬品㈱	ベンテイビス使用成績調査（PAH）	本剤の使用実態化における安全性及び有効性等の医薬品を有効かつ安全に使用するための情報の検出または確認を行う。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
伊集院駿	日本新薬㈱	ウプトラビ錠 0.2mg・0.4mg 特定使用成績調査 「長期使用に関する調査」	肺動脈性肺高血圧症患者を対象に、本剤の使用実態下における長期投与時の安全性及び有効性を検討する。
花田修一	小野薬品工業㈱	カイプロリス点滴静注用 10 ㎎,40 ㎎ 使用成績調査 「再発又は難治性の多発性骨髄腫に対する全例調査」	本邦での使用実態下におけるカイプロリス点滴静注用 10 ㎎,40 ㎎の再発又は難治性の多発性骨髄腫に対する安全性及び有効性を評価することを目的とする。特に、以下の重点調査項目の発現状況について確認する。 ＜重点調査項目＞ 心障害（心不全、心筋梗塞、QT 延長、心膜炎、心嚢液貯留）、間質性肺疾患、肺高血圧症、高血圧・高血圧クリーゼ、腎障害、腫瘍崩壊症候群、Infusion reaction、出血、血液毒性、静脈血栓塞栓症、肝不全・肝機能障害、血栓性微小血管症、感染症、消化管穿孔、可逆性後白質脳症症候群及び脳症
魚住公治	小野薬品工業㈱	カイプロリス点滴静注用 10 ㎎,40 ㎎ 使用成績調査 「再発又は難治性の多発性骨髄腫に対する全例調査」	本邦での使用実態下におけるカイプロリス点滴静注用 10 ㎎、40 ㎎の再発又は難治性の多発性骨髄腫に対する安全性及び有効性を評価することを目的とする。特に、以下の重点調査項目の発現状況について確認する。 ＜重点調査項目＞ 心障害（心不全、心筋梗塞、QT 延長、心膜炎、心嚢液貯留）、間質性肺疾患、肺高血圧症、高血圧・高血圧クリーゼ、腎障害、腫瘍崩壊症候群、Infusion reaction、出血、血液毒性、静脈血栓塞栓症、肝不全・肝機能障害、血栓性微小血管症、感染症、消化管穿孔、可逆性後白質脳症症候群及び脳症
薗田正浩	バイオトロニックジャパン㈱	センタス ProMRI OTW QP S-85/49 に係る 臨床使用評価	目的：センタス ProMRI OTW QP S-85/49 の植込み手技及び退院時の情報並びに本品を使用した医師の評価の収集により、当該機器の実臨床での使用実態を考察し、次世代製品の開発の一助となる情報を収集すること。 内容：前向き／後ろ向き、他施設共同調査。被験機器の植込み手技に関する情報や本品の使用状況、及び植込み時、退院時の電気的特性に関する情報を収集すること。

責任医師	研究依頼者	研究課題名	研究目的および計画
豊川建二	日本メドトロニック㈱	VALIANT 胸部ステントグラフトシステムの使用成績調査	目的：製造販売承認をうけて、医薬品医療機器等法第 23 条の 2 の 9 第 1 項の規定に基づき実施する使用成績調査であり、実臨床使用実態下で、合併症を有する急性期 Stanford B 型大動脈解離のうち、内科的治療が奏功しない患者に対する本品の安全性及び有効性を確認することである。 内容：合併症を有する急性期 Stanford B 型大動脈解離のうち、内科的治療が奏功しない患者に対して本品が使用された症例を登録する。既定のフォローアップ（術時・術後 30 日、1 年、2 年、3 年、4 年、5 年フォローアップ）が実施された後、調査票を用いて情報を収集する。

第４回院内学会抄録集

第４回　鹿児島医療センター　院内学会

■会長　鹿児島医療センター院長　花田修一

■会期　平成 29 年 3 月 4 日(土)　8:30~12:00

■会場　大会議室

【プログラム】

8:30　オリエンテーション

　　開会のことば

8:35～9:30　Ⅰ群　座長：検体検査責任者 山下正治　　放射線副技師長 野田一也

1. 血小板凝集能に影響を及ぼす因子について調査　薬剤部　森田 真樹子
2. 大動脈弁狭窄症におけるストレインＴ波の有用性　臨床検査科　吉田 一葉
3. 201Tl 負荷心筋血流 SPECT 撮像時のアーチファクト対策の検討　放射線科　大浦 美樹
4. 効果的な生活習慣病予防教室実施へ向けての取り組み　栄養管理室　谷 若奈
5. 一般病棟における医療・看護必要度からみる手指衛生の比較　院内感染対策チーム 栗脇 千春
6. 当院のインスリン注に関するインシデントの特徴とその対策について　救急科　田中 秀樹

9:35～10:40　Ⅱ群　座長：小児科医長 田中裕治　　婦人科医長 築詰伸太郎

7. 当院で経験した免疫チェックポイント阻害剤による免疫関連有害事象
   ～ニボルマブ,イピリマブ投与後に ACTH 単独欠損症を発症した症例を中心に～　皮膚腫瘍科　山村 健太郎
8. 心不全合併のたこつぼ型心筋症の検討　研修医 窪 凛太郎
9. 当院での急性型・リンパ腫型の ATL 診療の現状について　血液内科 大渡 五月
10. インターロイキン-33 による血管内皮細胞でのインターロイキン-8 の発現および分泌　臨床研究部 梅橋 功征
11. 冠動脈ｽﾃﾝﾄ留置後の抗血小板薬 2 剤併用療法における血小板凝集能測定の意義の検討
    第 1 循環器内科 楠元 啓介
12. 大動脈弁口を介した僧帽弁形成術　心臓血管外科 寺園 和哉
13. FDG PET/CT 検査が診断に有用であった巨細胞性動脈炎の一例　脳血管内科　濱島 雅代

10:55~11:50　Ⅲ群　座長：事務部庶務係長 山本孝平　　副看護師長　岩切志織

14. 退院先別の入院期間比較　事務部　山並 公彦
15. 母親を亡くすことの予期悲嘆、ｸﾞﾘｰﾌｹｱにﾁｰﾑｱﾌﾟﾛｰﾁしたﾈｸﾛｰｾﾞ症候群中学生の 1 例　東 3 階　大塚 瑞紀
16. 脳卒中急性期病棟における FIM 導入の取り組み　東 5 階　井手 智子
17. 教育入院プログラムに導入した患者間の語りの場（ひだまり）を通して　糖尿病看護認定看護師　赤尾 綾子
18. A 病院における卒後 3 年目看護師の社会人基礎力
    ～社会人基礎力調査の結果から考察する～　看護師長研究会　神野 美子
19. 3 学年合同の看護研究および学習発表会における学びの分析　看護学校　石川 志保

11:50　閉会のことば　　会長　鹿児島医療センター院長　花田修一

I

座長　　検体検査責任者　　山下 正治
　　放射線副技師長　　野田 一也

演題1　血小板凝集能に影響を及ぼす因子についての調査
薬剤部
森田真樹子、山元光平、山口泰弘、林淳一郎

演題2　大動脈弁狭窄症におけるストレインT波の有用性
臨床検査科
吉田一葉、橋本剛志、時吉恵美、梅橋功征、橋本恵美、桑崎理絵、富園正朋、
髙永　恵、本山眞弥

演題3　201Tl 負荷心筋血流 SPECT 撮像時のアーチファクト対策の検討
放射線科
大浦美樹、羽田里美、野田一也、本村　登

演題4　効果的な生活習慣病予防教室実施へ向けての取り組み
栄養管理室
谷　若奈、加來正之、廣石さやか、淵脇美保子

演題5　一般病棟における医療・看護必要度から見る手指衛生の比較
感染対策チーム
栗脇千春、渡邊真裕子

演題6　当院のインスリン注に関するインシデントの特徴とその対策について
救急科[1)]、看護部[2)]
田中秀樹[1)]、大迫朋子[2)]、後藤隆彦[2)]、伊藤由加[2)]、村田淳子[2)]

演題
1

血小板凝集能に影響を及ぼす因子についての調査

薬剤部
森田真樹子、山元光平、山口泰弘、林淳一郎

【目的】
抗血小板療法では薬効に個人差が生じることがあり、抵抗性を示す症例が一定数存在するといわれている。今回は血小板凝集能（以下、凝集能）に影響を及ぼす因子について調査したので報告する。
【方法】
平成 27 年 9 月～平成 28 年 9 月の期間にアスピリン、クロピドグレルを服用し凝集能を測定した東 5 階入院患者 132 例を対象とし、アスピリン群 65 例（以下 A 群）、クロピドグレル群 24 例（以下 B 群）、併用群 43 例（以下 C 群）における凝集能結果と年齢、体重、AST、ALT、Ccr（計算値）、血小板数、併用薬プロトンポンプ阻害薬による凝集能への影響を調査した。
【結語】
抵抗性の割合は A 群で 31％（20/65 例）、B 群で 83%（20/24 例）、C 群のアスピリン抵抗例 19%（8/43 例）、クロピドグレル抵抗例 47%（20/43 例）であった。また、各群においていずれの因子も凝集能への有意差はなかった。
【考察】
今回は凝集能に影響を及ぼす因子を見出せなかったため、症例数を増やし他の因子に対しても調査を行いたい。

演題
2

大動脈弁狭窄症におけるストレインT波の有用性

臨床検査科
吉田一葉、橋本剛志、時吉恵美、梅橋功征、橋本恵美、桑崎理絵、富園正朋、髙永　恵、本山眞弥

【背景】
大動脈弁狭窄症(Aortic stenosis：AS)の心電図変化としては、R 波の増高やストレインＴ波などが挙げられる。しかし、AS の重症度と心電図変化を比較検討した本邦での報告は少ない。今回、AS の重症度とストレイン T 波の関連について検討したので報告する。
【方法・結果】
2013 年 1 月～2014 年 1 月までに当院で心臓超音波検査にて AS の重症度評価を行った 143 名を研究対象とした。
ストレインＴ波の有無で 2 群に分け、心臓超音波検査の一般計測値を比較すると、ストレイン T 波のある群で有意に大動脈弁口面積が小さく($p<0.001$)、拡張障害があり($p<0.001$)、左室肥大を認めた($p<0.001$)。また、ROC 曲線を用いたストレイン T 波の出現しうる大動脈弁口面積は 0.94cm2(AUC 0.77、感度 66.7%、特異度 78.5%)であった。大動脈弁人工弁置換術を施行した患者と未施行の患者の比較では、ストレイン T 波の出現率($p=0.008$)に有意差を認めた。
【結語】
本研究においてストレインＴ波を含む心電図変化は、AS の重症度評価に有用であり、心臓超音波検査に加えストレイン T 波の出現は診断・治療の一助になりうることが示唆された。

演題
3

201Tl 負荷心筋血流 SPECT 撮像時のアーチファクト対策の検討

放射線科
大浦美樹、羽田里美、野田一也、本村　登

【目的・背景】
　Tl 心筋シンチにおいて消化管にトレーサの集積がみられる症例がある。このアーチファクトが画質低下の一因になっているのではないかと考え、Tc 心筋シンチで検証されたアーチファクト軽減対策を Tl 心筋シンチでも応用できないか検討を行った。
【方法】
　1. 通常撮影後に腹臥位撮影を追加して撮影を行った。
　2. 炭酸水 150mL を撮影直前に服用し通常撮影を行った。
【結果】
　1. 腹臥位撮影では有意差はみられなかった。
　2. 炭酸水服用では有意差がみられた。
【結論】
　Tl 心筋シンチにおいて撮影前の炭酸水服用はアーチファクト軽減に有用であった。

演題
4

効果的な生活習慣病予防教室実施へ向けての取り組み

栄養管理室
谷　若奈、加來正之、廣石さやか、淵脇美保子

【目的】
　種々の疾患を抱えた複数患者を対象とする集団指導において効果的な食事指導を実施するため本調査を実施した。
【方法】
　対象者：特別食（「減塩 EC 食」「EC 食」）喫食中の入院患者 32 名・付添者 5 名
　期間：平成 28 年 6 月 6 日～7 月 11 日
　調査：指導開始時と終了時に 4 項目のアンケート記入【対象】
【結果】
　「一番困っていること」に関する質問では間食に関する項目、次いで食事の量と味噌汁の回数に関する項目が多い結果となった。食知識の有無を問う質問では塩分を含む食品の認知率は高いものの、実生活における具体的な減塩方法の知識は約半数の普及となり、高塩分食品の認知よりは低い結果となった。
【考察】
　今回の調査より、今後の指導においては各食品群別の摂取目安量を含めた全体的な食事の量や間食の摂り方についての内容を盛り込む必要があるとの結論に至った。また、減塩に関しては食塩を多く含む食品や料理の紹介はもとより、生活に根差したより実践的な減塩の方法に焦点を当て指導を行うべきであると考えられた。よって、今後は対象者のニーズに沿った指導内容へと改善を図るべきである。

演題
5

一般病棟における医療･看護必要度からみる手指衛生の比較

ICT
栗脇千春、渡邊真裕子

【目的】
当院では手指衛生に関する薬剤使用量（消毒量･石鹸量）を測定している。一般病棟で同一の薬剤使用量の目標値を設定し取り組んでいるが到達できていない。診療科により患者ケアや処置内容は異なるため、薬剤使用量に違いが生じている可能性がある。看護サービスの評価指標である医療･看護必要度と手指衛生に関する薬剤使用量の関連を分析することで、各病棟に応じた目標値設定につながるのではないかと考えた。
【方法】
平成 27 年度の一般病棟における医療･看護必要度と手指衛生に関する薬剤使用量を算出し比較した。
【結果】
消毒量に関しては、看護必要度に有意な正相関を認め、B 項目に対しては有意な逆相関を認めた。石鹸量に関しては、B 項目に対して有意な正相関を認めたが、看護必要度には相関を認めなかった。
【結論】
手指衛生に関する薬剤使用量と医療･看護必要度には、関連があることが示唆された。今後は医療･看護必要度の項目別に手指衛生に関する薬剤使用量との関連性を調査し、医療･看護必要度からみる目標値設定が可能であるかを検討していきたい。

演題
6

当院のインスリン注に関するインシデントの特徴とその対策について

救急科 [1)]、看護部 [2)]
田中秀樹[1)]、大迫朋子[2)]、後藤隆彦[2)]、伊藤由加[2)]、村田淳子[2)]

【背景】
近年本邦では高齢者糖尿病患者に対するインスリン治療のデバイスとインスリン製剤の多様化をみとめる。その一方で患者によって単位数がまちまちで、食前投与、食後投与、眠前投与など看護師が一番忙しい時間に注射を実施しなくてはいけないため、インシデントを起こすリスクが増加している。
【目的】
当院でのインスリン注に関するインシデントの現状を把握し、インシデントの原因を究明すること
【方法と結果】
2015 年 4 月から 2016 年 3 月までに発生した注射インシデント 330 件のうちインスリン注に関係したインシデント 40 件を対象とした。インシデント発生は 4 月と 5 月だけで全体の 35.1%を占めた。インシデント発生時間帯は 71%が日勤帯に発生していた。インスリン注インシデントの種類としては、うち忘れが 61.5%で最も多かった。インスリン注マニュアルに照らし合わせると、医師指示の段階、指示受けの段階、準備の段階でのインシデントは少なく、実施段階でのインシデントが 67%を占めた。一番多く認められたインスリン注の打ち忘れに関する因子を単変量及び重回帰解析したところ、食事量に応じて食後にインスリン注をしなければならないケース（β=0.40,p=0.036）と東 7 階病棟（糖尿病専門病棟）以外の病棟である（β=0.48,p=0.013）ことが、うち忘れの有力な因子と判明した。
【結論】
インスリンの打ち忘れは食後インスリン打ちと 7 階東病棟以外で有意に発生していることが統計学的に判明した。このことを参考に我々ワーキングチームはインスリン打ち忘れの予防に関する戦略を検討中である。

Ⅱ

座長　小児科医長　田中　裕治
　　婦人科医長　簗詰伸太郎

演題7　当院で経験した免疫チェックポイント阻害剤による免疫関連有害事象
～ﾆﾎﾞﾙﾏﾌﾞ、ｲﾋﾟﾘﾏﾌﾞ投与後に ACTH 単独欠損症を発症した症例を中心に～
皮膚科・皮膚腫瘍科[1)]、腫瘍内科[2)]、糖尿病内分泌科[3)]
山村健太郎[1)]、松下茂人[1)]、青木恵美[1)]、魚住公治[2)]、小木曽和磨[3)]、
郡山暢之[3)]

演題8　心不全合併のたこつぼ型心筋症の検討
第2循環器内科[1)]、研修医[2)]
窪凜太郎[1),2)]、田中秀樹[1)]、伊集院駿[1)]、馬場義政[1)]、石川裕輔[1)]、蔡　榮鴻[1)]、
山下恵里香[1)]、田上和幸[1)]、平峯聖久[1)]、東　健作[1)]、塗木徳人[1)]、薗田正浩[1)]

演題9　当院での急性型・リンパ腫型の ATL 診療の現状について
血液内科
大渡五月、藤野聡司、原口浩一、大塚眞紀、花田修一

演題 10　インターロイキン-33 による血管内皮細胞でのインターロイキン-8 の発現および分泌
臨床研究部[1)]、臨床検査科[2)]、糖尿病・内分泌科[3)]
梅橋功征[1,2)]、山本将義[1,),2)]、時任紀明[1、)3)]、竹ノ下葉子[1)]、城ヶ崎倫久[1)]

演題 11　冠動脈ステント留置後の抗血小板薬 2 剤併用療法における血小板凝集能測定の意義の検討
第 1 循環器内科
楠元啓介、片岡哲郎、上坊翔太、有村俊博、安﨑和博、久保忠弘、中島　均

演題 12　大動脈弁口を介した僧帽弁形成術
心臓血管外科
寺園和哉、豊川建二、上野隆幸、福元祥浩、山下正文、森山由紀則

演題 13　FDG PET/CT 検査が診断に有用であった巨細胞性動脈炎の一例
脳血管内科
濱島　雅代、金子浩之、平嶺敬人、大山　賢、宮下史生、脇田政之、松岡秀樹

演題
7

当院で経験した免疫チェックポイント阻害剤による免疫関連有害事象
～ニボルマブ、イピリムマブ投与後に ACTH 単独欠損症を発症した症例を中心に～

皮膚腫瘍科・皮膚科[1)]　腫瘍内科[2)]、糖尿病・内分泌科[3)]
山村健太郎[1)]、松下茂人[1)]、青木恵美[1)]、魚住公治[2)]、小木曽和磨[3)]、郡山暢之[3)]

当院では 2014 年 10 月から 2016 年 12 月の 2 年 2 カ月間で 14 例の免疫チェックポイント阻害剤を投与した症例を経験している。その内、免疫関連有害事象が見られたのは 5 例であり、1 例で ACTH 単独欠損症を発症した。

患者は 55 歳、女性。右眼球結膜の黒色斑が濃くなったのを自覚し、前医眼科を受診。病理で悪性黒色腫と診断された。その後、鼻側の結膜に再発、頚部リンパ転移を生じたため前皮膚科を紹介され受診した。CT で肺、肝臓、右副腎、皮下に転移所見を認めた。転居に伴い、当院を紹介された。ニボルマブによる加療を開始し、9 回投与したものの PD だったため、イピリムマブへと切り替え 4 回投与した。イピリムマブ投与を終了して 4 日目に倦怠感、食思不振を自覚するようになったため精査を行ったところ、ACTH とコルチゾールのみが著明に低下しており、ACTH 単独欠損症を発症したと考えた。免疫チェックポイント阻害剤使用による ACTH 単独欠損症の報告は比較的少なく、若干の考察を含めて報告する。

演題
8

心不全合併のたこつぼ型心筋症の検討

研修医[1)]、第2循環器内科[2)]
窪倫太郎[1),2)]、田中秀樹[2)]、伊集院駿[2)]、馬場義政[2)]、石川裕輔[2)]、蔡　榮鴻[2)]、山下恵里香[2)]、田上和幸[2)]、平峯聖久[2)]、東　健作[2)]、塗木徳人[2)]、薗田正浩[2)]

【目的】
たこつぼ型心筋症発症時に合併する心不全の背景とパターンを明らかにすること
【方法と結果】
2000 年 12 月から 2016 年 12 月までに当院に入院したたこつぼ型心筋症 80 人をコホートとした(男性:13 人、女性:67 人、年齢:73.0±13.6 歳)。各々の症例での発症月、時間帯、基礎疾患、当院搬入時のバイタル、胸部レントゲン、心エコー、血液生化学検査所見を抽出し、心不全の有無と心不全のクリニカルシナリオ(CS)を判定した。34 人(43%)に心不全の合併がみられた。心不全のパターンを CS で分類すると、CS1:22 人(67%)、CS3:8 人(10%)、CS2:3 人(4%)で CS1 が圧倒的に多かった。CS1 合併に寄与する因子に関して、
多変量ロジスティク解析(年齢、性別、BMI、発症時間帯、基礎疾患)したところ、深夜帯発症(OR:4.7,C.I:1.15-19.4,p=0.03)と基礎疾患として高血圧症の合併(OR:6.1,C.I:1.1-35.6,p=0.04)が有意な独立因子として抽出された。
【結論】
たこつぼ型心筋症発症時に心不全の合併は約 4 割にみとめられ、その約 7 割は CS1 のパターンを示す。その背景にたこつぼ型心筋症が深夜に発症する事と高血圧症の素因が有意に関係していることが示された。

演題
9

当院での急性型･リンパ腫型の ATL 診療の現状について

血液内科
大渡五月、藤野聡司、原口浩一、大塚眞紀、花田修一
1

【目的】
当院で診断、治療した急性型、リンパ腫型の成人 T 細胞白血病(ATL)の治療成績について検討した。
【結果】
対象は、2000 年 1 月から 2016 年 9 月までの当科で治療した、急性型とリンパ腫型の ATL。患者のほとんどは mLSG15 のプロトコールに従って、治療が開始されていた。非移植患者の 5 年生存率は約 10%程度である。当院の患者の生存の中央値は、ATL-PI 分類の低リスク群で 750 日、中間リスク群で、320 日、高リスク群で 130 日であった。一方、ATL 患者に対しての同種移植は現在まで、14 名に実施され、その中で7名が生存している。生存の中央値も 1250 日で明らかに、移植非実施の患者より、生存率が延長していた。2000 から 2016 年までの、診断時の年齢を調べてみると、近年、ATL 患者の年齢が高くなってきていた。この様なことから、強力な化学療法や造血幹細胞移植など積極的な治療が困難になってきている。
【結論】
ATL の化学療法のみの治療は、有効と言える状況ではない。ATL の年齢層が、近年、高くなってきており、強力な治療が困難になってきている。また、ATL に対する移植の有用性が示唆された。

演題
10

インターロイキン-33 による血管内皮細胞でのインターロイキン-8 の発現および分泌

臨床研究部[1)]、臨床検査科[2)]、糖尿病･内分泌科[3)]
梅橋功征[1,2)]、山本将義[1),2)]、時任紀明[1),3)]、竹ノ下葉子[1)]、城ヶ崎倫久[1)]

【背景】
インターロイキン(IL)-33 は IL-1 ファミリーに属する炎症サイトカインの一つである。近年、動脈硬化への関与が報告されつつあるが、作用メカニズムについては不明な点も多い。IL-8 は C-X-C ケモカインの一つであり、白血球遊走、内膜増殖、血管新生を惹起し、動脈硬化の進展に関与すると報告されている。IL-33 が血管内皮細胞に作用し IL-8 の発現を誘導するとの報告はあるが、詳細な経路については確認されていない。IL-33 による IL-8 の発現および分泌に及ぼす影響とそのメカニズムを解析した。
【方法】
ヒト臍帯静脈内皮細胞(HUVECs)を用いた。発現解析は RT-PCR 法、ELISA 法を使用した。細胞内シグナル解析には Western Blot 法、選択的シグナル阻害薬による抑制実験を行った。
【結果】
IL-33 は濃度、時間依存的に IL-8 の遺伝子およびタンパク質の発現を増加させた。細胞内シグナルとして JNK の関与が示唆され、選択的シグナル阻害剤 SP600125 が IL-8 の発現と分泌を抑制した。
【結語】
IL-33 は、血管内皮細胞において JNK を介して IL-8 の発現を誘導した。

演題
11

冠動脈ステント留置後の抗血小板薬 2 剤併用療法における血小板凝集能測測定の検討

第 1 循環器内科
楠元啓介、片岡哲郎、上坊翔太、有村俊博、安﨑和博、久保忠弘、中島　均

【背景】
冠動脈ステント留置後の抗血小板薬 2 剤併用療法は確立された治療法である。しかし、患者の特異性を考慮した治療は十分に行われていない。
【方法】
冠動脈形成術後の 1 年以内に冠動脈造影を行った、抗血小板薬 2 剤併用療法を行っている患者 106 例を対象とした。adenosine-diphosphoric acid(ADP), collagen を用いて血小板凝集能を測定し、抗血小板薬の効果判定を 9 class 分類(class 1-3:過度, class 4-6:適度, class 7-9:軽度)により評価し、患者背景との検討を行った。
【結果】
アスピリンとクロピドグレル併用が 86 例(81%)、アスピリンとプラスグレル併用が 18 例(17%)、アスピリンとチクロピジン併用が 2 例(2%)であった。チエノピリジン系の効果を示す ADP 負荷血小板凝集能は、43 例(40%)が軽度、56 例(53%)が適度、7 例(7%)が過度であった。アスピリンの効果を示す Collagen 負荷血小板凝集能は、12 例(11%)が軽度、54 例(51%)が適度、40 例(38%)が過度であった。75 歳以上の患者は Collagen 負荷血小板凝集能が 75 歳未満の患者に比べ有意に低値であった(p=0.005)。体重 70kg 未満の患者は体重 70kg 以上の患者に比べ Collagen 負荷血小板凝集能が低値の傾向にあった(p=0.074)。
【結論】
アスピリンは高齢や体重の小さい患者には過度になる傾向を認めたが、チエノピリジン系抗血小板薬についてはその傾向は認めなかった。また、クロピドグレルを多く使用している当施設では ADP 負荷血小板凝集能においてチエノピリジン系薬剤の効果が軽度の患者が多く存在した。
【考察】
冠動脈ステント留置後の抗血小板薬は患者特異性を考慮せずに定量投与が行われているが、血小板凝集能を測定することで適切な薬量調整及び変更ができる可能性がある

演題
12

大動脈弁口を介した僧帽弁形成術

心臓血管外科
寺園和哉、豊川建二、上野隆幸、福元祥浩、山下正文、森山由紀則

大動脈弁疾患と僧帽弁閉鎖不全症(MR)を合併する患者は多くみられるが、大動脈弁手術と僧帽弁形成の複合手術の場合、心停止時間や体外循環時間の延長や切開線の増加による出血の可能性など、患者への侵襲は高くなる。当科では弁逆流の程度に応じて大動脈弁輪ごしに Alfieri 法を使用した僧帽弁形成術を行っている。対象は大動脈弁手術を予定している患者でに中等度（重度は除く)の MR を合併し、且つ超音波検査による評価で逆流が弁尖の中央から生じている症例に行った。僧帽弁に対する手技は全症例において経大動脈弁輪的に僧帽弁前尖及び後尖の中心(A2/P2)を確認し、5-0 polypropylene 糸を用いて edge to edge に縫合した。計 6 例に施行したが、術後早期の経胸壁心臓超音波検査では全例 mild 以下に制御できており、良好な成績を得ているため報告する。

演題
13

FDG PET/CT 検査が診断に有用であった巨細胞性動脈炎の一例

脳血管内科
濱島雅代、金子浩之、平嶺敬人、大山　賢、宮下史生、脇田政之、松岡秀樹

65 歳、 女性。 201X 年 8 月下旬、頸部を屈曲した際に増強する後頸部痛が出現。9 月上旬から針で刺すような両側前頭部～側頭部痛を自覚し、症状が持続するため 21 日当院受診。初診時、頭痛以外に症状はなく、頭皮には怒脹、発赤、圧痛などの他覚的異常は認めず、神経学的所見にも異常はなかったが、血液検査では、白血球（11430/μl)、CRP（11.2mg/dl)、 赤沈（64mm/h）高値を呈した。第 21 入院日に FDG PET/CT 検査施行し、 両側側頭動脈、椎骨動脈、大腿動脈の異常集積から多血管炎が示唆され、また、環軸椎関節、両肩関節などの多発関節炎、腱着部炎、滑液包炎の合併も疑われた。浅側頭動脈生検を施行し、 病理学的所見から巨細胞性動脈炎と診断。生検終了後からステロイドによる加療を開始し、頭痛は速やかに消失した。 保険適用外であるものの、 巨細胞性動脈炎の診断における FDG PET/CT 検査の有用性について、最近の文献的考察を加えて考察する。

Ⅲ

座長　庶務係長　　山本孝平
　　副看護師長　　岩切志織

演題 14　退院先別の入院期間比較
事務部企画課
山並公彦

演題 15　母親を亡くすことの予期悲嘆、グリーフケアにチームアプローチシタネフローゼ症候群中学生の 1 例
東3階病棟[1)]、小児科[2)]、MSC[3)]
大塚瑞紀[1)]、田中裕治[2)]、徳永美菜子[2)]、水元玲子[3)]、森　鶴代[3)]、米森初枝[3)]

演題16　脳卒中急性期病棟における FIM 導入の取り組み
東5階病棟
井出智子、恒吉美穂、高木幸子、松岡秀樹

演題17　教育入院プログラムに導入した「患者間の語りの場（ひだまり）」を通して
糖尿病看護認定看護師
赤尾綾子、尾辻真由美

演題18　A 病院における卒後 3 年目看護師の社会人基礎力～社会人基礎力調査の結果から考察する～
看護師長研究会
神野美子、上原真知子、池田智子、松田理恵

演題19　3学年合同の看護研究および学習発表会における学びの分析
看護学校
石川志保

演題
14

退院先別の入院期間比較

事務部企画課
山並公彦

【はじめに】
現在、月次決算評価会等の場でDPCデータを用いて、診療科毎等のDPC期間別の割合やⅡ期間との比較等入院期間の比較を行っている。今回、様式1にある退院先情報（家庭への退院、転院、死亡等）を付帯させ、退院先別に比較した場合どのような差が生まれるのか検証を行った。
【方法】
平成28年4月から9月までのDPCデータを用いて退院先毎のDPC期間別の割合やⅡ期間との比較等を検証した。退院先情報以外の情報（年齢階級別等）も付帯させ検証した。
【結果・考察】
転院の場合、Ⅱ期間までに退院した割合が全体51.5%なのに対して転院の場合38.3%やⅡ期間との比較が全体1.27に対して転院の場合1.57と他の退院先に比べ入院期間が長くなる傾向にあることが分かった。
今後、転院時の在院日数短縮のため、他医療機関との連携強化等、具体的な改善方法を検討していく必要がある。

演題
15

母親を亡くすことの予期悲嘆、グリーフケアにチームアプローチしたネフローゼ症候群中学生の1例

東3階病棟[1)]、小児科[2)]、MSC[3)]
大塚瑞紀[1)]、田中裕治[2)]、徳永美菜子[2)]、水元玲子[3)]、森　鶴代[3)]、米森初枝[1)]

【背景】
母子家庭であり、母親が末期癌で当院に入院していた13歳男性。ネフローゼ症候群2回目再発でステロイド治療再開、一人暮らしをしており内服コンプライアンス不良のため入院となる。入院6日目に母親が永眠される。社会的ケアとして今後の身の振り方について児童相談所との連携や協議が必要であった。また、グリーフケアも重要と考え多職種と協同を行った。
【方法】
受け持ち期間中の記録を基に本児の言動、その時の行動を振り返り看護的側面から分析した。
【結果】
母親の病気について隠さない事、重要な決定については必ず本人に相談する事を伝えた。OPTIMパンフレット使用し、母親が亡くなるまでの経過、現在辛く感じている事は当たり前である事を伝えると初めて涙を流す事ができた。母親死後の進路決定ができるよう本児を含め面談を繰り返し、本人意思のもと退院後は私的里親のもとへ引き取られる事となった。
【考察】
死別を予期しそれを実際に体験した子供の反応は様々であるが、本児は泣くことを我慢して自分を保つようにしていると判断された。母親の病気について真実を伝え、同じ場所で最期の時間を過ごせた事で気持ちの整理がつき、自分で今後の進路を決めることができた。

演題
16

脳卒中看護連携におけるFIM 評価の現状と課題

東 5 階病棟
井手智子、恒吉美穂、高木幸子、松岡秀樹

【はじめに】
脳卒中の看護連携では必要な情報共有のために、ADL については機能的自立度評価法（以下FIM）を活用し情報共有を行っている。脳卒中看護連携における FIM 評価の現状と今後の課題を得たので報告する。
【方法】
A 病院急性期病棟から FIM 評価表を活用し連携した 6 施設 67 名の急性期退院前 1 週間以内と回復期入院 1 週間以内の FIM の点数を比較し分析する。
【結果】
FIM 評価の各項目の点数が完全に一致した症例は 3 例で、うち 2 例はすべての項目が 1 点の最大介助が必要な 18 点であった。急性期、回復期施設間の各項目で一点差内の一致率は、運動項目は 71%、認知項目は 69%であった。急性期と回復期の各項目の点数差は、運動項目、認知項目ともに、急性期が高く評価している割合が高く、認知項目に関しては最大で 5 点の差があった。
【考察】
急性期、回復期施設間の FIM 評価の各項目で一点差内の一致率は 6～7 割であり、必要な情報提供に繋がっているが精度を上げる必要がある。急性期病院が FIM 評価に慣れるためには、継続した学習が最も重要であると考えられる。
【結論】
1. FIM 評価の一点差内の一致率は 6～7 割であり、必要な情報提供に繋がっている
2. 今後、継続した学習が最も重要である

演題
17

教育入院プログラムに導入した「患者間の語りの場（ひだまり）」を通して

糖尿病看護認定看護師(外来)
赤尾綾子、尾辻真由美

当院では平成 24 年より、教育入院プログラムに心理面を重視して「患者間の語りの場（ひだまり）」を導入した。平成 25 年 4 月～平成 28 年 3 月に参加した糖尿病患者延べ 114 名の中で、患者の語りが多く聞かれたのは、1 型糖尿病患者であった。そのため、今回は 1 型糖尿病患者 14 名の逐語録を基に、得られた医療者の気付きを報告する。
ひだまりは「糖尿病に対する思い」をテーマに、座談会形式で開催している。語りの内容として、1、糖尿病に対する思い（悲嘆）2、家族・周囲に対する思い（葛藤・孤独感）3、同病者に対する思い（共感）4、療養に対する思い（否認・罪悪感）であった。また、長年外来通院している患者から、初めて聞く言葉や思いなど、負担感情も多く聞かれた。このことは、「評価されない場」で、安心して自己について語ることが、本音の表出につながったと推測される。
感情を表出できる場の提供は、同病者間の感情の共有やカタルシス効果につながり、医療者にとっても、患者理解を深めるうえで、重要な場といえる。
そして、いかなる療養指導の場においても、患者の負担感情に配慮し、感情を表出できる場の提供とともに、それを聴きとることの重要性を再認識した。

演題
18

A病院における卒後3年目看護師の社会人基礎力の現状～社会人基礎力調査の結果から考察する～

看護師長研究会
神野美子、上原真知子、池田智子、松田理恵

【目的】
「社会で活動していくために必要な力」が、昨今は弱まってきている。当院において、新人看護師のプリセプターを担う 3 年目看護師の社会人基礎力の現状を把握することで、効果的に新人看護師育成を行うための示唆を得るために研究に取り組んだ。
【方法】
「社会人基礎力レベル評価表」を用いた自己評価を統計学的単純集計
【結果】
対象者 27 名に配布し回収率 100%。3 つの能力の全体平均は、5 点満点中《前に踏み出す力》2.96 点《考え抜く力》2.69 点《チームで働く力》3.35 点であり、《考え抜く力》がやや低い得点であった。また。3 つの力を構成する 12 の能力要素では、〈働きかけ力〉2.30 点と最も低く、次いで〈創造力〉2.33 点であった。逆に〈柔軟性〉3.74 点と最も高く、次いで〈規律性〉3.70 点であった。
【結論】
1. 3 つの能力のうち《考え抜く力》が低く、12 の能力要素の中でも〈働きかけ力〉や〈創造力〉が弱い。この結果は、先行研究とほぼ同じ結果であった。
2. 〈働きかけ力〉〈創造力〉が弱く、これらがリーダーシップを発揮できない一因になっている。
3. チームカンファレンスを通し〈創造力〉を育成し、新人看護師指導において〈働きかけ力〉を育成することが重要である。

演題
19

3学年合同の看護研究および学習発表会における学びの分析

看護学校
石川志保

【はじめに】
本校の看護研究および学習発表会は、自らの看護を振り返り、看護実践の熟達に向けて探求していくことの必要性を考える機会としている。発表会は 12 月の中旬に行っており、平成 27 年度は 3 年生は事例研究、2 年生は自己の看護観、1 年生は看護技術のエビデンスの検証について発表した。
【目的・方法】
3 学年合同の看護研究および学習発表会を通しての学びを明らかにすることを目的に、看護研究および学習発表会後のアンケートの分析を行った。倫理的配慮は、質問紙は無記名とし、質問紙の提出をもって研究の同意を得たものとした。
【結果】
248 名に質問紙を配布、回収率は 99.6%だった。分析の結果、ほとんどの学生が発表会を通して学びを実感しており、学びの内容として、1 年生は 8 カテゴリー、2 年生は 9 カテゴリー、3 年生は 11 カテゴリーが抽出された。
【考察】
学生は、自己の看護実践や学習を他者に伝えることで、＜学びの気づき＞から＜学習の意欲＞につながり、実習に向けて＜目標とする自己の姿＞を思い描いていた。さらに他者の意見を聞くことで、＜看護の奥深さを知り＞、自己の理想とする看護師像をイメージした＜今後への展望＞となったと考える

編 集 後 記

この臨床研究部業績年報は、平成 28 年 4 月から平成 29 年 3 月までの当院の研究活動報告をまとめたもので第 17 号となります。各診療科および各部署の職員の方々の皆様の御努力に敬意を表したいと思います。

臨床研究部では「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」および「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」に基づき、文部科学省に「体制整備自己評価チェックリスト」、「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドラインに基づく取組状況に係るチェックリスト」を、厚生労働省に「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドラインに基づく取組状況に係るチェックリスト」を提出しています。研究不正および研究費不正使用は研究者として断固排除しないといけないというスローガンのもと、膨大な量の事務作業に悪戦苦闘しています。

平成 29 年 5 月 30 日に個人情報保護法が施行となり、これまであった「人を対象とする倫理指針」が改正されました。これに伴い、臨床研究部では管理課と協力して平成 15 年 4 月からの倫理審査委員会で承認となった研究課題を現在の新しい指針に沿うようにチェックしました。

また、職員に対するコンプライアンス教育のための「競争的資金等の運営・管理に関わる人員対象のコンプライアンス教育」と、倫理教育のための、「CITI Japan e ラーニングプログラム」の受講管理を行っています。

臨床研究部は鹿児島大学大学院医歯学総合研究科の連携大学院になっていますが、この編集後記を書いている途中で素晴らしいニュースがありました。当院検査科の山本将義君が大学院生として働きながら研究をして書いた論文が American Journal of Physiology に掲載され、平成 29 年 9 月 20 日の鹿児島大学院の学位論文公開審査を受け、医学博士を取得することが正式に決まりました。おめでとうございます。

最後になりましたが、この臨床研究部業績集の編集に際し、ご協力戴きました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

臨床研究部長　城ヶ崎　倫久